



花川戸助六

花川戸助六

第

壹

回

神田伯龍講演
丸山平次郎速記

六の實説をば伺ひますが、併し講談上に伺ひますると演劇等とは
餘程の相違でございまして、演劇の狂言の方では取分け此の助六の
役は彼の市川團十郎の十八番の内至つて皮肉物ださうでございまし
て、是れは二代目の市川團十郎が正徳の三年四月の頃江戸は木挽町
の山村座に於きまして花館愛蔵櫻と云ふ表題を下しまして花川戸助
六と云ふものを相勤めしましたが、是れ此の狂言の嚆矢でございまし
た、然るに此の團十郎は至つて諸侯様方より御最負を受け種々様々
なる品を拜領いたしまして我が家の寶物と致し大切に秘藏いたし居
りましたが、其の身も醫人の身でもりながら斯る結構な品々を拜領

致して此のまゝ我が家の秘蔵の品とのみで埋木に爲さんも實に惜し
きものであると心得ましたる所より、當時此の助六の狂言を致しま
するに付いて、右拜領の品の七品と云ふもの其の身に着け舞臺に顯
はれて狂言を致しました、其れは何かど云ひますと、第一に仙臺侯
より拜領致しましたる黒羽二重魚葉牡丹五ツ所紋付の小袖でござい
ます、今一ツは紫縮緬の願巻でございまして、川柳にもある通り助
六は江戸一番の頭痛病者と云ふことを云つてございます、必らず助
六の狂言には此の願巻を用いたもので、其れから今一品は黒蛇の目
の傘でございまして、續いて願箱の一腰でございます、背後には尺
八を差しまして、腰に一つの印籠を下げ、三枚齒の黒塗の下駄を穿
きます、之れを助六の七品と稱へまして、圖らず舞臺へ現はれ罷
の意休と云ふものを相手にいたして芳原太門口の送引と云ふものを
仕組んで演じました、其の後は此の成田屋の十八番藪と致しまし
て餘り他の俳優に此の狂言をさせぬくらゐでございまして、然るに
七代目の市川團十郎でございしますが、此の人は又至つてもものを細

に調べる質の人でございまして、何うも揚巻助六の狂言は我が家代
々の十八番藪と致して居るが、今以て此の江戸に比翼塚があると聞
いて居るもの、何れに在ると云ふその實地を未だ調べたことなく
大に之れを残念に心得まして、何うか揚巻助六の死骸を埋めた印
の石でもあらば取調べた上其の身一建立を以つて後世に其の碑を殘
したいと云ふので種々苦心の末、其頃仙臺の生れのものでございま
して立川馬と云ふ落語家がございまして、是れは中々古今の落語
の名人にて名人馬と云はれたくらゐな人でございまして、随分江戸
のことは隅から隅まで能く調べて行届いたものでございまして、
右の馬を招きまして此の語をいたし、何うか此の江戸表に比翼塚
があらば立派に建立したいと思ふから調べて貰ひたいと頼み込み
した、其處で立川馬も熱心に江戸の市中を探ねて歩きました、
何うも場所が少し悪うございまして、名前が出ないものと見えます
總じて斯様なことは場所の宜い所に餘りありませんので、先づ平
井權八小紫に限るやうに申します、と云ふのは彼れは小紫が宜い所

花川戸助六

所に比翼塚を残しましたものでございまして、一寸端唄の一つにも
残りませぬやうなことで、「傾城に真ないとは誰が云うた、眞實ある
まで買逃げもせず、目黒に遺る比翼塚」是れ即ち目黒山と云ふ所に
遺りましたから其れで新しく唄にまで残りませぬでしたが、誠
に比翼塚と云ふものが其の當時には分りませぬでした、漸う苦心の末
立川馬が發見しました、其れは淺草新島越日長山意行院と云へる
寺に遺つてございまして、其れも始めのうちは更に分りませぬでし
たが、彼の意行院に確かにあるに相違ないと思ひまして、段々和尙
に就いて當山に昔左様なことがあつたら立派に團十郎より石碑を建
立し後世に紀念と致したいと云ふ次第でありまして、乃ち私は願
れまして探ねて居ります、古い過去帳等のお取調べを願ひます
とありませぬから、和尙も早速過去帳を取出しまして調べて見ました
が、とんど古いのは類焼なぞの節に焼失つたものと見ゆまして是れ
と云ふものもございませぬ、依つて彼の寺の墓場を探しましたが一
向知れませぬ、大きに馬馬も力を落しまして寺を出で歸らんとしま

花川戸助六

す、此の寺の門前の筋向ふには一軒の石屋がございまして、店の
職人はコック、石工の仕事を致して居ります、處が年の頃七十の坂
を越したる老人が店の間に煙草を喫して居りますから道がは馬馬で
ございませぬ、何でも斯う云ふことは老人に聞いたら分らうと思ひま
して早速道入つて尋ねますと老人も暫し考へて居りましたが老人
成程、さう仰しやると私も少し胸裡に思ひ當ることがあります、揚
巻助六と云ふことは知りませぬが私は小供の時分からは是所に住んで
居りました、何でも九才か十才ぐらゐの頃でございまして、手習に
行つて歸途に近所の多くの小供と向ふの墓場へ遣入りました、之れ
が比翼塚だ、と云つて小さな石塔がございまして、其れをコック
が飲いて取つて、其れを持つと夫婦の中が宜くなると思つて遊ん
だことがございませぬ、確かに昔はあつたに相違ないから先づ篤と
探して御覽なされるが宜からう、このことに馬馬は大きに悦びまして
直ぐに寺へ引返し段々寺男諸共、共に調べて見ますと、今は地中に埋
れ其の石碑も取潰し片側の高塚の臺石と相成つて居りました、文

花川戸助六

字は幽かに遺つて居ります、正面には「圓譽貞三信女」「西入淨真信
士」斯く刻付けてございまして脇の方に揚巻助六比翼塚とございま
して寛文二十三年之れを建つると刻込んでございまして、依つて直
様市川團十郎に此の事を知らせますと成田屋も大いに悦び早速彼
の石屋を頼みまして立派に石碑を拵へました、尤も正面には揚巻助
六比翼塚と記し、七代目、市川團十郎之れを建つと致しました、其
れから追々聞傳へまして今以ちまして参詣人も數多あり花や線香の
絶間はございませんと云ふ、是れ即ち揚巻助六の比翼塚でございま
すが、作者も平井權八小紫のやうに何うか端唄の一つにも残したい
と色々苦心を致しました、目黒に遠る比翼塚と云うてこそ唄ひや
うございませぬが所が所がございませぬから字餘りになりまして唄には
作れませぬ、傾城にまことないとは誰が云うた、まことあるまで買
違ひもせぬ、淺草新島越日長山意行院に遠る比翼塚、餘り長たらし
うございませぬから唄には出来ませぬが併し石塔は立派に立つてござ
います、何うも男女の縁と云ふものは糾纏を以つて繋げる加へ繋ぎ

花川戸助六

つて居るうちに互ひに切れない、處が双方別れて見ると中々思
やうに行かないものでございまして、夫が死にますれば一つ穴に埋
めて貰ひたいと云ふので泣き悲しみまして詰り髪を切り再々男
は持たぬと云ふ者へになります、其れがもう百ヶ日が過ぎまして、
さて一周年にもなつて来ますと、何つまでも斯うして居ても詰らぬ
と遂に後夫を拵へるやうな事になりまして、詰り此の比翼塚
と云ふのは、其の身の夫が死にまして立派に石碑を拵へ百ヶ日
り百ヶ日一周忌なら一周忌を勤め上げまして、跡には何事も心残の
ないやうに致して置きました其の上夫の石碑の前へ参りまして「サ
ア、是れからお前さんの背後を暮らしてまゐります」と其の前で自害
をして相果てます、其の死骸を同じやうに夫の死骸を埋めてある
穴へ埋めますると云ふ、これを比翼塚と申しませぬ中々さう
敷あることではございませぬ、併し餘事はさて置きました揚巻助六
の實傳を是れより伺ひます、さて花川戸助六は出羽國新庄にて御
食祿六萬二千五百二十石を領されましたる戸澤大和守の臣下でござ

いまして、少しの缺點がありて助六の父なるものは浪人を致しまして、伴を伴れ江戸へ出まして淺草花川戸の戸澤長屋と云ふ所に住居を致して居りましたが、遂に助六の十八の年に父は歿しました、其れから後は唯助六一人で暮して居りましたが、何れも沙彌から長老に一足飛に出世をするものはございせん、助六とても始めは何でもない男でございまして一向名前も賣れませんでした、年二十一才の時に其の名を賣出しましたと云ふのは、此の戸澤長屋は凡そ四十軒許りの交際でございまして種々様々なるものが、住居をして居ります、處が是所に越後の國から出てまゐりまして、此の長屋に住居をして小間物の羅重を擔いで商賣を致し居ります、此の長屋に住居して云ふ男がございまして、至つて此の男は節儉家でございまして實に此の世へ金子を貯りに来たとしても云はうか、食ふものも食はず一生懸命になつて働きます男でございまして、食事も大抵はお得意先で馳走れますすくらゐ、一文の錢も決して無駄使はいたしません、唯金子の貯まるのを楽しみに働いて居ります、其の代りには働

日毎には必らず家主へ家賃を持つてまゐりまして、其の餘分は本月は是丈け残りしましたが宅へ置いときますと賊に奪れましてはなりませんから何うぞ家主様へ是丈けお預りを願ひますと、儲けて残しました丈けの金子は家主へ預けて居ります、今日しも重兵衛家主の宅へ出掛けてまゐりまして重兵衛是れは當月の家賃でございまして、何か外に三兩二分許り残りしましたが、此れも一緒にお預り置きを願ひます、家主は殆ど感心を致しまして、家主何うも重兵衛さん、お前のやうに一生懸命に働く人はない、併し長屋のものはお前のことを大變悪く云つてるよ、彼の重兵衛と云ふ奴は何が楽しみで此の世へ生れて来たのか、彼んな因業な奴はないと云つて悪口を云つてるが、私はお前の勤振には實に感心をして居る、悪口を云ふ長屋の奴は遠じか一度も滞礙に家賃を持つて来たことはない、何時も三度も五度も當方から催促をしても持つて来ない、併しお前は家賃の外に斯うして儲けた丈けの金子を私の所へ持つて来て預けると云ふのは申々感心なものだ、併し重兵衛さん金子も餘り溜りなさんな、お前の

の棚賣の婆の宅では大變に困つて居るよ重兵衛へ……何で……
 んが困りますのでか家主重兵衛さんも大概に金子を貯めるが宜
 い、餘り金子を貯めるものだから夜分になるとウソ……
 には大きに困ると此んなに云つて居たよ重兵衛……
 ん、彼れは様の下で犬が兒を産みましたのでございませ、其んなこ
 とは決してございません家主併し其れは何うでも宜いが重兵衛さん
 何つまでも働いて居ても詰るまい、お前に一つ私が女房を世話をし
 やうと思ふが何うだ、女房を一つ持つ氣はないか重兵衛、ハ、有難うご
 さいませ、私も最う此の年になりますから、何うぞ一人は持つて見
 たいと思ひますけれど、さて妙なもので女房が飯を食はないと宜
 しいが、必らず三度の飯は食ひますだらう、何うも其れが吝つてな
 らないと思ひますので家主、オイ、冗談ぢやアないせ、何所の世界
 にか人間で飯を食はない奴があるものか、何も女房が飯を食ふから
 と云つて又其丈の働をするではないか、尤もお前さんのやうな人
 に世話を仕やうと云ふには決して悪いものを持たさうとは云はない

私が出入をして居る、屋敷に永く奉公をして居た女で中々之れも
 前に能く似て細いことに掛けたら如才のない女だ、永い間勤めて居
 るうちにお給金の金子は決して無駄使にはしない、其の上着類は夏
 物冬物は申すに及ばず、一寸葛籠に二杯程溜めて居るんだ、さうし
 て裁縫は何でも來い、羽織でも袴でも何んなものでも女普通の裁
 縫は何でも出來るので、其處で其の女の言ふのには妾も親類のもの
 も少うございませすから生れ故郷へは歸りたいとは思ひません、何所
 か氣樂な所へ嫁きたいと思ひませす、亭主が菊石面であらうが、又何
 んな醜男でございませうとも、其んなことは少しも厭ひません成べ
 く働きのあつてお金子を貯めることを樂みにするやうな人が欲しう
 ございませす、斯う云ふんだ、何も妾が嫁いたからと云つて決して其
 の亭主に食さして貰はうとは思ひません、妾は妾丈に仕立物をし
 たり屹度一人前喰る丈けのことは働いてしますと、斯う云ふ女だ、
 其んならば嫁致が醜いかと云へば年は二十二で嫁致は十八並勝れて
 居る、丁度先方の注文がお前に持つて來いだ、随分お前も面倒な顔

色をして居るし、義理も人情も介意はないで金子を貯めると来たら、
 慾一方だから、丁度先方の注文通りだ重兵衛、モシ、家主さん、私の
 顔の横柄しは酷いぢやうございませんか、併し何ですか亭主に養は
 れないで裁縫をして食つて行かうと云ふ人です、ね、家主さうよ、重兵衛、其
 れで嫁致も美しいのです、ね、家主さうよ、金子も相當に持つて居て着
 類も澤山あるんだ、重兵衛、へ、其奴ア何うも有難うございませう、ぢや
 ア貰ひませう、何うか家主さん、今晚にも直ぐ伴れて来てお呉んな
 さいませんか、家主「オイ、一寸待ちなさい、犬や猫の兒を貰ふんぢ
 やアあるまいし、さう云ふ譯には行かない、先づ一寸見合もさせて
 さて縁があれば婚禮の當夜は、ア酒の一杯も買つて来て其れ丈けの
 儀式をしなければならぬから」と茲で家主は其の女を伴れて参り
 まして見合をさせました、が、互ひに合縁奇縁で氣に適りましたか、
 如何にも行きませう、彼れなら貰ひませうと斯う云ふ話に相成りま
 した、吉日を選んで萬事家主が媒介人となり世話をいたし其の夜は
 一寸儀式丈けのことをいたして、其處で媒介人は甲冑のうらと云ふ

ことがありますから、後はなる丈け中よく暮しなさいと言ひ置いて
 家主は引取つて了ひました、さて其の翌日でございしました、が、重兵
 衛は寢床の中から見えて居りますと中々ぬらい女で今朝も早く起きま
 して襟掛けで何が永らく獨身で暮らして居りましたから流許などの
 穢ないことは實に目も當てらぬくらゐ、充分掃除をいたして食事を
 拵へにかゝつて居ります、女房「ア重兵衛さん、彼の御膳が出来まし
 たから起きてお上りなさい」オッ、と来た寢床から起き出でまして
 手水を使い、膳の前へ座つて飯を食ひながら女房の顔を見て「ヨ、ヨ
 笑つて居りますから、女房は變な顔をしまして、女房「何だね、重兵衛
 さん、妾の顔を見て何を其んなに笑ふんです、重兵衛「イヤ、何も乃公アお
 前の顔が可笑くつて笑ふのではない、餘り嬉しくつて結構と思つて居
 るんだ、朝は獨で起きて乃公が御膳を拵へたのだが、成程嬉アと云
 ふものは持つて見ると價直のあるものだな……オ、第一お前の名前
 を尋ねることを忘れて居た、何とか云つたつけな女房「冗談ぢやアな
 いよ、今朝になつて其んなことを尋ねる奴があるものか、妾はお秘

と言ひます重兵衛さうか、お松かナアお松、お松、ハイ何だす重兵衛他事ぢやアないが媒介口と云ふことがあつて、總致は十八並だの衣物も澤山あるの、又金子も相當に持つて居るなぞと言つたつて正敷其んなこととはなからうと、實は斯う思つて居たのだが實に家主さんの云ふ通り乃公の氣に道つた、申分はない、又衣類も彼のやうに持つて居るし、昨夜第一寝る時にお前が蒲團の下へ密に入れて居たが何うやら彼れは金子のやうに思はれるが……併しお前に申分はないが彼の着物物の澤山あるのが第一乃公の所存に合はぬのだ、何故かと云ふと是れから春先になる、つひ若物があれば近所の衆に誘はれて一寸向島へ花見に出掛けやうとか、或は演劇の一幕も見物に行かうと云ふやうなことが出来る、甚だ宜しくない、何にもなければ決して其んな所へ行きたくも何ともないものだが彼の着物とさうしてお前の持つて居る金子を……何と物は相談だが乃公に皆貸しては呉れないか、お松は不思議な顔をいたしましてお松、其れをお前さん全体何をすのです重兵衛何にもしない、はんのお前が今入用の常着丈で一枚に

して置くんだ、一枚丈で其れで宜いだらう、其他は皆乃公が質に遣るんだ、さうして金子にしてお前の持つて居る金子と一ツに纏めて其れを問屋へ納めて置くんだ、さうする、つひ元の仕込も前金を掛けて置けば安いものが買へる、得意先にもなる丈で安く働いて賣れば手も出し易い、詰まり商賣が澤山あると云ふやうなものだが、何と皆乃公に貸しては呉れないか、お松、オヤ、重兵衛さん、妾も媒介口でお前は義理も人情も思はない人で稼ぐことに掛けては實に一生懸命だと云ふことを聞きました、本當に世の中にお前のやうな而の皮の厚い人はないよ、能くものを考へてもらん、何うにも斯うにも前夜漸う嫁いて来た許り、今朝になつて妾に皆着物を貸せ質に遣つて商賣の資本に入れるとは本當にお前は鐵面皮しい、だがお前の其の面の皮の厚い氣性に、實に妾は惚れましたよ、宜しうございませす皆お前に貸しますから……が併し能くものを考へてござん、質に遣つては利息が掛つて却つて高く付きますから寧ろ皆賣つてお了、重兵衛何んと云ふ、其れぢやア皆賣つて了へと云ふのか其んなこと

をしてお前一枚もないやうになつても宜いかねお松ハ宜いとも、
 欲しいと思へば金子を持つて行つて大丸で眺へたら一日の中にナヤ
 ンと仕立上げて四手の紙に包んで持つて来るぢやアないか、金子を
 貯めるのが肝心だから寧ろそのことを賣つてお了ひ」似たものは夫婦で
 ございまして到頭此奴も變らず賣りましたが、是れから重兵衛は一
 生懸命に稼ぎ出しました、又斯う云ふ女房でございますから直ぐに
 仕立物の看板を出しましてこれも一生懸命になつて夫婦互ひに競争
 でございます、處が一月程経ちますと、さしもの重兵衛も困りまし
 たな、茫然と致してお松に向ひ重兵衛ナアお松お松何だね重兵衛お前と
 ナア夫婦になつてから斯うして一生懸命に稼いで居るが餘り酷いぢ
 やアないかお松何が酷いんです重兵衛何が酷いつて一過もお菜を拵へ
 たことではないぢやアなりか、澤庵の古いのを二切づゝとは餘り酷い
 乃公ア腹に勢がなくなつたから今日は十五日でもあり寧ろこのこと賣
 譯なことを云つて濟まんが少し奮りたいと思ふのだお松其れだから
 可けないのです、お金子を貯めると云ふ奴が其んな了簡で何うする

のだね、全体お前何を奮る心算だね重兵衛何をつて腹に餘り勢がない
 から切めて少し脂肪いものを食ひたいと思ふんだ、寧ろお前と私と
 で油揚を一枚づゝ腹込んだら何うだらうと思ふのだお松贅澤なこと
 をお言ひでないよ、油揚何て其んな贅澤な奴があるものか重兵衛さう
 云やア仕方がないから兩人の中へ一枚買ふからお松ぢやア半分にし
 てお置き重兵衛オヤ、酷いことを言ふな、一枚の油揚を食ふことが
 出来ないのか」と漸う油揚一枚を買ひまして、其れに醬油を付け醋
 破りながら食事をいたしましたお松其れごらんな此んな贅澤かこと
 をするから……お前御飯を何杯食べるのだ、五杯も食べたぢやアな
 いか、例の通り三杯で宜いのに矢張お菜が甘いと餘計食らう
 重兵衛けれども何うか今日丈けは許して呉れ」さしもの重兵衛も譯を
 揚げたくらゐでございます、斯う云ふ都合で働いて居りますから金
 子は追々と出来ませんが、此のお松と云ふ者が重兵衛の許に嫁いで來
 まして、茲に一つの騒動が出来ましたと云ふのは、同じ此の長屋中
 に切られの藤次と云ふ無頼漢がございまして、此奴は博奕打の悪い

奴でございませ、宅には一人の母親がございませが實に親を忝使に
使倒して錢が少しでも出来れば博奕を打ちに行かうと云ふ、實に仕
様のない奴でございませ、此の野郎ある金子は皆無負られまして茫
然といたして居りましたが朝夕出入に重兵衛の女房を見て大に驚き
ました、彼の重兵衛と云ふ奴は食ふものも食はずに働いて居る奴に
似合はない彼んな美しい娘を持ちやアがつて、又向ふへ嫁いで来る奴
も来る奴だ、何うかして彼の女を手に入れたいものだと此奴は随分
亂暴な奴でございませして、丁度或る朝重兵衛が得意廻に出掛けまし
た跡で、様子を窺ひながらノッコー這入つて來ました藤次、オイお松
さん、大層お早うございませね、お松、オヤ是れは藤次さんでござい
ますか、お早うございませ、藤次重兵衛さんは最う商賣に行つたのか
いお松、ハイ、今しがた出ましてございませ、藤次、然うか御免なさいよ
と上端の火鉢の側へ腰打掛けながら藤次、時にお松さん、乃公、アお前
に一寸尋ねるんだがお前は全体何所の野郎に欺されて此んな宅へ嫁
いて來なかつた、全体何が見込で嫁いで來なかつた、是所の宅の重

兵衛と云ふ奴は食ふものも食はないで其の上には彼んな變的な面をし
て居やアがる、何うだものは相談だがお前乃公の娘アになつて呉れ
る氣はないか、さうすりやア乃公の宅へ出入をする奴等には姐御々々
々ど敬てられて何にもしないで火鉢の前に坐つて長煙管は年中放さ
せないで随分贅澤なことをさせて見せるが、何うだ娘アになつて呉
れる氣はないか、お松は呆れながら藤次の顔を見て居りましたが、
お松、藤次さん、御冗談ぢやアございませ、妾のやうなものをお腰
りなさるも程がありますよ、破綻に閉蓋と云ふことがありまして、
丁度重兵衛さんとは能く似合つた夫婦でございませ、藤次、オイオ
イ、冗談を言ひなさんな、其れ丈けの嬢をして居て、彼んな
野郎の娘アになつて居る奴があるものか、サア四邊に人も居ないし
何うだお松さん乃公の云ふことを諾と云うて聞いて呉れ、と忽ち手
を握りしめました、すると以前はお屋敷奉公の一つもいたして居り
ました女だから非常に立腹を致しまして突然平手で藤次の横面を一
ッ踏倒しました、餘りのことにアツと許りに驚きまして体裁悪る氣

に背後へ寄ると、お松何をしやアがる此畜生奴、延喜でもない朝ばら
 から人の宅へ遣つて来やアがつて尻殿にもことを替へて何だつて其
 んな餘計なことを言やアがる、畜生奴が」と呪付けましたから切ら
 れの藤次も只呆れ返つて顔を見て居ります、中々此奴悪いことに掛
 けては抜目のない奴で、平素なれば柄のない所へ柄でも付けて喧嘩
 でも仕たいと云ふ悪黨でございませうが、今日は自分が悪いのですか
 ら莞爾笑ひながら藤次「何もお松さん、其んなにお前のやうに酷く云
 ふものぢやアないよ、お前此の藤次の此の横面を打ちなすつたのは
 定めて何か氣があるから打つたのだらう、最う斯うなりやア仕方
 ねにお前に任じた此の身体だ、サア叩くなりとも打つなりとも何う
 とも勝手になさい」と凭つて来る奴をお松「オ、打たなくつて……」と
 續打に横面を五つ六つ拵倒しました、餘りのことに藤次は呆氣に取
 られ、御免なさいと其のまゝに戸外の方へ逃出ししました、併し是れ
 は誰も知つて居ない、詰り自分が悪いのでございませうから何事も言
 はず泣寝入となつて了ひました、其れから丁度四五日を経まして

友達を四五人伴れまして賭場の歸途と見ゆ丁度夜の明けた許り、彼
 の吾妻橋の近邊に夜明と云ふ一軒の料理屋がございませう是れは芳原
 の朝辰を引受けます所で、最う夜の引明けからチヤンと料理が出
 来ます、是れへ遣入つて参りまして頻に飲んで居りましたが、酔が
 廻ると藤次は他の奴等に向ひまして藤次「ヤ、手前送やア何と思ふ
 か知らねぬが、ア昨夜の仕事も手前達許り乗込んで行つちやア二
 歩か三歩かで追拂はれて了ふ所だが、此の藤次さんと云ふ氣の利い
 た兄いゝが遣入つた許りで五兩と云ふ金子を勝つて遣つたが……さう
 して見りやア是丈けの中で乃公が第一の立物だらう、甲「其りやアね
 ぬ成程前夜の仕事は巧く遣つたんだが、さう手前が自慢をするど乃
 公「手前のことも何も彼も言つて遣るぞ……オ、兄弟皆聞いて呉れ
 此の藤次つて野郎は女に掛けては三文の價値もねぬ野郎だ、藤次「ハ、
 ア何故、何うしたつて、甲「何うしたもねぬもんだ、丁度四五日以前
 乃公「藤次の許に用があつて出掛けて行つたんだ、すると此の野郎
 は彼の長屋の小間物屋の宅へ遣入つて居るんだ、何をするかと見て

すか藤次外ぢやアねねが乃公ア汝に少し無心があつた来たのだ重兵衛
 へーさうでございませうか、イヤ最うお長屋中に斯うして住居をして
 居りますから、大概のことなら他人ならぬ貸取のことでございませ
 が、最う此の節のやうな暇なことはございませぬ、全り商賣はござ
 いませぬ、毎日々々荷箱を擔いで江戸の市中を何のことはない全
 見物をして歩いて居るやうなことでございまして、其れゆゑトソと
 困つて居りますありさへしますれば、お前さんのことでございませ
 から如何やうともいたしますが……藤次「ヤイ、ヤイ人を馬鹿にし
 やアがるな、汝のやうな吝嗇な野郎から小籠一文借りやうと云ふん
 ぢやアねねや、乃公の無心で何のは金銭ぢやアねねんだ重兵衛、
 して何でございませう藤次其處に居やアがる手前の喚アだが、其の
 ア手前に少し過ぎたものだ實は乃公が暫く借りたんだ、長くとは
 云はない今日から三日の間乃公に貸して呉れ重兵衛、……ナ、何
 んど仰しやいます、私の女房を貸せ……して貴郎何うなさいませ
 藤次何うする奴があるものか、乃公が三日の間抱渡をするんだ重兵衛

へい……何うもか安いことと申したうはございませうが喚アと腰節の
 貸借は神武以來餘り聞いたことがございませぬが……藤次「ヤイ、
 ヤイ巫山戯た言草吐すな、其の代りに只借りやうと言ふんぢやアね
 ね、其の代りに乃公の首を遣るから重兵衛、……ヤア貴郎の方で
 はなくてばならない大切な首でございませうが、私の方で貰つた所
 トソと爲やうのないものでございませう、正敷お前さんの首を喚アの
 首の代りに使ふと云ふ譯になりませぬ、と云つて又干し固めて置い
 た所で煙草入の根附には些と六ヶ敷いやうに思ひます藤次「ヤイ野郎
 乃公の首を煙草入の根附だ……巫山戯たことを云やアがる、ヤア乃
 公も切られの藤次だ、斯う言出したからにやア借らなくつちやア承
 知をしねねのだ嫌だ吐しやアこれだ」と出刃庖丁を邊にグサツと
 突立てました、重兵衛はアツと許りに驚きまして戶外の方へ逃出し
 ました重兵衛「何誰かお長屋の衆来てお呉んなさいませ、早朝
 から私の宅へ喚盗人が来ました」とツイ、喚鳴つて居りますうち
 に藤次「ヤア、お松、汝ア此の間能くも乃公の横面を拵りやアがつた

な」と片手でか松の利腕を捉へ片手に出刃庖丁を引摺みまして戸外
 の方へ出掛けました、サア長屋のものは非常な騒ぎでございます、
 お松はアソノと膝を立てて居ります、近所のものは総出で
 なりまして切られの藤次が又々暴れ出した、誰か行つて挨拶をし
 て遣るものはないか、と願いで居りますが、誰も行かぬものはございま
 せん、何しろ相手は刃物を持つて居りますから、何うしたら宜からう
 か、とワイ云つて居ります、うちに、氣轉の利いたる一人は早くも
 藤次の宅へ知らせ、老母にさう云つて遣れと早速藤次の宅へ馳着け
 て参りました、母親に此の事を知らせました、依つて老母は杖に
 超つてトボク其の所へ遣つて来まして、老母藤次、お前は全休
 何と云ふ無法なことをするのだ、現在他人さんのお内儀さんを何う
 する心算ぢや、早つと其の手を放しなさい」と振放さんと致しま
 藤次、此の死損ひの梅干婆、何を巫山戯たことをしやアがる、
 汝のやうな老若れが出る場所ぢやアね、間諜突さやアがるど打殺
 して了ふぞ、老母云々、藤次、お前何と云ふことを云ふのだい、親

を殺して濟むか、藤次、ナ親を殺して濟むか……、俺棒奴、他人の親
 を殺したら濟まねわ知らねわが、乃公の親を乃公が殺すのに誰に
 遠慮があるか、總体近頃は餘り世間に親殺しがねわもんだから段々
 親奴が増長しやアがつて……、其方へ行け、間諜々々すると蹴飛ば
 すぞ、老母、ア此の子とされたことが其のやうな亂暴なことが出来
 か、早つと此の手を放すが宜い」と一生懸命に其の手に取付いて放
 うと致し、藤次、此の梅干婆、何をしやアがる」と片足を上
 げて母親の弱腰を蹴付けましたから、何條以つて堪りませう、遂に片
 側の泥濘の中へ轉り落ちて了ひました、さうなると長屋のものは天
 願ぎでございます、現在己の親を泥濘の中へ蹴込もうと云ふ無法な
 奴でございますから、此の長屋のものも誰も側へ進み寄つて止める
 ものはございません、只ワイ云つて騒動で居ります、所が此の
 長屋に住居をして居ります、助六は、昨夜は何か用向がありました、他
 所で泊まつて参りましたが、殿鞆の一刀を腰に打込んで今しも黙然
 己が宅へ戻つて参ります、長屋の中は大騒ぎ、〇オ、助六さん、宜

花川戸助六

い所へ歸つておいでなされた、お前さんは以前は浪人者で、劍術が出来る、と云ふことを聞いて居ました。……御覽なさい、切られの藤次が、彼の通りの亂暴をして居ります、小間物屋の重兵衛さんのお内儀を、んを引張り出さうと云う騒ぎ、何うか行つて止めて遣つて下さう、と大勢が頻りに頼みますから、助六は早速側へ寄つて参りました、助六、オイ、藤次さん、お前は氣でも狂つてやアしませんか、全体何が腹が立つのかは知らないけれども、お前の顔は立てるやうにしやうから、何うか兎も角も其の手を放して遣つて下さい、とグイッと利腕を一つ握り詰めた、腕に覺ゆるのある助六に確りと利腕を握ら

れましたから、藤次アッ痛た、と言ふうちに其の手を放しました、助六はソレッとお松に目配いたしましたので、お松は悦こんで露察の外へ逃出してしましました、すると此方は切られの藤次、藤次、ヤ、此の上からは手前が相手だ覺悟をしやアがれ、と出刃庵丁を振振り助六に向ひ矢庭に斬つて掛りました、助六は彼方此方に体を除し

花川戸助六

ながら助六、オイ、藤次、申戯ぢやアねいせ、何だつて手前は其んな無法なことをするのだ、と漸う出刃を握れる利腕を確り捉へました、處へ片側の大泥濘の中より漸う這上りましたのは、半身泥だらけになりました藤次の母親、涙に暮れまして、老母オ、助六さんではございませぬか、宜い所へお越で下さいました、是れを御覽下さい、現在の母親をば足に掛けて飛ばし彼のやうな泥濘の中へ蹴込みました、此のやうな悪性な奴を生存して置かしてはお長屋の衆が何れ程の迷惑をなされやうかも知れませぬ、何うぞ後生でございませぬから、助六さん、尊と貴郎の手に掛けて斯う云ふ奴は殺して下さう、さい、と涙に暮れたる母親の顔を眺めて居りました助六、素より此の人は親孝行の人です、から憤怒心底より發りまして、助六、其れぢやア老母、お前を足蹴にして泥濘の中へ蹴込んだのか、ム、ウ……ヤ、藤次、汝ア人間の情と云ふものを知らない奴だ、現在の母親を足蹴にして泥濘の中へ蹴込みは、如何にも貴様のやうな奴は存命して置か、老母ばかりではない、長屋の衆の迷惑、サ、此の上から

は助六が汝の一命は貰つた、覺悟をしる」と其の手を向ふへ突飛ば
 しました藤次此の野郎何を巫山戯たことを云やアがる」と再び出刃
 を振被つて斬込んで参ります奴を体を躲して助六は腰なる一ツの柄
 に手が掛るよと見わたるが、ヤツと掛けたる一ツに何條以つて堪り
 をせうや、左の肩口より右の脇腹へ掛けました、只一太刀に血煙立
 つて切られの藤次は其の所へ打倒れて了ひました、さて頼んだのも
 の、母親は餘りのことに驚きまして悴の死骸に取付いてワツと許り
 に泣き出ししました、ア斯うなりますと長屋中は大騒動でございま
 す、〇オイ、酷いことが出来たね、何と彼れを見る、到頭藤次
 を殺して了つたぞ、全体頼む奴も頼む奴なら頼まれる奴も頼まれる
 奴だ、何しろ助六を逃がしてはならない、ソレツ家主さんを呼んで
 来い」と直ぐに家主を呼んで参りましたが、見ると助六は向ふの方
 に血刀を提げて立つて居りますから、家主はガツ／＼慄へ出しまし
 た、家主セ、全体ナ、長屋の行司は誰だ、〇ヘイ行司は小口の源助さ
 んです、家主オ、源助、お前は行司なら長屋に事變が出来たのだから

早く行つて助六を縛つて来い、源助冗談云つちやア可けません、長屋
 の行司だからと云つて長屋に人殺しが出来たら縛ると云ふ行司札に
 規則は書いてはございませぬ、釣瓶繩の切れました時と芥の溜りま
 した時、又今月は非常に用が多うございまして四軒目のお徳さんが
 子を産みましたその祝儀を私が六文取込んで居るなんて餘計な
 悪口を云はれて居るんです、幾ら源助だからつてさう云ふ譯には行
 かないのです、其んなことを云ふ手間で家主さん、お前さんが行
 て縛りなさい、家主と云へば親も同様、店子と云へば子も同様です
 併し家主さん貴郎が行つて縛るなら氣をお付けなさい、助六は平素
 から大層お前さんのことを云つて居ましたよ、家主ナ、何と云つ
 て居たのか、源助何うも此の長屋の家主は因業な家主はない、家
 は無闇に上げやアがるし、屋根が漏つたつて桂が曲つたつて普請で
 へものは些つともしないから、何と云ふことがあつたら家主の畜生を叩
 斬つて遣ると斯う云つて居ましたよ、今向ふで藤次を殺したのだから
 側へでも行つたものなら其れこそ命はねえんだ、氣の故か大分家

主さん、お前さんの影が薄くなつて来たよ家主ヤイ、何を馬鹿なことを吐かしやアがる」ど家主を始め誰一人として側へ寄るものはございませせん、其のうちには助六は一刀を鞘に納めまして助六オイ老母お前の悴の敵は必らずお上で取つて下さるから何うかさう思つて下さい、サアお長屋の衆、何うか是所へ来て乃公を縛つて下さい」と覺悟を致して居ります、是れに依つて長屋のものはワイ／＼言ひながら側へ遣つて参りました、助六は一刀を前に投出し背後に手を廻しました、慥へながらも漸う細を掛けましたが、其のうちには町役より此のこゝを訴へましたので檢分の役人が來つて先づ藤次の死骸は一應改めた上取片付けを致しまして、取敢ず助六は人殺の犯罪でございませすから傳馬町の御牢内へ繋がれましてございませす、然るに大體は切られの藤次が充分悪い所から斯う云ふ次第に相成りましたので、先づ家主を始め長屋のもの其他一統から助六の命乞でございませす、尙又現在悴を殺せましたる切られ藤次の母親からも様々に歎願を致しました、何を云ふにも是れは丁度明暦二年の冬のこととござ

いまして、最う年内には餘日もなく何れ調へば春を迎へてと云ふこととに相成りました、其處で助六は御牢内にて年を送ることに相成りました、處が翌れば明暦の三年丁酉の正月十八日より十九日に掛け江戸表は於ては前代未聞、後にも前にも斯る烈しき大火と云ふものはないくらゐの火事でございませす、其れは本郷丸山の本妙寺と云ふ寺から火が出まして十八日から十九日にかけて實に江戸表は九分通り焼落ちました、最う佃の端まで持つて行つて焼落ちる所のない程焼盡して了ひました、此の出火に就いて十萬八千人と云ふ焼死人が出来ました、是れは實説でございませす、實に十萬八千人と云へば非常な騒がでございませす、是れは年代記に歴然と出て居ります、是れを明暦の振袖火事と稱へませす、併し此の十萬八千人死にましたものゝ追善、菩提を用ひまする爲めに、兩國の向ふに回向院と云ふ寺を公儀から建てられました、既に傳馬町の御牢内へも烈しく火餘程火が早かつたと思はれて、既に傳馬町の御牢内へも烈しく火が移つて参りますと罪人一同は非常の混雜、聞の聲を揚げましてワ

とに相定まりましたのでございませぬ、然るに此の火事に逃げ去りま
 したる中に助六は御牢内のうち西の二軒に繋がれて居りましたが、
 只内裏で兩眼を閉ぢて念佛を唱へて居りますから役人「オイ、貴様
 は何だ助六、ハイ私は花川戸の助六でございませぬ、役人「何故逃げない、
 早く逃げんか助六、イヤ最う逃げた所が致方がございませぬ、私は人
 を殺して斯うして御厄介に相成つて居るので、何れお仕置になる身
 体ですから、寧ろ是所でコンカリと焼いて頂いた方が優でございま
 す」と更に勵く氣色はございませぬ、役人「馬鹿なことを云ふな、全休
 手前が是所を立退いて呉れないと我々も逃げることも出来な、早
 く逃げる助六、さうでございませぬか、其んなにお頼みなさるやア在方
 がございませぬ、其れぢやア逃げて行かませう」と漸う一番跡より
 逃げ出しましたが、其のうちらに忽ち牢は焼落ちました、處が未だ灰
 掛けに及ばぬ所へ一番に立戻つて参りました助六「ハイ助六でござい
 ませぬ、漸う只今歸りました役人「コリヤ今頃歸つて何うする、最う三
 日の間何所かへ行つてゐる助六、さうでございませぬか、何所へ行つた所

イ、騒ぎ立てまするが何うすることも出来ませぬ、處が當牢屋同
 心石出帶刀殿早馬にてお願若けになりまして、牢番のものに申付け
 斯る非常の騒ぎであるから、七軒のお戸前を悉く開いて罪人一同助
 け出せよとのお下知に相成りました牢番併し是れは未だ罪の定まら
 ぬものも又種々取調中のものもありませんが、若し左様なことをいた
 しまして後日上よりお咎めを蒙りましたる節は……」と尋ねまする
 と帶刀「イヤ其の時には我等が身に引受け切腹を致して申開きをする
 から、兎も角も斯る非常の場合であるから悉く助けて遣れ」と、遂
 に七戸前の牢屋を開きまして一同の罪人を八方に解放ちました、
 是れ開も傳馬町の御牢内の解放の嚆矢でございませぬ、非常に此の
 時の働きに依つて後に石出帶刀殿は公儀より御褒美を頂きました、
 らる、併し此の後若し傳馬町御牢内へ火の掛ります時は此の例を
 以つて必らず戸前を開いて一旦は罪人を逃します、だが三日の間は
 立歸らざる時は逃走の罪が非常に重くなりませぬ、又此の出火終つて
 直ちに立歸ると云ふことになりませぬと必らず其の罪を減じられるこ

で仕やうもございませす、何うか切めて假屋建の出来をするまでの間は何か御用がありませすなら何か手傳はして頂させう」と早々人足代りに働さ出しました、之れが上のお耳に入りまして非常に御感心になり、銀火後第一番に立戻りといふ点を以て元來開合せも宜い助六でございませすから、遂に無罪放免となりまして以前の花川戸に住居の出来るやうに相成りました、すると助六は直様切られの藤次の母親を自分の宅へ迎へ取りまして、我が母の如くに大切に世話をいたしました、是れまでとは違ひまして老婆も誠心に結構な自分でございます、今日は藤次の命日だから参詣の一つもして遣れど、小使錢を與へまして寺詣りをさせやうと云ふ、誠に結構にして呉れますので大きに母親も悦びまして世話になつて居りましたが、其後二年程経つて死去いたしましたる時も充分の手當を致しました、是れに依つて此の界限のものは實に助六の氣風を感じまして、親分を持つなら彼のやうな人を持ちたいものと追々助六を慕ひ、乾兒のものも増けて参ります、さうなりますと向ふの間違此方の喧嘩と日々其

の仲裁を頼み込んで参ります、助六が遣入れば早速ことが納まること云ふ次第、助六も追々と斯る仕合せで身入りも宜く、今では淺草花川戸に立派な表構の家を造り、其れに引移りまして、乾兒のものを黒手組と稱へまして決して人と喧嘩口論はならぬ、又弱きものは他くまでも除けて通り、邪非道のものなれば取押へるが宜からうと、實に此の頃は花川戸に彼の幡隨院長兵衛が住みました跡でございまして、助六は賣出して参りましたが、三十五の年齢までは別に變つたお話をございませせんが、圖らず寛文の二十一年十一月の下旬にお田樂酒賣の新兵衛といふ者の一條から、茲に一つの大騒動を惹起しまするお話を、開は追々に申上げませう。

第三回

さて前回に伺ひましたる如く助六も二十一才の年より大いに其の名を賣出すことになりましたして、丁度三十五の年までは之れと云ふ變つ

たお話しもございませぬ、頃しも寛文の廿一年霜月の下旬のことござい
 さいました、助六の宅には絶えず四五人の乾兒が居りまして今日
 は夜に至りましても皆何所かへ遊びに行つたものと見ゆまして誰も
 歸つて参りませぬ、宅には六十格好になる雇妻さんが一人置いてご
 さいます、助六、婆さんや若へ奴等は誰も歸つて来ないか、婆左様で
 さいます、親分、何誰も歸つて参りませぬがもう大分遅うございませ
 ぬ、助六、ム、大方芳原へでも遊びに行つて了つたのだらう、ちや
 ア戸締をして寝るが宜い、頼て助六は寢床を敷へさせまして遂に其
 の夜は寢込んで了ひました、翌朝になりまして起出でまして何分
 戸を開けんじしませると中々堅くつて開きませぬ、漸う力に任せて
 グツと開けませすと下の方か凝結いたものと見ゆまして庭前を見ると
 助六「オヤ、大變な何うも大雪だな、近頃珍しいことである」と、
 見ると何うやう二三寸は積つてございませぬ、婆アは漸う煙草盆に火
 を入れて其れへ持つて参りました、婆親分今朝は何うも酷い雪で
 さいますね、助六「ハ、ア大方此の雪で若へ奴等は降込められて其れ

で歸つて来ないのであらう、頼て奥を掃除をさせまして朝飯も済ん
 で一室で類に煙草を喫んで居る處へ歸つて参りましたは乾兒のうち
 喋々の源次、疳癪の藤吉、狸の傳次と云ふ三人の者、惣を二束許り
 提げまして一人は三升桶を引擔いで、一人は竹の皮に餅の新しい奴
 を二百目許りも買つて来たものと見ゆまして、傳次親分只今歸りまし
 た、何うも誠に昨夜は済みませんでしたかね、北廊へ行つて居りま
 して歸らうと思ふと大變な何うも雪降でして、マア今日あたりは此
 の雪を肴にしたら飲めるだらうと思つて土産を買つて来ました、何
 うです親分惣餅で一杯遣りませうか、助六「手前達やア人を馬鹿にして
 やアがる、誰なりと歸つて来い、誰もまた歸つて来やしね、傳次「オ
 ヤさうでしたか、大金の兄貴が宅に居るだらうと思つたのですが、
 ちやア一人も歸つて来なかつたんですか、其りやア不自由をさせま
 して濟まないことでした……何だ兎も角も源次火を起せ、乃公「料
 理に掛るから」三人の乾兒は遠所でマア支度をいたしまして奥
 へ送爐を持つて参りました、惣餅をポックと煮き始めましたが、

助六も満更悪くはありませんから其の乾兒の中へ這入つて一杯飲んで居りましたが遂に其日は一日飲暮して了ひましたものと見えて夕景になりまして藤吉ねね親分、到頭三升空けて了ひました、宅には三つ割が付いて居りますすが彼れを出しても宜うございますか助六、ア飲みたければ勝手に飲むが宜い、其處で又夜に至つて汲み始めました、最うさう斯うするうちに亥刻でもあらうかと云ふ時分藤吉、ヤイ傳次今銚子を付けて来たのは手前か傳次さうよ藤吉、筈棒り、人を馬鹿にしやアがる……親分何うしませう酒がなくなつたのですよ、助六、最う廢せ、手前達やア朝から喰つて居るんだに幾ら飲むのだ、最う乃公ア飲めないから廢さう藤吉でもねね親分、跡に酒がありまして是れで廢しに仕やうと云ふ奴は滿更悪くもございせんが最うないから廢さうと云ふのは可かんぢやアありませんか、ねね……オイ何うしたものだらう、買つて来ませうか助六馬鹿を云へ、何時だと思つて居る、最う亥刻だぞ、今頃買ひに行つたつて減多に賣つて呉れやアしない、乃公ア最う廢さう」と頓て臺所へ來りまして茶

漬の一つも食つて居りますが、三人の乾兒は中々堪らぬものと見えてまして傳次「オ、オ、手前行つて買つて来ないか藤吉ぢやア乃公が行つて来る」と雅瓶の藤吉は樽を提げて戸外へ出掛けました助六野郎今から行つたつて賣るものか藤吉でも親分待つてお呉んなさい、一寸反問苦肉の計略を以て買つて来ますから助六人を馬鹿にしやアがる勝手にしろ」と頓着をいたしません樽を提げて戸外へ飛出した一人の乾兒藤吉「オヤ、未だ降つて居やアがるぞ、是れはもう堪らない」と云ひながらド、ド、ド、と駆け出してしました、跡に残つた二人の乾兒は火などを起して待つて居ります、暫くするうちに茫然として藤吉は立歸つて参りました傳次何うした藤吉可けない、計略が到頭相違をしたのだ傳次人を馬鹿にして居やアがるな此畜生手前の歸るのを待つて居たのだ、大方手前の計略は分つて居らア、廢て居る酒屋の表をば錢でコッ、叩いて現金で買ふと云ふ体裁に持込んだのだらう藤吉然うぢやアねね、此の寒いのに寢て居やアがつたら減多に起きさうにもないと思つたから火事だ」と大變に嗷鳴つた、

ボト／＼垂しながら荷物の彼の迭爐からパツ／＼と火の出ます所へ手を當てましてガタ／＼慄へながら取暖つて居ります様子を眺め助六は見て居りましたが助六「オイお田樂屋、大層今夜は冷ゆる碗たお前も何うも其處に立つて居ては寒くつて仕方がなからう、爺い何う致しまして……」助六「ヤイ野郎早くして遣れ藤吉ナ親分其んなに急なくつても宜いのです、ナア爺さん暇が要りやア要る丈け商ひがあるてへなもんだ、爺左様でございます、何うぞ御悠り召上つて下さいますやう助六「ヤイ野郎彼のお田樂屋を見る藤吉「ハハ尻尾を出して居ますのか助六「馬鹿を云へ、爺さんは是所に火鉢があるから是所へ来て腰を掛けて暖りなさい、爺「ハハ親分有難うございます助六「お前は何か宅は何所だ、爺「ハハ私は當時石町一丁目に住居をして居ります助六「石町だ、爺「ハハ助六「大變な所から来るな、石町邊りから此の邊へ来ないと商ひが出来ないか、爺「ハハ今は石町に住りますすが以前私は千住の掃部宿に住んで居りました、其の時分には終始此の界隈を商ひをいたして廻りました、其れでア彼のお田樂屋が來たら

買つて遣れと云つて待つて居て下さるお方がございますから、ア時々此方へも廻つて参りますのでございます助六「ア、さうか、併し爺さんお前は幾才だ、爺「ハハ何うも親方、最う駄目でございます、六十三になりました……助六「ハハ六十三にもなつて夜此んな商ひをして行かなくつちやアならないと云ふのはお前も餘程苦勞人だね、全体子はないのか、爺「子は一人をさいますので、其の子で苦勞を致します助六「して見るとお前の子は餘程親不孝だ、野郎かい爺「い、女でございますので助六「ハハ、ウ女でありながらお前を斯うして夜半商ひをして歩かせやうと云ふのも餘程ア腐れ女と見ゆるな、爺「中々以ちまして決して不孝者ではございせん、至つても終つて死うかと思ひます、餘り孝行が過ぎますから其れゆゑを昔私を孝行にして呉れます、爺「孝行が過ぎますから其れゆゑを昔もお前の言ふことは全然分りやアしね、全体孝行な娘を持ちながら死ぬ何かと云ふのは悪い了簡だ、何う云ふ次第か其の仔細を一惡り云つて聞かしな、乃公ア當時此の花川戸に住居をする黒手組の助

六と云ふものだ、又都合に依つたら相談相手にもなつて遊るから、爺へイ御親切に仰しやつて下さいまして有難うございますが、イヤ最う只今の私の身の上、お話し申すも面目次第もございませぬ、只今私は石町一丁目の家主佐兵衛の店に住居を致たします新兵衛と申しませぬものでございませぬが、丁度指折敷へて見ると今を去ること十三年前のこととございませぬ、千住の掃部宿に住居をして居りました時に、女房は大病で殊に永らくの間病はれまして困つて居りましたが、其の節十二になる一人の娘がございませぬ、名をおどわと申しまして其れが健氣にも、何うぞお父さん私の身体を芳原へ沈めてお金子にいたしてお母さんの病氣を治して下さいとの頼み、うた子に教へられ後瀬を渡るの慣ひ、其れではさうして呉れと頼みまして、翌日娘を伴れ芳原へ参りまして三浦屋と云ふ店へ勤奉公に遣りまして、丁度私の身入金が三十兩と云ふものございまして其の金子を貰つて歸らうとする時、判人の宅で私も大層馳走になりまして、微酔機嫌で夕景のこととございませぬが骨ヶ原へ遣つて参りま

すど、向ふから頼蒙をした男が行違ひさまと私に行違ひました其の時に三十兩の金子を兩取られまして宅へ歸つて氣が注ぎました、何分女房の病氣なり如何とも仕やうがございませぬから、翌日又右の判人の所へ参りまして段々其の仔細を云つて何うか娘の年期を今暫く延ばして、少く金子を借りて下さることは出来ませぬ、いかと頼みますと、判人さんの申しませぬには、其れは可かぬ、昨日お前の娘の漸う證文が濟んだ許り、其れを今日になつて年期を延ばせてへなことは到底其れは可けな、其れは彼の子が直ぐに間に合ふものなら又格別、ア之れから二三年の間親方の宅で手入をして仕込まなければならぬ、言つた處が駄目だから斯うしなさい、お前も金子がなくて困るのなら乃公がお前に五兩貸して遣るから、兎も角も其れを持つて歸つて其れで何うとも始末を付けるが宜いけれど、乃公も有餘つた身上でもなし利の付く金子であつて少々利も高いだが別に今返せと云ふのではない、お前の宅の娘が一人前間に合ふやうになつてから返して呉れるが宜い、だが人間は老少不定と云ッ

て、若しお前が死ぬやうな事になつて乃公は五兩の金子を損する譯には行かぬから、拂ひの出来ない時はお前の娘を乃公が養女に貰う受ける事斯う云ふ都合の證文を書いて置いて呉れど斯様の次第でございまして、私も苦しい時でございましてから其の證文を認めまして五兩貸して貰ひ其れで何うやら斯うやらマアして居りますうちに、遂に其の後婆さんも死にまして、其れから私も四五年前に千住の掃部宿をば轉宅しまして石町でマア只今の所に住んで居るやうなことで、私の娘の年限は昨年漸う満きましたので、右の判入の許へ娘を戻して貰はうと談判に参りますと、何時なりとお前の娘だ、如何にも年期も満いたことだから伴れて歸るが宜い、併しお前に貸した金子は何うして呉れる、丁度當年まで利息を積つて見ると四十二兩三分二朱となる、其れを拂つて娘を伴れて行くが宜い、又其れを拂ふことが出来なければ約束通りお前の娘は私が貰ふと、斯う云ふ談判でございまして、私も實に驚きました、何で又其んなに金高が上りましたのでございまして、私も實に驚きました、五兩貴郎にお借り申しました金子

でございまして、お伊、爺さん冗談言ひなされるな、乃公はお前に十五兩貸してある、其の十五兩の利分を積つて見ると丁度當年までに四十二兩三分二朱になるのだと斯う申します、私は五兩しか借りませぬから不思議に思ひ、其處で證文を見ますると何の程にか十五兩になつて居ります、全く謀害謀判をいたしましたものと見えますから段々談判ひましたが何うしても承知をして呉れませぬ其れが爲めに矢張り娘は未だに勤めをして居ります、彼ア云ふ悪性な奴に娘を取られまして生涯娘は廓を出ることが出来ませぬ、寧ろそのこと味氣なき世に存命ますよりは死んで了つた方が優だと思ひましたことは度々でございまして、涙を流して物語りしました、眠りて居りました助六は助六、ウ其れは何うも氣の毒だね爺さん併しお前の娘は何と云ふ名だ新兵、ヘイ其れは三浦屋の揚巻太夫と申しまして……助六何だと三浦屋の揚巻……ア、今三浦屋で全盛と云はれた揚巻のお前は父さんか新兵、ハイ、して貴郎は御承知でございませぬか助六、知つてる、乃公は始終北廓の揉合の話のことに就いて

て出掛けるから三浦屋も至つて心安い、揚巻にも兩三度會つたが其
 の判人云ふのは其れは何所のものだ新兵、ハイ其れは芳原揚屋町に
 住居を致します松鶴屋の紋兵衛と云ふ男でございます助六何だと紋
 兵衛だ、其れは可かぬ、爺さん彼の野郎は以前芳原の門番をして居
 やアがつて其れから成上りやアがつた奴だ、人呼んで彼奴のことを
 國魔の紋兵衛とも言ひ、又人の油で己の身を照して居やアがるから
 小燈紋兵衛と紳名を博つて居る奴だ、其んな悪黨に掛つちやア其れ
 は爺さん、お前が幾ら談判をしたつて到底駄目だ、乃公も漸更聞い
 て見れば棄て置く譯にならないから乃公が一つ何うかして話を着け
 て娘をお前の手許へ歸るやうにして遣らう新兵、ハイ何うも親方有難
 うございます、何分宜しうお願ひ申しませす助六、マア兎も角も今晩は
 夜が更けて居るから宅へ歸りなさい……ヤイ野郎早く器物を空けて
 遣れ」と言ひながら紙入から金子を二分取出しまして助六、マア爺さ
 ん寒い時分だ之れで何か暖いものでも喰つて歸りなさい新兵、誠相な
 親方、娘のことをお願ひ申して置いて尙だ其の様なもの……助六、

ナ、ハア僅かなことだ持つて行け新兵、御親切の程有難うございま
 す」と涙に暮れて爺は押頂きました藤次、オイ爺さん器物が開いたよ
 持つて行きな助六、ヤイ野郎、手前達は濁酒を散々飲んで錢を拂はな
 いか藤次、親分、貴郎が金子をお遣りなすつたら其れで宜いぢやアあ
 りませんか助六、馬鹿を云へ、是れは乃公が別に心付を遣つたのだ、
 手前達やア物を食つたら錢を拂へ藤次、オイ、爺さん幾らだは、
 新兵、い何う致しまして、是丈け頂きますれば結構でございます、
 藤吉、知れたことを云へ、乃公だつて其れを見て居るから遣るまいと
 思ふが、遣らないと親分に叱られるのだ助六、野郎者なことを云はず
 に濁酒代として金子の一分も遣れ藤吉、オヤ、飛んでもねは高い濁
 酒だな、頓て拂ひを致しましたが、新兵、爺は可憐さうだな藤吉、だ
 立歸つて了ひました助六、ア、何うも彼の爺は可憐さうだな藤吉、だ
 ねは親分、可憐さうは可憐さうですけれど、私共も可憐さうです、
 助六、何だ、手前達やア何が可憐さうだ藤吉、さうです、一日宜い塩梅
 に飲んだが酒が足りないからと云つて濁酒飲んで居ると彼の爺奴、

花川戸助六

水筒を垂しやアがつて、ヤア今を去ること何年前だとか陰気な話をしやアがつて飲んだ酒が皆醒めて了ひました助六馬鹿を言へ、早く寝ろ」と其夜は皆々寝込んで了ひましたが、翌朝は大層宜いお天気でございます、助六は朝の食事が済みますると鞍鞆の一腰を差しまして助六ぢやア乃公ア一寸行つて来るよ藤吉親分前夜の一件の談判で……お供いたしませうか助六ナニ手前達やア来るに及ばね」と只一人で宅を出まして彼の揚屋町の松鶴屋紋兵衛の宅の表へ遣つて参りました、すると紋兵衛の乾見は戶外に積つた雪を掻いて片付け居ります助六、オイお若へ衆、爺さんは最う起きて居なさるか、若いものは振返つて見ると助六でございますから若者、イヤ是れは黒手組の親分さまでございませうか、未だ宅の親分は寝て居ります助六、然うか、氣の毒だがね一寸爺さんにさう云つて呉んな、花川戸の助六が少しお話し仕たいことがあつて来たからと若者、イヤ長まりました何うぞ此方へお道入を願ひます」と表の室に待たせて置さまして火鉢などを其れへ持つて参りました、人の乾見は奥へ遣つて参りま

花川戸助六

した乾見親分一寸何うかお目覺めを願ひます、今花川戸の助六親分が何だか貴郎に會ひたいと申して参りました紋兵衛ナニ助六が来た、乾見、エイ紋兵衛、確な奴は来やがらね、乃公の宅へ遠衆何か来やアがるのは何うせ確なことぢやアね、不承々々ながら寢床から出まして手水を使ひ、荒い堅縮の厚袍には八端の平締の帯をグツと前で結び、銀鎖の煙草入を携へ紋兵衛の爺はノツソリと店の室へ出掛け参りました紋兵衛、オヤ、黒手組の親分さまでございませうか、折々當所でお見掛け申しますが別に此方も用事がないものですから御挨拶もいたしません、エ、大層お早うから何か御用でございませうか、助六、爺さん始めて會ひますが今日来たのはね、外の事だやアない、少しお前さんに頼みがあつて来たのです紋兵衛、エイ何でございませうか、助六、外ぢやアないが三浦屋の抱へに揚巻と云ふ花魁があるな、紋兵衛、エイ、助六、其の揚巻の親に當る新兵衛と云ふものは乃公のヤア縁者の端くれだ、今年度段々話を聞いて居るとお前に五兩の借金があるさうだ、去年から年期の滞りて居る揚巻を其の借金ゆゑに自分の手許

へ引取ることも出来ないので非常に困つて居るのだ、彼の話、全休何うなつたのだ爺さん紋兵「ハ、アさうでございませうか、何の御用かと思ひましたら揚卷の一件でございませうが、イヤ親方、貴郎の爲めに何う云ふ御親屬かは存じませせんが、私も随分人に頼まれて奉公人の判も澤山して居りますが、彼の爺程譯の分らぬ奴はございません、彼奴は老若して居りますアござつて、云ふには及びませんか、らね替いたものがござりますから……野郎一寸来い、若者、イヤ紋兵、奥へ行つてね證文函を持つて来い」目の前で蓋を開けて、數通の證文の中から一通を取り出し紋兵「ア親分、是れを見てお呉んなさい、是れは彼の爺が書いた證文です、十五兩の證文ですが、尤も其の時に諸人と云ふのは千住の掃部宿の佐兵衛の宅の庄入と書いてありませうが此奴は死去なつて了ひました、借用主が新兵衛でせう、丁度去年々期の満いた時まで勘定して見ると四十二兩と三分二朱になるのです、だから其の金子さへ持つて来れば何時でも渡して返るのです」助六は暫く證文を眺めて居りましたが助六「何程證文に

は斯う書いてある、だが新兵衛の爺は五兩しか借りないと云ふが其處は何か行違ひであらう、だが十五兩にした所で全体去年に揚卷の年期は満いて居る、其れをお前が當年まで勤めさして置きやア撥分かお前の方へも通入つて居るのだから、乃公も無理なことは云はね、其れを利分と思つて乃公が是所で十五兩出さう、だから其れで負けて遣つて呉れねば紋兵「イヤ、お前さんは花川戸の親分だけであつて話が早うございませうが、其れがねお前さんが堅氣の人間とかが常のお方でございませうれば宜うございませうと言ひたうございませう、當時貴郎は花川戸の黒手組と云つて賣出して居らつしやる親分だけ、お氣の毒でございませうが私の方は四十二兩三分二朱より一文も負からないのです助六「ム、ウ助六丈けに負からぬとは何う云ふ譯だ紋兵「ア能く考へて見てお呉んなさい、私は四十二兩三分二朱は取れる金子ですよ、其れを貴郎のやうな親分が中へ通入つて斯う云ふ話を頼んだら撥分か負けるだらうと斯うなつて来ると實に私も困りま

すから、何うも負ける譯に行けねるのです、別に其れを私は催促仕
やうと云ふのぢやアなし、今分の所では親許の方は打遣ら加してあ
りますから、其れで私の娘にした積りで働かしてあるのですから、
何うかマア宜しく、お断を申します」腹の中では助六も思ひくしい奴
であるとは思ひました、金子ゆゑに何うも後へ退いたと云はれて
見れば残念でございませうから助六「ぢやア何うしても負からぬと云ふ
のか紋兵へイ負かりません助六「イヤ宜しい乃公も助六だ、金子ゆゑ
此の話を尻込みをしたと云はれて見りやア面が立たねぬ、ぢやア出
さう四十二兩三分二朱、出しやア言分はあるまいな紋兵へイ其れは
金子を出して親許へ引取るに云ふのですから言分はございませぬ、
だがね去今は爺から此の話を出来ませればマア其れで了ひなのです
其れを新兵衛が黙つて捨て置いたのですから、私だつて鬼ぢやア
なし揚巻はマア私の娘だと思つて居ります、何時までも勤めをさし
て置くのは可憐さうだと思ひ、實は揚巻を今度神田紺屋町一丁目
町道場を構へて居らつしやる撃劍の先生で鳥居新左衛門と云ふ方

がございませぬが、其れへ嫁に遣はす約束がぢやんと出来たのです、
何うか一應貴郎の方から其の鳥居の旦那の方へお渡りなすつて、
う云ふ譯で實は親許へ引取るからと云ふお話をなすつて下さい、鳥
居さんの方で承知をなすつたら私の方では少しも言分はございませ
ん、だがね親分相手が親分の先生ですから一旦約定が済んで了つ
たものを登や諾と云ふまいと思ひます助六「ム、さうか、其れはナ
行細のないことだ、相手が劍術使だからと云つて話を持込んで行つ
て分らぬこともあるまい、ぢやア乃公ア今日行けたら行くし行けな
かつたら明日でも出て行つて其の話を付けるから、金子を持って来
た時に鬼や角うはあるめへな紋兵へイ其れは最う少しも彼れ思は
とさいません」見す、此の爺奴謀書謀判をして居るとは思ひまし
たが、何分俠客のことでございませぬから其んなことをガヤ、言つ
て上へ願出すと云ふのは餘り譽めた話でもございませぬ、其處でマ
ア詰り金子を出すに云ふ積りで助六は其の日は立歸つて了ひました
跡で紋兵衛の爺は考へました、紋兵「エ、要らぬ所へ邪魔者が来やア

がつた」と叱りながら頼て食事をしていただきますと紋兵衛野郎若者へい
 紋兵衛「籠を一挺云つて来い」そこで乾兒は直様駕籠を眺へました、
 駕夫へ「親方何方へお供致します紋兵衛神田紺屋町へ遣つて呉れ駕夫
 承知致しました」此の駕籠に打乗りましたと急いで参りま
 した、其頃神田紺屋町に町道場を構へて居ります鳥居新左衛門の
 門前で駕籠から降りた紋兵衛一寸待つて居る、都合に依つたら
 直ぐに引返すから、頼て玄関へ掛りまして紋兵衛へ「お頼み申します
 門弟、い」と一人の門弟が其れて出掛て参りました、紋
 兵衛が「紋兵衛へ先生は御在宅でございますか門弟、先生は居らつ
 しゃる紋兵衛では何うかお目通を願ひます」門弟は奥へ遣入つて参り
 まして門弟先生芳原の紋兵衛が遣つて参りました新左衛門、おやア此
 方へ通せ」暫くすると案内に伴れまして奥の室へ遣つて参りました
 紋兵衛「紋兵衛先生大きに何うも御無沙汰を致しました新左衛門、紋兵衛
 乃公も一遍手前の方へ行かうと思つたが、揚巻の一件は何うなつた
 のか紋兵衛へ「其のことで今日は参つたのでございます、最う今日中

に彼女を落籍して了つてア貴郎の方へ差出さうと思つて居りました、
 處が今しがた花川戸の助六と云ふ奴が揚巻の親から頼まれたと
 云つて来ましてね、只今親許へ渡して呉れと云ふのです、イヤ然う
 云ふ譯には可かない四十二兩三分二朱と云ふ金子の貸しがあるから
 と言ひましたら、其の金子を拂ふと云ふのです、何うも向ふから拂
 ふと云つて見りやア親許へ返さないと云ふ譯には行きません、大變
 困つたことが出来たので、でア貴郎の方へ相談に来たやうな譯で
 す新左、其れは可かぬ、年期が満きますれば彼女は私の娘で自由にな
 りますから貴郎にお上げ申さうと貴様と言ふから其れで手前に度々
 金子を貸して遣つたのだ其れに今となつて其んなことを承知しない
 ぞ紋兵衛「サア貴郎の方へ出ればさう仰しやるだらうし向ふは達衆だし
 誠に私は困りますので、おやア手取り早く斯うしませう、誠に済み
 ません、貴郎は所で百兩の金子が出ませんか新左、ナ、百兩、百兩の
 金子を出したら何うする紋兵衛、其れで貴郎の方へ全然と揚巻をお渡し
 申しませう、最う其の代りに貴郎に金子の御無心に出やうとは云ひ

「百兩の打ち切だ、彼のくらゐな貴郎全盛な花魁を百兩なら安
いものぢやアございませんか、新左其れなら身共の方へ渡すと云ふの
か、紋兵左様でございませぬ、新左イヤ仕方がない、身共も乗掛つた船だ
背後へは背られぬ、ちやア百兩出さう」と云ひながら手函の裡から
百兩の金子を取出して紋兵衛の前へ差出しました、紋兵「イヤ宜しうご
さいます、ちやア私が一寸受取を書いて置させう、其の代りに揚
巻のことに就いて苦情を持つて来たら貴様には御迷惑を掛けません
私が引受けますから」と其處で一本の証文をサマシとしたり、紙入
して紋兵衛「人はいは私のは乾兒の名前に致して置させう」と紙入
の中から一摺つかみ出したる印形は凡そ二十許りもございませう、
其の中から乾兒の印を取しまして受判としてベツリ捺しました、
新左「紋兵衛、何うも貴様は大層印形を持つて居るな、紋兵「イヤ印形と
云へば印形ですが、私の目から見たら茄子の端見たやうなものでご
さいます、新左「何うも酷いことを云ふ奴もあるものだ」と大いに驚い
て居ります、さて百兩の金子を受取り紋兵衛は彼は何うとも勝手に

しる、揚巻さへ渡して了へば其れ限り、明朝必らずお渡し申します
と云ふ約束で引取つて了ひました、すると跡に置きました鳥居新左
衛門は門弟の中花垣五郎藏、雄鳥の才三と云ふものを招きまして、
新左「明日の朝綱額を一挺仕立て芳原の揚屋町紋兵衛の宅へ揚巻を迎
ひに行け、夕立の傳吉高飛の助八は今日から障子のづゝくりなどを
致して座敷の掃除をスツカリしろ、傳吉先生貴郎は紋兵衛に金子をお
渡しなされたのは彼れは何でございませぬ、新左「彼れでな愈々揚巻を明
日の晩から身共の女房にするのだ、傳吉「へ、其れは先生可かせんせ
私共も先生のお供をして北廓へ参りましたが揚巻は貴郎を大變嫌つ
て居ります、新左「馬鹿を言へ、大勢の中で其んなに見せかけて居るが
詰り腹の中では揚巻は底根乃公に惚れて居る、傳吉「ハ、其れは可
ませぬ先生、劍術は何うもお強いかわ知れませぬが、女に掛けちやア
三文の價直もございませぬね、新左「馬鹿なことを申すな、其の日は
漸う揚巻を迎へる所の準備をいたして翌日に相成りますと朝早くよ
り花垣雄鳥の二人に申付けて揚巻太夫を迎に遣りませぬ、處へ對し

て花川戸の助六は三人の乾兒に申付けまして樽肴の類を土産として持たせて遣し段々助六が乗込んで應對に及びまするが、中々以ちまして其の談判の行届ませぬ處から、據なく腕づくを以て既に揚巻を途中に於いて助六は引摺へやうと云ふ、是れが爲めに江戸市中に町道場を構へましたる浪人組一統の輩、男達町奴と双方命の取合をせねばならぬと云ふ、大騒動を惹起しまするお話と相成りまする、一寸息御免を蒙りましたして次回に。

第四回

然れば鳥居新左衛門は其の翌日早天に門弟を揚巻の迎と致して芳原へ遣はしました、處が其の跡へ玄關の方に當りまして何者か頻りに頼まうと案内を乞うて居りますから、内門弟の一人夕立の傳吉其れへ出て見ますると、何れも身には厚襦やうのものを纏ひまして腰には長き一刀を横へ、一人は五升樽を持ち、又其の片側に魚籠に魚を入れたものを持參致して玄關の前に之れを置いて茫然立つて居ります

傳吉何だ ○ナニ何だとは何だ傳吉何うも可怪しな奴が来やアがつたな、其方共は何の用があつて參つたか ○乃公か、乃公は花川戸の黒手組助六の配下の一人蝶々の源次、疍廻の藤吉、狸の傳次と云ものだ、驚いたのは門人でございます傳吉大變な名前、の奴もあるものだ、して何の用だ、源次何の用か知らぬ、乃公の宅の親分が手前の宅の鳥居新左衛門下會ひたいと云ふので、其處で先きに之れを持つて行けと吩咐かつたのだ、だから持つて來たのだ、取つて置け、傳吉ヤイ何と云ふ挨拶をする、其方の親分と云ふその花川戸の助六が當家の大先生にお目通を願ひたいと云ふのか、源次笑かしやアが其んな六ヶ敷いことぢやアねぬのだ、乃公の親分が是の宅の新左に會ひたいのだ傳吉扣へる、新左と云ふことがあるか源次其れでも新左ちやアねぬか、エテ、言はねぬで之れを受取つて置け、ワイ、云つて戸外へ飛び出してしました、何うも禮儀を知らない奴だと驚きながらも其の二品を奥へ持つて這入りまして新左衛門に此のこどを申入れますと、新左ハ、アさては昨日紋兵衛が申して居つたが大

方揚卷の一條に就いて参るのであらう、併し助六と云へる奴が來たら充分此の方の見識を見せて進るが宜からう」と其の用意をして待つて居ります、程なく助六でございませうが遣がは以前は浪人丈けありまして、極く今日は穩しき身装を致して、黒の紋付には袴を穿き尤も素腰にて只一人を關へ突立ちまして助六「お頼み申上げます」と案内を乞ひます、夕立の傳吉其れへ出掛けて参りまして傳吉「何者だ、其方は何所のものだ助六「エー私は淺草花川戸に住居を致します助六と申すものでございませうが、當家の先生に少々お目通りを願ひたく其れゆゑ罷出でました傳吉「ハ、ア左様か、ア、暫時待つて居れ頼て奥へこのことを申入れませう、暫く經つて此方へ通れよとのことでございませう、其處で案内に伴れられまして十疊許りの座敷へ通りませうと、此の所に暫く待つて居ると煙草盆も出しませんくらゐ仕方がないから助六は其れへ扣へて居ります、暫く經ちまして門弟が綴子の立派な袴を携へて其の座敷へ出て参り正面の所へ其の袴を敷きまして其のまゝ起つて行きました、又入代つて一人の門弟

が袴の片側へ曲膝を持って参り据ゑました、又入代つて門弟が立派なる煙草盆を持って参り其の前へ据ゑまして追々飾付けが出来ませうが、助六は片側に在つて之れを眺めて居りましたが助六「オヤ、何うも鳥居新左衛門と云へる奴は大層見識張る奴と見ゆるな、ハ、ア之れへ坐る心算か、マア、威張る奴は幾らでも威張らして置くが宜からう、斯く心に思ひませうから、睨と扣へて様子を伺うて居ります、右の袴の前に二人の門弟は高麗狗のやうにヒタリと座り兩手を仕へて門弟恐れながら大先生に申上げます、淺草花川戸の町奴助六と申すもの御目通を願ひます」と一室に在つてオ、と答へが、ありませうと二人の門弟は其の座を起つて正面の唐紙を左右に開きませうと、一刀を携へ着流のまゝ立派な伊達羽織を着用致し、從容に其れへ罷出でまして、例の袴の上にヒタリと着座を致しました、門人は刀を受取りまして片側の刀劍掛に之れを掛けました、其の身は横手に据ゑたる曲膝に凭りまして睨と助六の様子を眺めて居りましたが新左「コリヤ町奴助六とやら、余は鳥居新左衛門であるぞ、何用あつ

て参つた」大變な見識でございますから助六も實に驚きました、全
 て何のことはない大名のやうな氣になつて居やアがる心の中に
 可笑しく思ひましたが、然あらぬ体にて兩手を仕へ助六は是れは大先
 生にはお初にお目通を願ひました私が私は黒手組の助六でござい
 今日罷越しましたのは少し先生にお願ひの筋あつて参りました、實
 は當時芳原の三浦屋方に勤めを致し居ります彼の揚巻と云ふもの
 一條に就きまして罷出でましたのでございます、本來揚巻の親と
 申しますはお田樂酒賣を渡世と致して居ります新兵衛と申すも
 のでございませう、既に揚巻も永くの間三浦屋に親の爲めとは言ひな
 がら勤を致しまして、昨年最早其の勤の年期も満ちましたのでござ
 います、彼女も親許へ歸りたいと心得ますが、何分判を致しまし
 たる揚巻町の紋兵衛と申すものに少々金子の出入がありまして、其
 れゆゑ當月まで延引になつて居るのでございませう、處が揚巻の親新
 兵衛も追々取る年でございまして一日も早く娘を我が手許へ引取り
 たいと云ふので、實は私遠縁の間柄でございまして態々頼みに参り

ましたので、其れゆゑ私は此のことに就いて昨日紋兵衛方へ其の示
 談に参りました、處が何うやら彼は御當家様へ向けまして差上げる
 やうの話し合に至つて居りますから、一應御當家様へお届けを致した
 上、伴れ歸れどこのことでございませう、其れゆゑ態々今日は先生のお宅
 へ出ましたやうな次第、右様の譯でございませう、何うか揚巻な
 るものを實親新兵衛の方へお返し下し置かれますやう態々願ひに
 罷出でましたのでございませう、云はせも果てず島居新左衛門は大い
 に憤りまして新左、不埒なことを申す奴もあるものだ、彼の
 揚巻と云へるものは最早此方の妻に致さんと屢々先達てより紋兵衛
 の方へ其の談判を致して居つた處、既に昨日態々紋兵衛罷越して申
 すには、揚巻は最早貴郎の方へ差上げ切りに致すから何卒百兩と云
 ふ金子を頂戴を願ひたいと斯様に申して参つたから、其れゆゑ昨日
 紋兵衛に百兩と云ふ金子を遣はした……之れを見よ斯くの通り紋兵
 衛が證文を認めて参つたぞ、揚巻は貴郎の方へ差上げ候ふ、此の女
 の儀に就いて他より故障を申立てるもの思はれる時は必ず紋兵衛が

花川戸助六

引受け少しも當家へは御迷惑を掛けずと云ふ斯くの通りである、是れに依つて今朝我が門弟に申付けて芳原へ揚卷の迎ひと致して遣はしたことである、然るに其の證文の黒色の未だ乾かざる中に揚卷を貴様の方へ引上げやうなぞとは甚だ不埒な奴だ、其の儀は罷りならぬ、早々歸れ」助六は之れを聞いて大いに驚きました助六「さては先生、昨日貴郎の許へ紋兵衛が参りましたか、何うも彼奴は不埒な奴でございます、是れは全く貴郎を欺つて金子を食つたのでございます、素より私は昨日確かに契約を致しましたのでございます、之れが私の方へ引取りまして何う斯う仕やうと云ふのでございませぬ、年を取りましたるものが誠に困つて居りますから、其れで親許へ返して取らせるのでございます其の邊を何うか先生御推量を下し置かれまして新兵衛の方へ渡してお遣り下し置かれませうやう、又百兩の金子は私から贖ひ付けまして貴郎のお手許へ返るやうに仕ります、其れ丈けの大金をお出しなさらばたら揚卷許りが女ではございませぬ、幾らも外に女はありますから……新左「黙れ、何も左様に餘計

花川戸助六

なことを手前が申すには及ばぬ、素より此方が宿の妻に仕やうと決心致した以上は決して誰が何と言つても揚卷を返すことは罷りならぬ、早々歸れ……コリヤ、門人此奴を門前へ引立てる」そこで夕立の傳吉高飛の助八、此の兩人がメツと起ちまして頼て助六の側へ進み寄り傳吉「コリヤ早々歸れ、歸らぬか」と双方より利腕を取つて引立てやうと致します、助六は眠り其の様子を眺めて居りました、たが助六「是れは怪しからぬ、お前さん方は何となさる傳吉「マテ、云ふな、此の座を起て」キツと助六は正面を眺めて居りました、助六「何うも鳥居新左と云ふ奴は少しも話しの出来ぬ奴だ、道理の分らぬ奴には仕方がない、好まぬことであるが腕づくで以て揚卷を引取らんければなるまいと思ひましたから助六「ヤイヤ汝ア手籠めに致して何とする、巫山戯たことをするな」とバツと其の取られましたる手を引きましたから、兩人の門弟は「バツ」と致して汝れと再び組付いて来る奴を高飛の助八の襟髪を掴んで肩に引摺ぐよと見せました、が遂に次ぎの室へ投げ飛ばしたのでございませぬから、何

花川戸助六

係以つて堪りませう、取合の唐紙を打破つて次ぎの室へハツタリと
 飛ばされました、夕立の傳吉は汝れツ手向ひ致すかと打込んで来る
 奴を、同じく利腕を取つて逆に振ち上げ何を巫山戯たことをしやア
 がるど、之れも肩へ引摺ぐよと見わたるが正面の床の間の方を望ん
 で投げますと、立派な九谷焼の花瓶に花が活けてあります、其の
 上へ投げ付けられたのでございますから花は滅茶になり花瓶は破れる
 身体に水をあびて早速起立ると云ふことも出来ません、此の有様を
 新左衛門は打眺めまして殊の外憤りました、新左「コリヤ、能くも汝れ
 亂暴なことを致したな、最早勘辨相成らぬ、手討に及ぶから覺悟を
 しろ」と忽ち一刀を取つて鞘を拂ひ助六を望んで斬つて掛りました
 大概のものなら真二つになる處、ヒヨリと体を躲し空を打たせて置
 いて手許へ飛込んだ其の早業、鳥居新左衛門の肋骨の邊りをやツと
 一突き當てて入れましたのでございますから、何條以つて堪りませ
 うや「アツ……ムーン……」と云つて其の所へ新左衛門は打倒れま
 して氣絶をいたして了ひました、大變な弱い先生もあるもので、助

花川戸助六

六は此の時ズツと突立ち上つて双方の様子を見て莞爾り打笑ひ助六
 やい新左、乃公がこれ程までに理前を云つて頼むのに未だ理前が分
 らぬと云ふのは仕方のない奴だ、理前が分らなけりやア仕方がね
 腕づくで揚卷を此方へ巻上げて了ふんだ、返報がしたくば逃げも走
 りもしねぬ、淺草花川戸黒手組の助六だ何時でも出て来い」と大言
 を擲つて悠々と引取つて了ひました、跡に門弟の輩は助八「ア、痛い
 く、オイ傳吉、傳吉、オ、何うした助八「イヤ最う何うの斯うのと云つ
 て彼んな又強氣な力の強い奴はない傳吉、貴公は何所へ投げられたの
 だ助八「イヤ最う見て呉れ、頭へ此んなに痛が出来たのだ、お負けに
 唐紙を蹴破つて次の室へ投げ飛ばしやアがつたのだ、オヤ、傳吉、
 手前は又ビシヨ濡れたな、此奴ア堪らねぬ、花瓶の所へ打付けられ
 やアがつたな、夕立ちつてへな名を命けるから、名は体を現はすと云
 つて全で身体は夕立ちに逢つたやうだ傳吉「冗談ぢやアねいせ、人のこ
 どを云ふがお前も高飛の助八だ唐紙を破つて次ぎの室へ高飛をする
 つてへ之れも酷いぢやアないか、併し我々兩人は助六の野郎に此ん

な酷い目に遭つたのだが先生は何うした……オヤ、一寸見る、先生も氣樂な人だな、彼所に寝て居る助八馬鹿を言へ、寝て居る奴があるか……オヤ、手に一刀を持って居るから……ハ、ア是れは助六に斬付けたのだが、投げ倒されたものと見れるな、氣絶をして居るのだ、何うしやう傳吉何うして仕方がねえぢやないか助八斯う云ふ時には幾ら貴公が威張つても此方が一番古いから先生から常々教はつて居る活を入れるのは是所だ傳吉へッ、助八生意氣なことを云つて居るね、貴公活を入れることを知つて居るか助八馬鹿を云へ、其のくらゐなことが分らないで何うする、云ひながらも抱起して漸う新左衛門を俯向に致して置いて、ヤツと云ひながら一つ活を入れましたか何の感じもございませぬ傳吉其れ見る、氣が付かないぢやアないか助八「サア不思議なこともあるもんだ、活が効かない……傳吉馬鹿を云へ貴公の其の活の入れやうが違つて居る、彼所ぢやアないのだ、此所の方だ」と傳吉が力に任かせてウンと一つ入れましたか何の感じもございませぬ助八其れ見る人のことを云つたつ

て手前も可かないぢやアないか、貴公は何所だと思ふ傳吉「サア乃公是所だと思ふ助八拙者は又是所だと思ふ傳吉其んなら其の間を打つて見やう……エイツ……可ぬぞ、イヤツ……」二人のものは入れ代り立代りドン、拵り倒しますが少しも感へませぬ傳吉何うも可かぬせ、活が腐つたものと見れる助八冗談云つちやア可けないせ、活が腐つて堪るか傳吉其れでも何うしても氣が付かないが……顔へ水を吹注げて大きな聲で呼うか助八其んなことをしては隣家へ對しても見てもないぢやアないか……イヤ宜いことがある、仰向に寝かして置いて臍の穴へ艾を詰め灸を据ゑるのだ、すると身体が暖つて直きに氣が付くぞ傳吉成程其奴ア宜い所へ氣が注いだ、何うも厄介な門人もあるものでございまして活を入れることが出来ず、頓て艾を持つて参りました新左衛門の臍の穴へ詰込み、其れへ火を點けまして扇でバチ、煽ぎ始めました、稍々暫くして身体へ暖りが廻つて来たものど見、氣が付きました新左衛門、熱い、と言ひながら飛び起きました新左衛門、何うも酷いことをしやアがつた、ヤイ手前

達は何をしやアがるのだ、傳吉、是れは何うも先生お氣が付きましてお
 目出度うございませす、先程から色々様々と介抱致しました、が何うも
 氣が付かないで困りました、新左、さては逃げやアがつたか、何うも身怯な奴もあるもの
 りました、新左、さては逃げやアがつたか、何うも身怯な奴もあるもの
 だ、傳吉、御元、おやアございませせん、中々逃げる處のことぢやアござ
 いませせん、理前で分らなかりやア、腹前で行く、返報がしたければ何
 時でも来いと云つて居りました、新左、不埒なことを吐す奴もあるもの
 汝れッ、遠くは行くまい、背後追駈けて……オ、然うだ、立たうとする
 と、新左、ア、滯い何うも春中の邊りが大變難むぞ、助八、イヤ、其れは痛み
 ませう、我々が代り番こに活を入れたのです、が威へませなんだので
 新左、酷いことをしやアがる」と顔を凝めて居ります、處へ花垣の五
 郎藏、雄鳥の才三と云ふ兩人は、這々の体で逃げ歸つて参りました、五郎
 先生、酷いことが出来ました、新左、オ、貴様達は揚卷を迎ひに行つたが
 何うした、五郎、へイ、駕籠屋を雇ひました、ね、揚屋町の松鶴屋の門前へ
 行つて見ますると、最う支度が出来て、紋兵衛は段々と揚卷に云つて

聞かして此の駕籠に乗つて鳥居さまの方へ行けと申しました、處が
 貴郎、揚卷はシク、泣出しまして、妾や何の因果で斯様な目に逢ふ
 のだらう、鳥居の許へ行けば妾や迎も存命ては居りませせん、自害を
 して死にますと此んなに申すのです、新左、馬鹿を申せ、其れで何うし
 た、五郎、マア、其れから駕籠に乗せまして、我々兩人が駕籠脇に付いて
 丁度、藏前も過ぎまして、天王橋を此方へ渡りまして、最う七曲の方へ曲
 つて来やうとしますと、何だか怪しげな男が、ズツと前へ立止まりま
 して、駕籠の棒鼻に手を掛け、ヤ、一寸待て、此の駕籠の中に居るの
 は揚卷ではないかと云ひましたので、駕籠の中から少し垂れを開け
 首を出した、其の時の貴郎、揚卷の莞爾り笑つた顔を見ました、がね、オ
 ヤ、助六の親分さま、何でありんすか、此んなに云ふので、するど
 オ、花魁、お前の爺さんに頼まれた、乃公、お前の身体を親許を返し
 て遣るから安心するが宜い……コリヤ、駕籠屋手前大儀であるが此の
 駕籠をば、花川戸へ遣れと此んなに云ふのでございませす、揚卷は何う
 も親分有難うございませすと云つて、ね、大變に悦びました、するど、駕夫

奴直ぐに助六の方へ味方をしやアがつて、エ、宜うございませぬ親分
 ちやア直ぐに遣ります、徳夫は背後へ戻さうとしますから私共も黙
 つて居れません、ヤイ貴様達は大胆なことを申す奴だ、此の花魁に
 は多くの金子が掛つてある、我々は鳥居の門弟だ決して渡すことは
 ならぬと云ひますとね、何をエテ吐す、貴様のやうな蚊蚋は
 乃公が手を出すまではない、野郎共片付けて了へど此んなに言ひま
 すと、貴郎背後の方に居ました助六の乾兒奴が大勢来やアがつて私
 共を打つやら蹴るやらお負けた片側の泥溝の中へ投込んで了つたの
 です、上らうとする所を足を以つて蹴倒すと云ふ散々な目に遭つた
 のでございませぬ、新左エイツ其んなことは何うでも宜い、して揚巻は
 全体何うした五郎先生其んな殺生なことがありますか、我々其んな
 酷い目に遭つて居ますのに、其んなことは何うでも宜いとは酷いぢ
 やアございませぬか、だが揚巻はさう云ふ譯ですから物の見事に向
 ふへ取られたので、新左ヤイ人を馬鹿にしやアがる、我々を始め一統
 を酷い目に遭せ剩へ揚巻を取上げるとは言語道断の致方だ、此の上

からは勘辨は出来ぬ、早々回文を廻し市中の道場より一統の組合
 のものを呼集めて其の返報を致し呉れん、と早速鳥居新左衛門は當
 時江戸表に町道場を構へて居ります浪人組の方へ早速回章を廻すと
 云ふことに相成りました、處が此方は花川戸助六でございませぬ、素
 より色戀に掛つて亂暴をしたのではございませぬ、只親許へ返して
 遣りたいと云ふ所存からの騒動でございませぬ、揚巻を我が宅に置
 ては宜くないと思ひ、歸ると早々乾兒の大金權九郎に申付けまして
 山の宿に居ります夢の市郎兵衛方へ預けると云ふことに相成りまし
 た、其の上相手は鳥居新左衛門何うせ此の返報に来るは必定と、其
 處で男達町奴の組合の方へ回章を廻しました何うしても此の方は人
 氣が寄りませぬ、忽ちの間に近邊の大勢の達衆顔役の者が集つて來て
 一番浪人組を相手に命の取り遣りとは此奴ア近頃面白い、何でも此
 方の腕前を見せて遣らうと何れも喧嘩の準備に掛りましたることを
 さいませぬ、既に双方押寄せます時は如何なる騒動の出来致さんも
 圖り難く實に僅かのことでより斯る騒動を惹起したのでございませぬが

其頃江戸は根岸に住居を致しまして浪人組の總取締りを勤めて居ります寺西関心と云ふものがございませす、是れは以前加藤式部少輔の臣下でございまして七百石の大祿を汚したものでございませす、何分奥州會津を浪人致して後は當地へ來つて根岸に住居をし今は六十に近い老体とは言ひながら中々盛んなことでございませす、數多の門弟を仕立て殊に大力無双の人物でありまして外へ出ますには凡そ目方五貫目以上もあらうと云ふ鐵を以て打延と致しました棒を杖の代りに突いて往來をしやうと云ふ、面白い氣性の人でございませす、浪人組の取締をして居つて其上町奴の銘々にも交際を致して居ります、處が其の時分は大變に何うも俠客町奴なぞの跋扈る時分で、中には又妙な奴がありまして態々江戸へ對して上方の方から男達町奴の修行に來る奴がありませす隨分奇妙な修行もあるもので、或日のことでした、が寺西の許へ荒い堅綿の厚袍を着まして鐵鞘の一刀を腰に差し遣入つて參つた一人の男、男へイ御免下さい、先生は在宅でございませすか、関心何だ貴様は、男私は大阪の方から當地へ對し男達

町奴の修行に來て居ります、貴郎は昔のものに御交際をなさるさうぢやから御挨拶に來ました、何うかお心安く願ひませす、関心ハ、ア妙な修行に來たな、名は何と云ふ、男へイ今辨慶の太左衛門と申します、関心何だ今辨慶だ、ハ、ア大層な名を命けたな、昔辨慶と云ふものは大變力があつたさうだが、貴様は力があるか、太左其れはありませす、今辨慶と名を命けるくらゐなもの、隨分力は有餘つて居るので、関心何のくらゐの力があるか見せて呉れ、其の庭に立てかけてある杖を取つて見よ、太左是れだすか、関心然うだ、太左イヤ、途方もない重い杖でございませすな、関心ム、一寸五貫目もあるが其の杖をグツと握詰めて曲げて見る、太左、ハ、之れを私が曲げるのでございませす、関心然うだ、太左、ハ、ハ、此んなものが曲らんくらゐなことで役に立ちませすか、ウンと力を双方の腕に入れまして氣張つて居りました、が何うやら少し許り曲りました、太左、何んなものだ、先生、関心隨分力はあるな、併し其の曲げると云ふ力があるなら其の手を持ち替すしてグツと真直にして見る、太左、ウ、ハ、ハ、言ひなさんな、曲る力があるく

らぬなものか戻らぬことかおますか」云ひながらウツと方を入れま
 して氣張つて居ましたか眞赤になつて太左此奴ア何うも可かぬ、先
 生迎も可かんなア關心其れ見る、其んなことで今辨慶と云へるか、
 此方へ貸して見る、サア斯う此方へ返してムウソ……此の通りだ、
 又曲げる時はムウソ……ソレ此んなものだ太左へ、一全で館同様で
 すな、途方もないわらゐるんだ關心へ、此のくらの力があつても
 今辨慶なんてへあつかましの名は命けない、貴様も今日から名を更
 へる太左へい何と更へませうか關心左様影辨慶の太左衛門としる
 太左其んな價直のない名がおますものか關心だつて乃公の目から見
 れば貴様は影辨慶だ太左衛門は驚きまして這々の体で逃げ歸つた
 と云ふ、中々寺西先生は面白い氣性の方でございませぬ、處が今日
 しも回章が廻つて來ましたこととございませぬから、棄置く譯にはな
 りませぬ、早速身支度を致して例の五貫目の杖を突いて根岸を出掛
 けアラく、と下谷廣小路の方へ遣つて参りますと、向ふから辨慶の
 祖袍を着て長い奴を佩用んで大手を振つて遣つて参るものかござい

ます太左エ、其れへお越でになるのは寺西の先生ではございませぬ
 か關心オ、誰かと思へば影辨慶か太左、酷いな先生、影辨慶丈けは廢
 めて貰ひたい關心、黙れ、乃公の目から見れば其れに違ひない、して
 何所へ行く太左今日はわらいことか出來まして浪人と町奴との喧嘩
 がありませぬのやさうで、其れで此んな時には一つ上方の今辨慶の腕
 を願はさうと思ひまして、之れから助六の許へ加勢に行きますので
 關心ぢやア行つて來い太左貴郎は何所へ行きなはる關心乃公か、乃
 公派人だから浪人は浪人組だ、鳥居の方へ加勢に行くのだ、今度出
 會つたら手前と乃公とは敵味方だ、マア馴染合に一番此の杖で貴様
 の頭を打破つて遣るからさう思へ太左エ、ソ……待つてお呉んなさ
 れ、貴郎は鳥居の方へ味方をするのでおますか關心さうだ太左其ん
 なら私やアもう廢めぢや、貴郎の方へ一緒に行きませう關心ハ、ア
 さう云ふ奴だから貴様のことを影辨慶と云ふのだ、敢て鳥居の方へ
 行つたからと云つて何れも鳥居の助太刀をしやうと云ふのではない、
 乃公は何方にも交際をして居るから其れでマア双方の話を聞いて理

前のある方へ付いて遣らうと思ふのだ太左さうでございませぬ、其
 りやア其れに限りませぬ、私も其様にしませう、閑心此の馬鹿者駄つて
 付いて来い」頼て神田紺屋町鳥居の許へ来て見ると三四十人集つて
 居ります、中々是丈けの人数では足りないと思ひ、密かに門弟を以
 て助六の方を見に遣ります、中々男達と云ふものは忽ち人氣の
 寄るものでございまして、淺草花川戸は申すに及ばず或は山の宿聖
 天町此の界限二三町の間男達町奴で埋まる許りの有様だと云ふこと
 でございませぬ、如何はせん、手を束ねて居ります、處へ寺西開
 心が遣つて参りましたから、新左衛門は新左衛門、是れは根岸の先生、
 何うも有難うございませぬ、閑心何うした新左衛門、助六を相手に喧嘩をす
 るとは何んな間違だ、新左衛門、實は先生残念なことでございませぬ、私
 が百兩の金子を出して落籍を致した揚巻と云ふ花魁を途中に待伏を
 して助六に横取りをさらせました、返報がしたければ何時でも出て
 来いと亂暴なことを申しませぬ、何うも捨て置けぬではございませ
 せん、閑心、ウ、中々彼奴は年が若い、閑心、助六に限

つて其んな分らぬことをする奴ではないと思ふが、兎も角も乃公に
 任せろ、當時將軍の膝下で最もらしいことなら兎も角も、僅か女一
 人のことで大勢命の取り遣りと云ふのは餘り譽めた話でもない、乃
 公が行つて取返して遣らう、新左衛門、其れはマア揚巻さへ此方へ返して呉
 れますなら此方は何う斯うございませぬ、閑心、其れぢやア乃公が受取
 つて来て遣らう、新左衛門、先生渡さぬと云つた時は……閑心、ナ、乃公
 が行つたら渡さぬ氣支はなからう、エテ、云ふなら乃公が首を遣
 るから安心しろ、新左衛門、其れぢやア何うか先生お頼み申します、閑心、ム、
 承知致した、サア影辨慶付いて来い、太左、オヤ、さつぱり私の價直
 がおまへんな、アツ、云ひながら付いて参ります、さて花川戸へ
 遣つて来ると其の町内は大變な騒ぎ、屋根に上つて居る奴もあれば
 各自銘々に利器を持つて待構へて居りましたが、〇ソ、ソ、来た、
 来やアがつたぞ、遣付ける、と皆身構を致しました、閑心、コリヤ貴様
 達は全休何うする、〇オ、根岸の先生ですか、閑心、乃公は一寸今から
 助六の方へ用があつて行くのだ、通つても苦しうないか、〇オ、貴

郎なら其りやアお通りなさつても構ひませんが、折角先生喧嘩にな
 りかけたのですから御仲裁なぞは可けませんよ 閉心「喧しう言ふな」
 助六の許へ来て見ると先づ、夢の市郎兵衛、金神の長五郎、放駒の
 四郎兵衛、腕の喜三郎、荒浪の茂兵衛なぞと申して其頃多くの乾見
 を持ちましたる俠客の輩が集つて居ります、助六は寺西を見ると、
 助六「オ、是れは何うも先生でございませうか、何うぞ此方へお通りを
 願ひます 閉心「オ、助六、汝に似合さることをするな、何だつて此ん
 な詰らぬことをするのだ、相手は高の知れた一人の女、其れを横取
 すると云ふのは甚だ手前心得違ひではないか、黙つて乃公に其の揚
 巻と云ふものを渡せ 助六「先生、私が悪いが鳥居の先生が悪いが、實
 は斯様く斯くくの次第でございませう」と其の身が新兵衛を不憚
 に思ひ紋兵衛への談判の一條から、彼れが出し抜いて鳥居の手許よ
 り百兩の金子を取つて高丘で見物をし、其等が爲めに斯様な間違が
 出来たと云ふ其の次第を詳しく話を致しますと、寺西も遂一聞き終
 り 閉心「成程イヤ物事は一方聞いて下知をするなど云ふことがある、

其れで漸う話が分つた、ぢやア手前は揚巻を家内にしやうの何うの
 と云ふのではないか 助六「左様でございませう、年を取つた親が可憐さ
 うでございませうから金子を出して親許へ返して遣らうと段々お話申
 しましたが理前が分らぬのですから、理前が分らなければ腕前を以
 て行くより仕方がないと思つてア已むを得ず斯う云ふ場合になつ
 たのでございませう 閉心「イヤ分つた、ぢやア揚巻は貴様の方へ遣らう
 遣るから此の人数を退ひて了へ、其の代りに百兩の金子を取戻して
 新左に返して遣れ 助六「委細承知を致しました、だが先生、貴郎のお
 言葉に従ひ人数を退きました跡で鳥居さんが押寄せて來ると云ふや
 うなことがあつては甚だ困ります 閉心「其れは大上夫、彼奴がエテエ
 テ云つたら乃公の首を遣らう」此の人大變に首を粗末にする人で、
 双方應對をいたしまして 閉心「ア形辨慶、來い」と云ふので早速此
 のものを伴れ歸り掛けますと、閉心「先生、喧嘩は何うなりました 閉心「
 喧嘩は最う了ひだ、オ「オヤ、さうだらうと思つたのだ、折角樂し
 んで居るものを貴郎のお取扱ひですかね 閉心「其れとも貴様達やア強

つてしたければ下りて来い、乃公が相手になつて遣る」此れを聞く
 と屋根の上は大勢居る奴は「〇元談ぢやアございませんよ、先生に
 は逆も叶ひません閉心へ、弱い奴もあるもんだ」と頓て神田紺屋
 町へ立歸つて参りました新左、是れは先生御苦勞でございました、し
 て何うなりました閉心、喧嘩は了ひ新左さうですか、して揚巻は
 何うしました閉心揚巻か、揚巻は向ふへ遣つて来た新左エ、ッ向ふ
 へ遣つた……其れでは先生應對が違ふではございませんか閉心馬鹿
 を云へ、向ふには理前がある、大休貴様其の面で揚巻を女房に仕や
 うと云ふ了簡が間違つて居る、向ふは親に返して遣らうと云ふ親切
 ではないか……氣に入らぬか、其れが氣に入らぬば乃公が相手をして
 遣る来い新左申、戯ぢやアございませんせ先生、佛を頼んで地獄へ落
 ちるとは此のことで百兩の金子までも……閉心馬鹿を言へ、百兩の
 金子は助六の方から談判をして貴様の方へ取戻すやうにしてあるの
 だ新左ぢやア何うも仕方がございません」茲に至つて鳥居新左衛門
 も泣寝入りとなりました、納まりの付かないのは助六でございます

第五回

汝れ松鶴屋の紋兵衛、此の上からは何うするか、愈々助六は閻魔
 の騒動を惹起しますお話でございしますが、一寸一息……。

既に些細な所から浪人達衆の衝突となりまして、血の雨を降すと云
 ふ騒動にも相成らんとするを、漸う寺西の計ひにて双方共に納まり
 ました、さて納まらぬのは助六でございます、汝れ松鶴屋紋兵衛
 四十二兩三分二朱の金子でさへも謀書謀判を致して強慾に取奪らん
 とする、けれども年寄を相手に兎や斯う云ふのも面倒と思ひ、其の
 金子を出さんと致したのを、未だ其の上には強慾にも百兩と云ふ金子
 を取込んで高丘で見物するとは餘りと云へば不埒な奴である、非
 常に立腹を致しまして、其の翌日になりまして早天に松鶴屋紋兵衛
 方へ助六は遣つて参りました助六「ヤイ紋兵衛は宅に居るか、是れへ
 呼べ助六が談判に来たどさう云へ」と血相が變つて居りますから乾

兄は大きに驚きまして奥へ参つて此の事を紋兵衛に話を致します
 と紋兵衛「ハ、来やアがつたか、ナニ心配するな、乃公が行つて會つ
 て遣らう」と其の身は厚袍を着まして八端の平袴をしめ煙草入を携
 へてノソリと店の方へ出掛けて参りました紋兵衛是れは花川戸の親分
 ですか、大層お早く何か御用でございますか助六「ヤイ紋兵衛、汝ア
 能くも人を馬鹿にしやアがつたな、彼れ程確かに約束をして乃公を
 返して置きなから、汝ア其の跡へ廻つて神田紺屋町の鳥居の方へ行
 き百兩の金子を取つたと言ふが、何だつて汝ア其んなに強慾なこと
 をしやアがる、本来云へば貴様は十五兩と云ふ謀書謀判をさらして
 居やアがるのだ、だが貴様のやうな老老を相手に上沙汰も大人氣な
 いと思ひ、遣るべき金子ではないんだが貴様に其れ丈け出さうと云
 つたのだ、其れを尙強慾に百兩の金子を取込むとは人間の道と云ふ
 ものを汝ア辨へて居るか、さう云ふことをしやアがるので昨日既に
 浪人組と命の取遣りにも及ばうと非常な騒動になつたのだ、サア心
 得違を致しましたと云つて百兩の金子を出せ……汝ッ其の金子を出

さぬと捨て置かねぞ」紋兵衛は澄まし込んで煙草を喫んで居りまし
 たが紋兵衛「ハ、何を助六さん、其んなにお前さんのやうに大きな聲
 を發して嗷鳴らないでも宜いぢやアありませんか私は聾ぢやアない
 よ、耳は確かに聞ゆるんだ、成程お前さんの仰しやる通り百兩の金
 子を取つた、それが強慾だと仰しやるが何が強慾だ、私の宅の商賣
 はね呉服屋とか米屋とか云ふやうな堅氣の渡世ぢやアないんでござ
 います、人間生身の身体を取扱ひに及んで判一つで今日の渡世をし
 て行かうと云ふ判人ですよ、私は成らうことなら一文でも得の方へ
 札を落したい、是りやア誰しも當前、其りやア成程世の中の義理と
 人情を思つて見りやア一旦お前さんに四十二兩三分二朱で約束をし
 て、其の方の口が先口だからと云つて其れへ渡すのが當前だ、併し
 去年に全体揚卷の年期は満いて居るのでせう、其れから一年以上と
 云ふものは斬兵衛と云ふ爺が打遣つて置たのでせう、證文の表面に
 何と書いてあります、期限に拂ふことが出来ない時には娘はお前の
 方へお上げ申すと云ふ約束なのです、だからお前さんが應對に来る

まで宅は最う新兵衛の手許では金子は出来ない、して見れば彼の揚巻は私の娘だ、我が養女に貰つて見りやア煮て喰はうと悦んで喰はうと此の紋兵衛の了簡次第だ、だが何つまでも勤をさせて居るのも可憐さうだと思つたに依つて、鳥居の旦那の方へ其の身を片付け遣らうとしたのだ、だが一應私の方もお前さんの方へ渡せば渡すやうに、鳥居の方へも黙つて居る譯にはならないから昨日相談に行つたのだ、すると今更他へ渡されては乃公が困る、依つて向ふが四十二兩三分二朱出さうと云へば乃公は貴様に百兩遣らうから乃公の方へ渡せと斯う云ふ話になつたのだ、お前さんなら義理を思つて四十二兩三分二朱の方をお取りなさるか知らぬが、此の爺はね、斯うして是所に住居をして居るものゝ随分借金の中で目を刺いで居るのですから、四十二兩三分二朱と百兩とは何方が有難い、ア欲の方から取つて見れば百兩の方が有難いから其れで私は鳥居の方へ札と落したのだ、だが百兩の金子を持つて歸つてねはんの手許に置いたのは半時許り、借金の中から目を刺いで居る爺ですから皆昨日に其

の金子を出して了つて一文もないんだ、ないものを返すことは出来ぬから、お前さんが鳥居に應對として百兩の所を四十二兩三分二朱に負けて貰ふとも意地づくで二百兩の金子を出し揚巻を引取りと、お前さんの方で勝手になさいます、又何うあつても其の金子を出さなければ助六の男が立たないと云ふことなら何うとも立つやうになさい、乃公は今年六十四だ、人間僅か五十年、七十古來稀なりどか云つて、假令十五年でも十年でも娑婆に存命して居る乃公だ、何時死んでも惜しくない命だ、面が立たぬとあれば死ぬとも突くとも勝手にしろへ、今分の處ぢやアねね紋兵衛の身体を逆様にして振つて見ても鼻血をこぼれ、小鯉一文も出ねのた、依つて斬ることも突くことも何うともしやアがれ助六、泣ッ泣ッ泣ッ、何所から斬るのだ、かぬ……紋兵衛へッ、何を吐しやアがる、ア何所から斬るのだ、斬るなら勝手に斬れ、と爺はグルグると尻を振つてドンと其の所へ大胡坐を打掻きました、紋兵衛は取つても未だ大丈夫なものだ、何所を斬つたつて血が出るぞ、切つて赤くなきやア請合の西馬だ、汝が

好いたやうにするが宜いや」と中々少しも恐れる氣色はございませ
 ん、助六も堪り兼ねましたか「覺悟をしろ」と、今振打ちに斬棄て
 んとする折しも戸外から飛び込んで参りました人は此の紋兵衛に家
 を貸して居ります家主と見えまして家主モ花川戸の親分、何うか
 お腹も立ちませうが、一寸お待ちなすつて下さいませし助六オ、お前
 は何だか知らねわが邪魔をしては可けない家主イヤ〜お腹立ち
 御有理です、先程から戸外に居て様子は聞いて居りました、如何に
 も貴郎の御立腹は一々御有理でございます、皆此の紋兵衛が強慾か
 ら起つたことでございます、コリヤ紋兵衛、貴様のやうな強慾非道
 な奴はない、何故其んな亂暴なことを云ふ、又汝の身に若しものこ
 とがあれば詰り此の家主が迷惑するんだ、悪いことは云はないから
 百兩の金子を出せ紋兵衛イヤ誰かと思つたらお前さんは家主ですか
 い、何も家主が此んな所へ出る場所ぢやアありません、家主と云
 ふものは月の晦日に家賃さへ取つて居れば其れで用事のないもの
 だ家主、おれ、家主だからと云つて家賃許り取つて居て其れで済むか

助六の親方此んな強情な奴はございませせん、何うぞ今日一日丈けの
 所をお腹も立ちませうが私にお預け下さいませ、篇と此の者に意見
 を致しまして如何やうともお願の立つやうに致します、此んな吹け
 ば飛ぶやうな爺をお斬りなすつた處で仕方がありますまい、又其れ
 が爲めにお前さんは下手人となつてお出ましになるやうなことがあ
 つちやアなりませせん、何うぞ今日一日の所を私しにお任せの程を願
 ひます」と段々との挨拶でございませした助六然し此奴は強慾非道な
 奴で、私も素より覺悟はして居りますが、貴郎がさう仰しやいます
 れば今日一日丈けは待ちませう、コリヤヤイ紋兵衛、家主さんの御
 挨拶で今日一日は待つて遣る、貴様が其の金子が出来ぬことなら愈
 々命はないぞ紋兵衛ハッハッ何を言やアがる、一日は恐なことを、假令
 一月が一年十年百年待つたとして出来ぬものが出来て堪るか、何
 うとも勝手にしやアがれ、忌々しい奴だと思ひました、助六は漸
 う胸を擦つて其の日は宅へ立歸つて了ひました、連も彼の強情な爺
 が金子を出しさうなことばなし、返さぬと云つて此の金子を取ら

に置けば助六の面が立たず、是れは乃公が二十一の年に戸澤長屋で
 切られ藤次を殺した其の時に、仕置に上つたと思へば其れで事が済
 むと決心を致しましたが、茲に其の話を聞き及びましたのは揚卷の
 父親新兵衛でございます、ア、私が飛んでもないことを助六親方に
 お願ひ申した許りに似らぬ騒動になつて来た、今更何うぞアお察
 て置きを願ひますと云つた所が彼の親分の氣性では中々後へ思ひさ
 うなこともなし、又相手は罔魔紋兵衛と云ふ彼のやうな強悪な奴で
 あるから是れとても金子を出しさうなこともなし、出さんですれば
 助六さんが斬棄てなさるに相違ない、然すれば彼の親分が下手人、
 是れは因つたことが出来た、云は、乃公の娘から起つたこと、明日
 は二人三人の命に關はる一大事、ア、何うしたものであらうと爺は
 途方に暮れましたが、正敷今日渡世をしなれば食ふことも出来ず
 餘儀なく其の日は夕景からチャンと荷物の支度を致して、石町の自
 分の宅を出まして商賣旁々出掛けました、頃しも霜月二十一日の
 晩でございまして、寒風烈しきその寒さを厭ひなく最う彼れ是れ亥

の亥刻か夜中であらうと云ふ頃、一石橋を渡りまして池うのこど
 にお嬢端を今呉服橋の詰へ來まして荷を下し、お田樂やお田樂、お
 田樂酒と賣聲高く客待を致して居りますかと思ふやうに人通りもな
 し、新兵衛、今宵はア何だつて此んなに寒いであらうと軒に、
 水汲を垂して茫然として居ります、處が向ふから足音慌しく此方
 へ急いで参るものがございます、すると此方から一人、丁度今此の
 荷物の前で行違ひに相成りましたが、〇オ、其れへ來たは長五郎ぢ
 やアないか、長五、オ、茂兵衛か、乃公、今手前の宅へ行かうと思つて出
 掛けたのだが、此奴ア何うも宜い所で會つた、して話は何うなつた
 茂兵衛、イヤ最う何うも納まりが着かない、ア今日の話は何うやら斯
 うやら家主が中へ這入つて一日延すと云ふことになつたが、相手は
 彼のやうな強慾非道な罔魔紋兵衛と紳名を博つた奴だから逆も堪
 明くまいと思ふ、依つて助六の了簡ぢやア是非明日になれば彼奴を
 叩斬つて了ふと斯ふ云ふ次第だから、何うも乃公違やア其れをさせな
 くない、切めてア今晚の中に大勢が集まつてア何うとか此方で

金子の工面をして圓滑く納めたいと思ふのだが、長五郎手前直ぐと
 是れから助の許へ行つて呉れねばか長五、イヤ承知した、乃公も其の
 ことで行かうと思つて居たんだ、ぢやアお前も一緒に歸らないか、
 茂兵、イヤ乃公是れから芝邊で二三人に相談する先があるから、直さ
 に其の話を片付けて引返すから、其れぢやア長五郎何彼のこととは助
 の許で話すから」其處で話をしなから左右に別れて、
 ぎて了ひましたのを、眠と斬下に、
 「オヤ、彼の人は矢張り今日の助六さんのことに就いて彼ア遣
 つてお世話をして居らつしやる、長五郎と云へば金神の親方、又茂
 兵衛さんと云へば荒浪の親方である、他人の彼の方々でさへも彼ア
 遣つて心配をなさつて居らつしやるもの、現在乃公が頼んだ本人、
 と云つて此の爺が口を利いた處が仕方なし、ア、百兩の金子が欲
 いものである」と荷物を擔ぎまして河岸を彼方此方へ廻つて居りま
 したが、次第々々に夜は更けて参りました、最う其の夜の彼れ是れ
 丑刻でもあらうと云ふ頃、
 鍛冶橋の詰で荷を下し、何うせい今夜

は徹夜だと四邊を見て居ります、折しも向ふから怪しげな一人の男
 煙袋を致してか田樂屋の荷箱の側へ遣つて参りました、見ると年頃
 は二十四五でもございませうか、此の寒いのに下には織紺の腹掛に
 衣類は紺の單衣、其の上から怪しげな女の半纏を着まして、織紺の
 股引に紺足袋、麻裏草履を突掛けまして、男、寒い、オ、爺
 さん、最う何時だらう新兵、へイもう丑刻でもございませうか、男、ハ
 、ア大分遅くなつたな、何うも實に腹を空して最う何にも食ふもの
 はないと思つたが幸ひだ、濁酒は熱燗かい新兵、へイ、男、ぢやア一杯
 注いで呉んな、順て湯呑に注がしてグツと其奴を飲み干しました、
 男、ア、快い心持だ、してお田樂を拵へて呉んな、田樂を拵へさせ
 之れを下物と致して彼の男は濁酒を二杯飲みまして、男、ア、之れで
 少し身体に勢ひか付いた、皆で茂らだいな新兵、へイ皆で三十六文頂
 ます、男、其れで宜いか、と云ひながら腰巻の隠袋から錢を取り出しま
 して、今荷箱の前で勘定を致して居ります、折しも丸の内の方から
 五六人連で鍛冶橋を渡つて参りましたのは、其頃八丁堀も盗賊吟味

方にて中々殿しい方でございまして、山本角左衛門と云ふ與力でございます、何か調物があつたものと見ゆまして四五人の手先は細の御用提灯、御用函を風呂敷に包んで擔いで居るものもあり、山本の旦那は着流に羽織を引掛け雪駄穿で橋の中央へ掛つて來ましたお田樂屋の荷箱の前で錢を拂つて居る彼の男が見ると、ハツと驚きまして忽ち荷箱の影へヒヨイと隠れて了ひました、其の中に橋詰へ下りて参りました山本はチヲリと之れを眺めましたが、變な奴だと思ひながらも見ぬ振りをして其の前をサク／＼通り過しまして四五間向ふへ参りヒヨイと背後を振返つて御覽なされると荷箱の影から首丈け出して此方を眺めて居りましたが、又ヒヨイと姿を隠して了ひました、山本はさては怪しい奴と思ひ、ソレと下知を致しますと手先は、ヲ／＼と駆けて参りました手先「ヤ、野郎面を出せ」失策つたと思ひました、男へイ是れは旦那でございませうか」提灯を突付けまして手先は此のものゝ顔を眺め手先、ウ汝ア傳次だな傳次へイ……」云つてる處へ山本角左衛門お歸りになりまして角左何だ何

だ手先「エー旦那傳次の野郎でございませう角左、ウ貴様は傳次か今頃此の邊を徘徊するからには汝は日中許りぢやアないな、夜分も仕事をすると見ゆるな傳次、いぬ中々旦那何う致しまして、決して左様なことはございません角左、黙れ、何時だと思ふよ、ウ……最う丑刻だぞ、左様な怪しい風体をして此の邊を徘徊するからは定めて何時かで仕事をしたのであらう、兩國界限でも屢々見掛けるが見逸して遣つて居るのも何かの時の役にも立たうと思へばこそだ、其れに今頃斯様な處を徘徊して居るからには貴様は日中丈けではない、定めて夜分も仕事をすると見ゆるに違ひない、ソレツ召捕れ手先「御用だ」野郎は荷箱の前に千んで頭を頻に下げて居りましたが、利腕を取らんとしますと傳次「ア、痛い」手先「何うした傳次、傳次何うぞ柔ら願ひ申します、實は四五日前に朋輩と一杯飲んだのです、處がその野郎大變酒の上の悪い奴で私に皿鉢を取つて投げやアがつたので、其の時籠手に打付りました、すると此の右の二の腕は打籠りとなつたと見ゆまして非常に何うも痛んで仕方がないのでございませう手先「野

耶巧く吐すな、汝はお戸前を兩三度潜つて居やアがるから今度は一ッ免れやうと云ふ心算で今から手が痛い何かと云やアがつて、前推へをして居やアがるのだ傳次いの中々然うぢやアございません、何うかマア旦那御用とあれば仕方がございませんが柔り願ひたうございます、實は今日品川の朋輩の許へ行つて遂に話が長くなつて遅くなりまして、今頃になつたのでございます、何うか其處は一つ柔りとお頼み申します」頻りに頭を下げて居りましたが、何か己は懐中に怪しげなものを持つて居りましたのをバツと荷箱の透爐の脇へ其奴を音せぬやうに投込みまして頓て頭を上げました手先は左様なことには氣も注かす、漸う前で其の腕をグイッと縛つて了ました歩べと云ふので此の者を引立て、行つて了ました、跡に新兵衛はホツと一息吐きまして新兵ア、くナア何うも乃公の目から見る時は通常の人のやうに思ふが、お上の役人が御覽なると盜賊と云ふことが直ぐに分る、ヤレくマア偶然に商ひがあればこんなことである、是れも仕方がない、早く歸らう」と右の荷箱を擔いで一

二丁戻りかけましたが、何だか斯う荷箱が傾くやうな塩梅になつて参ります、變だと思ひまして透爐の脇を見ると何だか手拭にクルクルと巻いたものがありませぬ新兵ア、ヤア失策ツた、此んなものも荷箱の中へ投込んで行きやアがつた、是れは又明日になれば届はて出なければならぬ、手に取上げて見ますとスツツリ日方がございます、新兵ア、何を持って來やアがつたのだらう」と手拭を解いて見ると中には一ツの財布でございませぬ、何うやら手に當つたに手を突込んで見ると小錢ではございませぬ、何うやら手に當つた塩梅が小判でございませぬから、新兵衛は非常に驚きまして、此の積では百兩以上はあるらしいが、全体彼の泥棒は何所で盗んで來た金子であらう、觀べられるのに持つて居ては都合が悪いと思つて其れ乃公の荷箱の中へ投り込んだのだらう、ア、夜が明けると其の時助六さんの身分に關はる、百兩の金子さへあれば是所は納まる道理素より是れは泥棒の盗んで來た金子には違ひないが春に腹は替られぬ、眞を明日の所は此の金子を以つて一時の急場を免れ萬一露顯

をしたら乃公が仕置になれば其れでこの濟むこと、オ、然うだ」
 と急に氣が注いたか荷箱を擔いでフツと燈を吹消して了ひ道を急い
 てドレ／＼石町の一丁目へ歸つて参りました。何分裏家住居のこ
 とでございませう、表の露路の所へ立つてト／＼叩いて居りますと
 女「誰だね、新兵衛さんかい新兵「ハイお内儀さん誠に遅く歸りまし
 て御面倒でございませうが、一寸何うぞ……」女「ハイ今開けますよ、
 内の人ね今漸う歸つて來たのでございませう」と長屋のお内儀さん
 が頓て露路を開けて呉れました。女「オヤ燈火が消えて居るぢやア、あ
 りませんか新兵衛さん新兵「ハイ今横町で犬の喧嘩をしやアがって荷
 箱に行當つて其れで火が消えて了ひましたのでございませう、女「さう
 かい、ぢやア此の提灯を持つてお歸り新兵「有難うございませう、女「湯
 は沸いて居るかね新兵「銅壺に湯が沸立て居りますから……」何うも有
 難うございませう、ぢやア提灯を一寸お借り申します……」エ、宜うで
 さいませう私が閉めますのでございませう」露路を締めて其のまゝ自分
 宅の戸口に來り入口の錠前を開けまして庭へ荷箱を擔ぎ込み、表の

戸ビツレヤリ閉切つて行燈に燈火を点けまして、臺所へドツカリ座
 りホツと一息吐いて四邊を見廻し、右の財布を取り出しまして中を改
 めて見ると而も小判で百五十兩と云ふ大金でございませう、其處で其
 の中の百兩と云ふものを勘定致しまして、残りの五十兩は右の財布
 に入れ手拭に巻いて深く内へ之れを仕舞ひました、さて百兩包みを
 拵へ夜の明けを待って居りましたが、漸う東が白ひ頃ひ其のまゝ
 宅を駆け出しまして道はドレ／＼道を急いで淺草花川戸の助六の許
 へ遣つて参りますと、最うちやんと表も開いて掃除も綺麗に行届い
 て臺所には五六人の乾分が其れに打寄つて何か相談を致して居りま
 す新兵「ハイ御免なさいませう、親分さまはお在宅でございませうか、
 〇、
 ヤイお田樂や、汝ア要らねことを親分に頼みやアがつた許りに飛
 んでもねね騒動になつたのだ幾ら乃公達が云つたつて聞きやアしね
 ぢや、今しがた親分は紋兵衛を斬つて了ふと云つて芳原へ行らつし
 やつたのだ新兵「エ、ツ……」彼のもうお出掛けになりましたか、其れ
 は大變」と其のまゝ爺は一生涯命戸外へ飛出しまして足に任せてド

〆くど芳原の揚屋町へ出掛けて参り紋兵衛の宅の門口へ参ります
 と黒山の人集り、南無三大變と人押分け這入つて参りますと、店の
 間には紋兵衛尻を掀つて大胡座、紋兵衛「ア、斬れ、勝手にしやアがれ」
 と悪口を致して居ります、助六は既に「覺悟をしやアがれ」と一刀
 の柄に手を掛け振打ちにせんす有様、新兵「ア、モシ親分、マア、暫
 くの間お待ちなすつて下さい、暫時お止まりを願ひます」と云ふ、
 此の際に助六は振返つて見ると新兵衛でございませうから助六「オ、爺
 さん、お前は何か此のやうな場所へ這入つて来る所ぢやアない新兵
 衛、其の仰せは御有りでございませうが、逆も此のやうな強情な
 奴は貴郎が何れ程お掛合ひなすつた處が駄目でございませう、何うぞ
 折角貴郎にお願ひ申しましたが、此の話は最う貴郎もお退き遊ばし
 て下さいませう、助六「爺さん今更其んなことが出来るものか、お前
 が引受けたらお前何うする、新兵「へい最う斯うなりますれば致方がご
 ざいません、私の手許から百兩の金子を出しまして、其れを鳥居新
 左衛門さんにお渡し申せば波風立たずに納まる此の場、其れゆゑ私

は是れへ百兩と云ふ金子を持つて参りましたのでございませう、助六「何
 だど……百兩の金子を持つて来た、妙なことを云ひなされるな、お前
 は此爺に謀書謀判をされて四十二兩三分二朱と云ふ金子の工面が出
 来ぬ爲めに二年以來捨置いたる仕宜、其れに今是所にて百兩とは何
 所から其の金子を手廻しなすつた新兵「へい其れは彼の何でございま
 す、今度の一條を田舎の親屬のものへ云つて遣りますと、他人の方
 々でさへも其れ程御心配をなすつて居らつしやるに現在の親類が黙
 つて高丘で見物はなかり兼ると、漸う皆が相談を致しまして、田地や
 畑を質に置いてヤツとこのことで拵へて呉れました百兩の金子、前夜
 遅う持つて来て呉れましたので、其れゆゑ夜の明けを待ち兼ねま
 してお宅の方へ持参致しましたのでございませう、此の金子さへ鳥居
 さまの方へ返しますれば波風なう納まる道理でございませう、助六「ム、
 り然うか、金子を持つて来たと云へば仕方がね、乃公の面ア全き
 り立たないのだが、乃公も事を好むんぢやアね、乃公の面ア全き
 其れで納めるが宜い、新兵併し親方、一言丈けは私にも云はして貰ひ

たいのでございませす、ヤイ紋兵衛、世の中に汝れのやうな強慾非道な奴があらうか、元は只た五兩の金子、其れを謀書謀判をして十五兩だも非道なことをしやアがつた、剩へ其れに利息を添へ四十二兩三分二朱なぞと無法なことを吐しやアがつて、未だ其の上にも飽き足らず、鳥居さまの方から百兩の金子を語り取つたと云ふ、世の中に汝やうな、悪黨と云ふものは又と一人あるものではない、貴様のやうな奴の最後が見たいのだ、其れで世間が渡れるか、今に手前は必ず身に其れ丈けの報ひが来るぞ、紋兵衛を云やアがるのだ、強慾と云はうが何と云はうが一文高た、儲かる時に儲けなくつちやア儲かりやアしねんだ、此の老若れ奴、新兵、モン貴郎は何でございませすか、彼の當家の家主さんでございませすか、家主、ハイ、イヤ最う誠にお前さん達はお氣の毒なことでございませす、何は私が見えをしたつて應へないの、でございませす、新兵、其れでは此の金子を紋兵衛の手から鳥居の方へ返すのが順序でございませす、又取込んで了つてはなりませんから御面倒さまでございませすがお前の手から何うぞ之れをば神田の

細屋町鳥居新左衛門さまの方へお渡しなすつて下さるやう、家主、イヤ承知致しました、其れぢやア私は今日のうちに持つて参りませう、其處で此の金子を渡しましたが、助六も何うも顔が立ちませんが致方なく爺を伴れて芳原を出ました、途中へ來ますと助六「爺さん、何だか乃公ア此んな馬鹿々々しいことではないがア」話が始りやア其れで宜い、併し揚巻は夢の市郎兵衛の許へ預けてあるから何時なと伴れて歸るが宜い新兵、ハイ其の事に付きまして少し親分さまに折入つて御相談を申上げたいたことがございませすから、何れ後より伺ひます、と其處で芳原の土手で別れを告げまして助六は茫然と花川戸の宅へ歸つて参りました、○親分何うでした話、助六「イヤ最う今度のやうな馬鹿なことはない、何うも乃公の面も立たないけれど爺が詰り金子を出して事が納まると云ふのだから我慢をして歸つたやうなことをだ、○然うですか其れはア何よりです、詰り紋兵衛のやうな老若をお斬りなすつたつて仕やうがないぢやアありませんか、で揚巻は何うなすつたつて助六「彼女か、彼女は新兵衛に渡して遣つたら

其れで了ひだ。○だがね親分、彼女を貴郎が家内にしてお遣りなすつたら何うです、然うすれば新兵衛親子も身の納まりが着くと云ふものですから、私は貴郎に彼女を媒介せませうと思つて……助六「ヤイ権九郎、汝ア生意氣なことを吐しやアがるな、助六は揚巻に未練があつてしたやうに思やアがるか権九、いね然うぢやアございませんけれど、詰り彼の女の身の納まりと思ひまして……助六「馬鹿なことぞ云へ、然うでなくとも鳥居が家内に仕やうと云ふのを乃公が爺が可憐さうだと思ひ話に掛つたのだ、其れを色慾に掛つたやうに思はれるのは残念だ、乾兒の貴様までが爾う云ふことを吐すからには矢張り乃公を疑つて居やアがるのだな、権九郎汝のやうな譯の分らぬ奴はね、サア今から出て行け権九、其んな親分……冗談ぢやアございませんせ、家内の執持ちをして投出される奴が……助六「出て行けッ、何と云はうとも汝のやうな奴は一日も置くことは出来ぬ、長居をすれば叩斬るぞ」と大變な勢ひでございませぬから、這々の体で大金権九郎は逃げ出して丁ひました、此方は新兵衛、夢の市郎兵衛

衛の許へ遣つて参りまして新兵衛さて親分さま、色々お骨折を掛けまして實は只今斯様くで話を納めて参りました、之れを聞いて夢の市郎兵衛は市郎其れは何うも宜いことをしなすつた、マア其れで事が圓く納まつたと云ふもの揚巻を伴れて歸りなさるが宜い新兵衛へイ其れに就きまして親分さまにお願ひがございませぬが、其れは外でもございませぬが、詰り今日から宅へ娘を引取りまして宜いのです、又彼ア遣つて紋兵衛のやうな悪黨でございませぬから何んなことをするかも知れませぬ、あつかましいやうですが察そのこと助六さんは未だお内儀もなし、女房にとは嗚呼がましようございませぬ切めて下女代りになと使つて頂く譯にはなりません、市郎、宜い所へ爺さん氣が付きなすつた、乃公も行くと云つては然うして遣らうと思つて居たのだ、ぢやア一ツ話込んで見やうと云つては然うして遣らうと云へイ親分今日は市郎、オ、権九郎、何だつて茫然としやアがつて……権九「大變な騒ぎが出来ました、私も揚巻の体をば親分に執持ちしましたが、事が納まつたと云ふので私も揚巻の体をば親分に執持ちし

六助戸川花

やうと云つたのです、すると非常に親分は怒つたのです、貴様のやうな譯の分らぬ奴は宅には置かないと云つてね、頭投出されて了ひました、何うか一つ其郎から御挨拶を願ひたいのです、市郎ハ、ア然うか、イヤ助六の氣性なら大方さうだらう、さう云ふ彼奴が決心であれば到底乃公一人が云つた處で駄目だ、其處で金神の長五郎其の他放駒の四郎兵衛など顔の利いた連中を大勢築めまして同道致して助六の許へ遣つて参りました助六イヤ是れは皆さんお揃ひで、サア何うぞ此方へ市郎助六、何だか知らないが乾兒の大金權九郎がお前の氣に障つたやうだが、マア何を云つても古い乾兒だ、お前の爲めには一乾兒だから何うぞ是所は乃公達から挨拶をするから勘辨して遣つて呉んね、助六有難うございませす、彼の野郎も私の氣を大抵知り抜いて居るだらうと思つて居るのに、詰らない生意氣なことを吐すから投り出したので……ヤイ野郎、此の後汝ア巫山戯たことを吐かしやアがつたら承知しないぞ、皆さんの挨拶がなかつたら勘辨して遣るのぢやね、二階へ上つてる權九へイ、遠々の休で

六助戸川花

權九郎は二階へ逃げ上つて了ひました市郎時に助六、今日はお前も顔が立たないけれども俗に云ふ癩病者と棒打た、紋兵衛を斬つた所で手柄にもなるまい、マア、納めて遣つて呉んな、就いては揚巻だがね、新兵衛爺の云ふのには、又此の後紋兵衛が手を廻して何んな悪事を働くかも知れないから、何うぞ一ツ花川戸の親分さまの妾にでもして手許に置いて下さるやうと、斯う云つて頼んで居るんだ、事乃公達が媒介人を任やうから氣にも入るまいが揚巻をお前の家内にして遣つて呉んね、助六小父さん、お前さんまでも何ですかさう云ふ了簡になつたのですか、私は今大金權九郎を叩き出したと云ふのも其の通り、最初から此の話が纏つたら彼の揚巻を請り繰りにしたいと云ふやうな了簡であつて中へ這入つたと思はれて見ると、實に助六は根岸の寺西先生へ對しても濟まないのです、折角お前さん方のお進めですが、是れ許りはお断り申します、又揚巻は拘はらす何のくらゐ致意の美しい女がありませうとも私の今の稼業に斯う遣つて町奴です、私は大体生涯家内は持たない積りです、男達町奴な

ぞと云ふものは人に頼まれては火の中へでも飛込まなくつちやアな
らぬいと云ふ騒動が出来ぬにも限りませぬ、其の時女房があれば足
手廻ひ、生涯私は家内を持たないのです市郎ハ、アぢやア何か助六
達衆になると云ふと家内を持つたら可いねいものか助六サ、ア皆さん
方は知りませぬ、お前さん方のことを云ふのぢやアない助六丈け
のこを云ふのです、危急の時には一人なら私の命一ツを棄てたら
宜いのですが、妻子がかりました其れに心を引かされちやアなら
いから、其れで私は家内を持たないといふのです市郎ハ、ウ……金
神聞いたか、年は若い何うも是丈けに賣出す男は違つたものだな
其れぢやア手前や乃公嫁アもあれば悴もあるから本當の達衆ぢやア
ないのだらう長五さうぢねは小父さん、マア、云は、其んなもの
だ市郎ぢやア助六大さにお邪魔を仕ました」と皆のもの戸外へ出
まして何か言合せたものと見なまして、夢の市郎兵衛は宅へ歸つて
参りますると市郎オイ婆さん一寸おいで女房ハ、何だぬ市郎其の硯
箱を此方へ持つて來な」頓てサ、と何か半紙に認めまして市郎

サア婆ア是れを遣るから出て行け女房何だぬ爺さん市郎是れは離縁
状だ女房エ、ッ……何故私やア離縁状を貰ふんだ市郎マテ、云は
ないで出て行け、言分があるなら助六の方へ行け、男達町奴と云ふ
ものはね、嫁アがあるときまさかの時に足手纏だからと立派に助六
がさう云つてるのだ、出て行け女房オヤマア冗談ぢやアないよ、本
當にマア四十年以來伴添うて居て請らないことを助六が云つたから
と云つて、暇を出されてお堪りこぶしがあるものか女彼の御免な
さいまし女房オヤ、金神のお内儀さんか、マア此方へお上り、
女いねあなた良人が今歸つて來ましてね、妾に此の兒を伴れて出
て行けど此んなに離縁状を渡したのでございませぬ、言分があれば助
六の方へ行けど云つてね女房オヤ、お前さんもさうか、私も今
殺り出されやうとして居るのです、○女彼の御免なさいまし女房オヤ
西郎兵衛さん所のお内儀さん、何うしたのです、女ナニあなた良人
が歸つて來ると私に離縁状を遣して出て行けど云ふのでございませぬ
云つてる所へ御免々々這入つて來ますのは金神長五郎の乾兒の女

はたどか、放駒四郎兵衛の乾兒の内儀さんだとか云ふものが、宅へ
歸ッて娘アを叩出したものと見ゆまして是等の輩が三十人程夢の市
郎兵衛の表へ集まつて來ました、さうなると市郎兵衛のお内儀さん
は承知しませんが、○是れから此の同勢で助六の許へ行ッて談判を仕
やうと女隊が一大隊繰出しました、女ハハ御免く、と云ッて大
勢の女が這入ッて來ましたから助六は驚きました、助六「オヤ何だ、お
前さん方は、女ハハ助六、何だもねねもんだ、お前が要らないこと
を云ッて威張るもんだから、眞人は本當に今日から男達になつたど
云ッて私どもは投出されたのだ、サア何うかして呉れ、大勢はガ
ヤ、云ひ出し上へ上ります、するど子供が泣出す、臺所へ小便を
垂れさすと云ふ騒ぎで、弱つたのは助六でございませう、さうも詰ら
ない職らをする奴もあるものだと大勢のものを宥めて置いて早速飛
出して來ましたのは夢の市郎兵衛の宅、助六「親分詰らねことをする
もんぢやアね、か市郎助六、乃公や今日から何やら、斯うやら一人
前の達衆になつたのだ、是れでまさかの時の足手纏がなくなつた、

助六「申、おやアありませせん、其れは私を困らせると云ふものだ、何
うぞ一ッ以前の頼へ納めて貰ひたい、市郎其れぢやア娘アを持つか、
助六「其れはマア私に持たせやうと云ふ思召での計ひか知りませんが
實は私も根岸の寺西先生に立派に口を利いたので、寺西先生さへ
御承知なら如何にも貴郎のお顔を立てませう市郎、ウ其れぢやア
乃公が話をして遣らう」と其處で根岸の寺西「閑心の許へ參つて此の
ことを申しませすと「何うも助六の氣前、イヤ面白い奴である、其れ
ぢやア乃公が媒介人をして遣らう」と改めて寺西が媒介人となりま
して遂に揚卷は助六の家内と云ふことに相成りまして、さて結婚の
式を挙げました、處が助六は自分の女房として見れば親の新兵衛を
今日お田樂酒賣をさせて置く譯にもならず、是れに依つて石町の
宅を片付けさせまして今では之れを自分の宅へ引取り、親分の身と
云ふので昨日に變る新兵衛は結構な身の上になり、一且茲
に納まりが着きました、さて又納まりの着かないと云ふのはお田
樂酒賣の荷物へ金子を投込んだ曲者で、是れは其の頃兩國廣小路

界隈を働きました巾着切りの頭分、奥州遠田郡涌谷無宿の牛若傳次と云ふ山者でございまして、此の投込んだ金子に未練がありまして、其の夜中橋の自身番に於いて細抜を致し、さて右の金子を取返さんと苦心を致して居りましたが、愈々助六の許に引取られましたと云ふことを聞きまして、牛若の傳次花川戸助六の許へ翌年正月十七日の夜に談判に出掛け、奴が一ツの願動と相成つて、遂には南町奉行渡邊大隅守の白洲を煩はしますると云ふお話に引移りますが、一寸一息入れまして……。

第六回

さてお話は少し元へ返りますすが彼の鍛冶橋詰に於きまして山本角左衛門と云ふ役人の手に捕縛をされましたものは巾着切の一人でございまして、尤も兩國界隈を稼いで居りました奥州涌谷無宿の牛若小僧の傳次と云ふ奴でございまして、何分深更に及んで斯る所を徘徊して居りましたから、此奴は強盗を働いた奴だと云ふ見込でお召捕

になつたのでございまして、然るに候う殆ど丑刻過ぎと云ふ刻限でございまして、何れ調へば明日のこととせんと歸途に中橋横町へ來つて自身番に對し此のものを預けになりました其のまゝ山本は引取つて了ひしましたが、斯うなると傳次は失策つたことをした、何うせ今夜調へを受けるときは、己の懐中には怪しなものを所持して居てはならぬと云ふ考を持ちまして、彼のお田樂屋の荷箱の中へ其の盗んだる金子を投込んだのでございまして、斯く自身番へ預けられて見る以上は何でも今晚の中に細抜をして遣らうと云ふので、中々此奴抜けることには妙を得て居る奴でございまして、預けられても別に心配のやうな顔も致しません傳次誠にご主人さん飛んでもない御迷惑でございまして、此んな馬鹿なことはございませぬ、夜更に及んで私は此んな身装をして往來をして居りましたから、何か賊でも働くものだと云ふお疑ひで縛られたのでございまして、ナニ明日になりますれば直ぐにこの分ることでございまして、實は今日品川の方面があつて行きましたすが、朋輩の宅で顔に止められましたして話が長

花川戸助六

引いたものでございませうから遂に歸りが遅くなったのでございませう
 大家「オヤ、然うか、其れはお前さん飛んでもない災難だ、傳次、
 、此んな馬鹿なことはございませぬ、だが大家さん今日品川で面白
 い喧嘩がありましたね、大家「ハ、ア何んな喧嘩でした、傳次「ナ、貴郎
 品川を徘徊して居やアがるマア俗に彼の邊の無頼漢と云ふやうなも
 のです、がね、其れと折助と云ふやうなもの、と二人が喧嘩をしまし
 たが、何うも大變な願きでした、と頻りに調子に乗つて話して居りまし
 たが、傳次は腹を擧めながら傳次「ア、何だか斯う腹が痛んで來まし
 たが、誠に大家さん御面倒ですが大便に遣つて頂きたうございませう、
 大家「ア、左様か、コリヤ治助役提灯に火を点ける、其處で大家が糞
 尻を取つて裏の雪隠へ参りますと暫くして出て参りました、傳次「大
 に御迷惑を掛けました、と又元の所へ遣つて來て頻りに大家を捉へて
 話しかけました、傳次「何うも其の喧嘩は斯うなものです、最初無頼漢と
 折助どが詰り足を踏んだとか何うだとか云ふのが云掛りになりまし
 て何か無頼漢のことですか、何所から集つたか大勢集まつてね、然

花川戸助六

うして折助体ものを散々打つたのでございませう、一旦其れが逃げ
 て歸つたと思ふと何所から集めて來ましたか、今度は折助の飛ぶが十人
 許り遣つて來ました、サアさうなると今度は大變になつて來ました
 ……オヤア、痛い、何うも大家さん御面倒ですが、一過大便へ遣
 つて頂きたうございませう、大家「何うも困るな、役提灯に火を点ける、
 又自分が糞尻を取つて伴つて行きますと、暫く經つて出て参りました
 たが、傳次、其れで大家さん、相手が命知らずの折助と云ふのですから
 茶屋の行燈を叩き破すやら、何しろ貴郎無頼漢が其の茶屋へ逃込ん
 だ、と云ふので内へ飛込んで暴れるやら大變な願きになつたのです、
 處が役人衆が此の騒動を聞いて出掛けると云ふ願きなのです、其れ
 から……痛い、ア、痛た、一寸最う一過大便へ、大家「困るでは
 ないか、一過に片付けて置きなさい、大家も夜明前ですから眠くつ
 て堪りません、大家「治助役提灯に火を点けて貴様付いて行け、小使も
 居眠りをしながら今度は不精を構へまして大家は出て來ませぬ、小
 使は片手に役提灯片手に糞尻を捉へ廊下に來て茫然と立ちながら居

眠りを致して居ります、すると傳次は大便に這入つて小便の際を窺ひ、忽ち糸切齒にて前に縛つた所の繩をアツリと喰切つて了ひました、前の鞆丸藏の所に其の繩を縛つて置いて、傳次は飛出しますと突然、胸の邊りを二三度、足にて踏付けました、アツと云つて倒れる奴を揚げることも出来ません、只ウーン、呻吟いて居りますうちに、其のまゝ傳次は戸外へ飛出し逃出して了ひました、漸う胸を押へながらホツと一息を吐いて、治助ナ、繩抜けだ、と呼はりました時分は最う曲者は二町許り逃げて了つて居ります、大家も爐の側で居眠をして居りましたが、此の聲に驚いて頭を上る機み、上から下げておりました自在に藥籠がございます、己の頭の藥籠と遂に衝突をしまして途端に爐の中へ轉覆て、ハツと灰神樂が立ちますと云ふ、大騒ぎを始め出しました、大家、コリヤ何だつて逃がした治助何だつて逃がしたつてお前さんが細尻を持つて私が提灯を持つて行くのが當前でせう、其れをお前さんが居眠りをして居なさるからです、大家馬鹿を

云へ、手前が付いて行けば氣を注げて居るのが當前ぢやアないか、治助、けれども私だつて眠たくなつたのですから居眠つて了ひました、すると横面を掛りやアがつて仰向けに返つた所を胸の邊りを足でグイ、踏みやアがつたので呼吸も聲も出すことが出来ないのです、飛んでもないことをしたと大家も心配を致して夜の明けを待つて、さて罪人を逃がして了つたものですから大家は、桶々ながらも山本の屋敷へ参りました、段々其の訛を致しました、別段之れを嚴しう取調べんければならぬと云ふ程の賊でもなしはんの深夜に徘徊して居つたものですから召捕つたのであるが、以來は必らず斯様な都合なことがあつては相成らぬと一寸お叱りで事が済みました、さて此方は傳次です、己の隠家へ歸つて來ると、斯うなつて見ると、逆も日中は兩國邊を稼ぐ譯にもなりませず、素よりお田樂屋の荷箱の中へ抱込んだと云ふのは、其の晩宵の程から考へて居りました、神田三河町の吉野屋喜兵衛と云ふ質兩替店へ忍込んで盗み取つた百五十兩の金子でございます、何うぞして彼の子を取返し高飛をしやうと云

ふ考へて翌晩から彼の鍛冶橋界隈を探し歩いて居りまして、尤も己も荷箱の中へ投込みますから一寸行燈には目印が致してと書いてございませぬ、大概のお田樂酒を商ひますものゝ行燈にはおでん酒と一寸文字が變つてございませぬ、己が投込んだ荷箱を擔いで居る奴の行燈は一寸文字が書いてございませぬ、尤も語音はお田樂とも通じませぬ、其處で之れを目印におでん酒と書いてある奴を目印に取つて置きました、其の行燈の付いて居るお田樂屋を探して居りましたが何うしても分りませぬ、其のうち最う其の年も経つて了ひまして翌年の春でございませぬ、其のうち相分りませぬ、何うも残念なことであると、其れく世間の噂を聞いて見ると神田の三河町の質屋へ賊が這入つて金子を取つて逃電をしたから質屋から上へ届けたと云ふ噂でございませぬ、又中橋の自身番で賊が縄振をしたと云ふ評判でございませぬ、お田樂酒屋の荷箱のうちから金子が出て之れを上へ届けたと云ふやうな噂は少しもございませぬ、して見ると彼の爺も百五

十兩の金子が手に入つた處から大方渡世を廢して國へでも歸つて了やアがつたか、何うも残念なことであると益々之れに未練が掛りまして探して居りましたが、丁度正月の十七日のことでございませぬ、神田の松下町を通り掛りますと此邊には古道具などを商ふ宅が澤山ございませぬ、色々な家臺店或は麥蕎麦屋の荷箱でございませぬ、云ふ古い荷箱が並んでございませぬ、荒道具を商ふ家がございませぬ、不圖見ると片側にお田樂屋の荷箱が小道具を付けたなり全り其のまゝ買りに出てございませぬ、其の行燈を見ますとおでん酒とございませぬ、すから傳次ア、是れだな、さては到頭商賣を廢して了やアがつたな宜いものを見付けたと遂に其の道具屋へ這入つて参りまして傳次御免なさい、此のお田樂屋の荷箱は幾らだな亭主へい、マア爺と御覽なさいませぬ、大變に疝性やみの爺さんが持つた荷箱ですがね、其の桶などは皆金輪が嵌つて居りまして送爐だつて成丈け手軽く銅で拵へてございませぬ、小道具なども悉く揃つて居るのです、マア酒どお田樂さへあれば今夜からでも商ひは出来るのですから、マア

此のくらゐなものを一切揃へやうとするも何うしても十兩はかゝり
 ますな、些と私の方は安く買つたのですからお負け申して置きます
 が三兩二分しか些ども負からぬのです傳次「う、随分其れは價値
 はあるが、實は私の乾兒に今度「ア一軒家を持たして遣つたので、
 何か夜商賣でもしたら宜いと云ふのですが、本人はお田樂屋がした
 いと斯う云ふのですから荷箱を探して居るのですが、併し何うして
 も斯う云ふ荷を擔いで商ひをして行かうと云ふ人は食ふことが出来
 ないとか何か都合なことが出来て川へでも身投をしたとか首でも
 締つて當人が死なつて其れで此の荷箱を賣りに出たと云ふやうな延喜
 の悪い荷箱ですとね、渡世をさすのに用ゐるのははらひ不都合です
 併し懸れば確かでせうね、傳次「ハ、アお前さんは大層御幣擔ぎです
 ね、「ア其れなら其の荷箱は十兩に買つても價値があるのです、と
 云ふのは其の荷を擔いで商ひをして居なかつたお田樂屋さんと云ふ
 のはね大變出世をして居ますよ、傳次「へいさうですか、ちやア延喜の
 宜い荷箱ですとね、傳次「宜いとも、其れは石町の「丁目」に何でも貸本

があつてね、佐兵衛さんと云ふ人が家主さんで、其の人の長屋に住ん
 で居た新兵衛と云ふ人ですがね、去年の暮れにすつかり其の荷箱を
 私を買つたのです、其の新兵衛さんは今ちやア大變暮向きも宜くな
 つたものど見れば既に此の正月などは一寸柔かいものを着て杖をつい
 て歩いて居ました何が何所かの御恩居さんとしか思へぬくらゐ、大變
 出世をして居ますよ、傳次「さうですか、イヤ然う云ふことなら三兩二
 分で買ひませう、だが私も是所に持合せがないから明日乾兒を伴れ
 て取りに来ますから済みませんが一寸小二朱一つ手付に置いとさせ
 せう、傳次「左様ですか、ちやア明日中は待ちますが倘つと日が暮れて
 外に買手があれば買りますよ、傳次「其れは宜うございます、願つて小二
 朱を一つ置いて其の道具屋を立出でましたか、ア、宜いことを聞い
 たと直ぐに石町へ廻つて來まして彼の貸本屋の佐兵衛と云ふものを
 聞かせて見ると分りました、傳次「貴郎のお長屋中に新兵衛と云ふお田
 樂屋がございまして、彼れは何う致しましたか、御存じはございませ
 んか、佐兵衛「へい、新兵衛さんをお尋ねなさるのですが、彼の人の出

世は實に驚きましたね、去年の暮れまでは相も變らずお田樂屋でし
 たが、彼のお内儀さんになつたので、其れで爺さんも其の花川戸の親分
 の許へ今では引取られて彼れ丈けの達衆のマア云は、鼻と云ふので
 うも有難うございます」と其處で大きに悦びましたのは相手が俠客
 丈けに話しても早く分るであらうと漸く己の隠家へ立歸りまして其の
 晩暮れて間もなく、去年の暮れ自分が来て居りました其の時の身装
 を致しまして用意と七首を一本隠藏として花川戸の助六の許へ遣つて
 さかの時の用意と七首を一本隠藏として花川戸の助六の許へ遣つて
 参りました、入口をガラリと開けまして傳次「ハイ御免なさいまし」
 十五六になりす上品なお内儀さんが針仕事を致して居ります、是
 れ助六の女房扱巻こと、本名おどわでございまして、廊邊りに勤め
 をして居たものはお針一つ持つことが出来ないといふはれるのは残念

と頻りに針差を前に置き自分は針仕事をして居りましたがどわ「ハイ貴
 郎は何誰でございます傳次「ア、親分さまはお在宅でございますなら
 一寸お目に掛りたいので参りましたのでどわ「オイ然うでございます
 か、親分は一寸他行を致して居りますすが傳次「ア、左様でございます
 か、何所へ行らつしやつたか分りませんかどわ「然うでございませぬ
 些つとも出先を云はないで出たものですから何所と云ふことは知れ
 ません、何か御用でございますなら妾が承はつて置きますせう傳次「
 何うも直さくにお目に掛らないと云ふと些と都合なのですかね
 是非お歸りせうね今晚はどわ「其れはもう貴郎宅は此所でございま
 すから何れども歸つて来ませうと思ひます傳次「ぢやア斯うしませう
 私折角来たのですから一寸お歸りまで待たせて貰ひませう、姐御
 御免なさいませ、云ひながら火鉢の側へ坐込んで了ひました、何だ
 か薄氣味の悪い奴だと思ひながら、之れを見て居りますと袂の底か
 ら取出した塵紙に包んだものを前に於きました傳次「お内儀さん、煙
 草は是所に持つて居りますから一寸何うか其の煙管をお貸しなさす

「と長煙管を借りましてスバリ／＼煙草を喫みながら家の内をキ
ロロ／＼見廻して居ります、向であらうとおどわは少しも油断をせ
ず早く誰か乾見でも返つて来て呉れたら宜いにと思つて居ります
ロロイと今傳次は店の室を見ますと、薄暗りで確とは分りません
ですが、店には火籠がしてございまして、其れへ這入つて暖つて居
ります一人の爺がございます、之れも台所の方へ目を注げて居りま
す、ロロイと透して之れを眺めました、傳次「オ、爺さん、暫くお目
に掛りませんが、お前さんも健全で結構ですね」膝を掛けられて
見ると正敷ワツとして居る譯にはなりませんからスツと其れへ出て
参りました、新兵「ハイ貴郎は全体何誰でございます、最う年を取り
ますと頼も眼力も悪くなりまして一向思ひ出せませんが、何誰で
ございます傳次「オ、爺さん、お前乃公を見忘れちやア濟むまいが
ね、能く考へて見なさい私だよ新兵「ハイ何うも私は氣が注かぬやう
に思ひます傳次「ぢやア何うあつてもお前乃公を知らぬと云ふのか
然う強情れて見りやア仕方がね、忘れもしないが去年の確か霜月

の二十一日の夜のことであつたがね、お前がお田樂烟酒を商うて居
なさる時分だ、最う夜の丑刻過ぎと思ふ頃ひであつたらうか、所も
丁度鍛冶橋の詰でお前の荷箱に出會つて其の時酒を二杯とお田樂
を少し食つて勘定を拂はうとして居る時に厭な小父さんが橋の上を
……新兵「ハイ／＼、ハ、オ、イヤ是れはほんに然うでございまして
私としたことが實に見外れ申して居りました、然うでございまして、イヤ確か
に覺はがございます傳次「知つてるか、其の時乃公アが縛られて……
新兵「ハイ何も餘計なことを仰しやるには及びません、おどわ是れは
宅の親分に用があつてお越でなされたのぢやない、私に用があつて
お越でなされたのぢや、必らずそなたは心配するには及びません、
貴郎實は是所で少々話し兼ねますから御面倒でございまして、何う
か二階へお上り下さいませう、其の上伺ひも致しますから傳次「
、何所でも宜い、乃公は其の晩ね中橋の自身番で細掛けを……新兵「
、ア何うぞお静かになさつて下さいませう」爺はガ／＼慄へて
居りました、漸う手燭に燈を点けて彼のを伴れて二階へ上つ

て参りますと、おどわは非常に心配をして何であらうと段梯子の際にて肥と上の様子を聞いて居りますと新兵「ア貴郎何うぞ之れへお坐りなすつて下さいませ、一寸お待ちなすつて」と自分の居室と思しき所から小さな手行李を持つて参りまして、其の中に仕舞つてございまして手拭で確り巻いてあるものを其れへ取出しまして新兵彼の晩貴郎は定めて私の荷箱の裡へお入れなすつたものを取りにお越でなすつたのでございませう傳次「うた、去年の十一月二十二日の晩から今日までと云ふものは實にお前の所在をば何んなに探して居たか知れやアしない新兵左様でございませう、私は彼の節は何も氣が注ぎませんでございましてが、立歸りまして荷仕舞をしやうと思つて中の送爐の脇を見ると手拭で巻いたものがありまして開けて見ると夥しいお金子、處が一つ貴郎にお願ひがあります、實私の身の上には彼の翌日の朝までは何でございませう百兩と云ふお金子がない時うしたものであらうと取つ措つ心配をいたして居りました、處が圖

らキ貴郎が入れてお行でなすつた百五十兩の金子、他人様の金子とば勝手に使つては濟みませんけれども、何うも春に腹は替られないと云ふ急場の難儀と云ふことになつて居りますので、お越でになりませうまで元々通り金額を合せて置かうと思ひまして濟ませぬことではございませうが、彼の中から一寸百兩と云ふもの使はして頂きましたのでございませう、で残りの五十兩は矢張り其のまゝ斯うして仕舞つてございませうので、何分突然のこととございませうから、何うぞ今晚の所は此の五十兩の金子をお持ち歸りなすつて下さいませ、跡金は暫く御猶豫を願ひたいので、必らず如何やうとも致して跡の百兩は拵へませうから、何うぞ其の邊の所を貴郎にお願ひ申しますので、傳次「オイ爺さん、ぢやア何かい、彼の百五十兩の金子をお前が百兩使つたと云ふのか、冗談云つちやア可げねせ、お前乃公を何だと思つて居る、乃公ア盗賊だよ、奥州涌谷無宿の半若小僧の傳次と云ふ盗賊なのだ、其んな詰らねことを云はねいでア黙つて出しなせぬお前が残らず出したつて乃公は今夜皆持つて歸らうと云はねぬ、何

れ乃公は其れ丈けのこを前前に禮を幾分かして歸らうぢやアねね
 か、其れでお前の方で勝手氣儘な取計ひをして呉れちやア困るぢや
 アないか、私が百五十兩の中五十兩使つたと云つて乃公に百兩渡す
 とか何とか云ふのなら兎も角も、乃公は是許りの端下金は持つては
 歸れねね、申戯しないで出して呉んねね、新兵決して私は貴郎を馬鹿
 にするの何のど云ふのではございせん、今申上げます通り大勢の
 命に關はります大難の場合、其れゆゑ使はして貰つたのでございま
 す、何うぞ只今の所では是丈けしかございせんので、其處は一
 ツ御承知を下されまして今晚の所は……傳次、オイ、ぢやア何うもつ
 てもお前其れしか出さないよ云ふのか、人を馬鹿にしやアがる、ぢ
 やア要らねね、乃公もね實は尻に火が喰付いて乃公の此の首筋は絹
 糸より細くなつて居るんだ、何時コロリと落ちるか知れないよ云ふ
 危い身の上を役人の目を潜つて此の金子に未練があるから今日が日
 までお前の所在を探して居たのだ、其の肝心のお前が盜賊の上前を
 知ねて乃公に充てがひ扶持を食はして是許り持つて乃公ア高飛は出

來ねね、ぢやア仕方がねねから之れをお前に遣らう、其の代りに乃
 公も是れまでだ、明日は名乗つて出て盜賊をしたのは私ですが、一使
 つたのは當時花川戸の助六の許に居る新兵衛と云ふ爺ですと云つて
 訴へるから然う思つて呉んねね、新兵マ、マアモ、減相もない、其の
 やうなことが助六殿の耳に遣入りましたら何うも私は立つても居て
 も居られせん、何うぞ其處を一ツお聞分け下さいまして……傳次、
 馬鹿にするな、是許りの金子は持つて歸れない」と頻に大きな聲を
 出して嘸鳴り付けます、揚巻のおどわは全体何事が起つたかどワナ
 く致して心配をして居ります、折から戸口をガツリと開けまして
 助六「おどわ今歸つたよ……ヤイ何をして居やアがるのだ」ハツと驚
 いておどわは振返りましたがおどわ「オヤ親分お歸りでございますか、
 助六「何を可怪な面をして居やアがるのだとわ」ナ、今ね、何だか薄氣
 味の悪い男が貴郎に會ひたいと云つて來ましたのですが、父さんを
 見て非常に何か談判をして居るんです、二階で彼の通り、父さんは
 大層深へて居るのでございまして……助六「退け、何だか戶外へ聞け

るやうな大きな聲で嗚鳴つて居やアがる」
 二階へ向けて上つて参りました、すると正面に大胡坐を掻いて居
 りました彼の傳次は、此の助六を見るに少し斯う氣味が悪くなつた
 ものを見えて其れへ坐り直ししました。傳次「イヤ是れは親分お歸りな
 さいまし、エー御不在中に出まして、甚だ不都合をいたしました」
 呢と此のものゝ顔を眺めて居りましたが、一寸刀を持つて突立つたる
 まゝ助六「汝ア何だ、助六の許へ来て何を大きな聲で嗚鳴つて居やア
 がるのだ、爺さんお前何うしたのだ新兵、ハイ誠に何うも面目次第も
 ないことで助六「ヤイ野郎、何の用があつて来たのだ傳次「ハイ、エ
 些と爺さんに話があつて来たのですが、お前さまにお目に掛つて直
 きく話をした方が早いらうと思ひます、ア親分兎も角
 も是れへお座りなすつて下さい、私が悪いか此の爺さんが悪いか考
 へて見てお呉んなさい、私は泥棒なのでございませす助六「ナ、泥棒だ
 傳次「ハイ、奥州蒲谷無宿の牛若小僧の傳次と云ふ、實は親分搦摸の
 頭です助六「ハ、ウ、其れが乃公の宅へ何しに來やアがつたのだ傳次

ア親分斯う云ふ仔細なのです、私も去年の霜月丁度二十一日でし
 たがね、ア巾着切許りでは食ふことが出来ぬから何か一つ纏つ
 た仕事を仕やうと思ひまして、實は神田三河町に吉野屋と云ふ質兩
 替店があります、其處の宅へ漸う忍び込みまして帳筆筒の中にある
 百五十兩と云ふ金子を盗み取つたのです、首尾克く其の場を落ち延
 びました、最う彼れ是れ然うです夜中でしたか、夜中過ぎ丑刻前
 と云ふ夜更ですからね、何も食ふものはなし腹を空して彼れをスッ
 と斯う河岸に付いて一石橋を渡つて、急いで、丁度鍛冶橋の
 詰へ來た時に此の爺さんがお田樂酒を商うて居ました、其處で
 ア寒くつて堪らないものですから濁酒を注いで貰つて私は飲んで
 田樂を食つて勘定を目子算で拂をして居ります、處が鍛冶橋の上か
 ら細の御用提灯、八丁堀の旦那衆が歸らうと云ふ場合に喰したの
 ですから、此の爺さんの荷箱の影へ隠れたのです、すると行過して
 其の衆達がハ、ハ、ハと背後へ取つて歸して御用と來たのでせう、
 エイ此奴ア何らい所で目付つたと思つたが懐中には百五十兩と云ふ

金子があるし、此奴を顧されて見れば到底助からぬと思つたのです。荷箱の送込の臨へ寄と投込みました、其れで其の晩私には縛られたのでございませうが、大に的違ひだつたのです、何分深夜に及んで居るからと云つて中橋横町の自身番へ私の身体を預けて置いて調へは明日のことも斯うなつたのです、エ、イ其んことなら金子を預けるのぢやアなかつたと思つたのです、もう今更致方がなく、其の自身番に居るうちに巧く胡魔化して細抜をしました、其れから其の翌晩から役人の目に付いたら今度は助からぬと思ひ、尻に火のついて居る忙ししい身体でございませうが、何でも爺さんの荷箱を探して歩いたのですすが何うしても知れない、漸うのこと今ぢやア親分さまの許へ引取つて結構な身の上になつて居らつしやるとのこと、其れで今晩實は遣つて来たのです、爺さんに話をしますと兎も角も二階へ上つて呉れと斯う仰しやるから、其れでア是れへ上りました、するど爺さんは……親分見てお呉んなさいませし此金です、五十兩私

に金子を出してね、百兩は要ることがあつて使つたから是れだけ持つて歸れ、跡は其の中に取りに来いと斯う云ふのでせう、ア親分無理か無理でないか、私が百五十兩の金子を出されて満更皆持つて歸らうとは云ひませせん、爺さんが預つて呉れた禮は幾分かする積りでございませう、其れを爺さんの方から充てがい扶持を喰はされて見たりにやア歸れねむぢやアございませせんか、冗談言はないで爺さん出してお呉んなさいお前に其丈の禮をするからと云ふのに何うしても分らないのです、だから私も仕方なし、ぢやア是れは要らない、皆お前さんに遣らう、其の代り乃公が調べを受け九時にはお前さんに使はれたことを云ふからと云ふと其れをさしぢやアならぬと云ふのでせう、其れをさしぢやアならぬ、金子も返さない、遂に親分のお宅と知りながら大きな聲を出したやうな譯です、親分考へて見てお呉んなさいませし、私は敢て無理なことを云ふんぢやアございませせん、先程から助六は跡を拱んでワツと傳次の云ふことを聞いて居りましたが助六親父さん、ぢやア去年十一月の二十二日の朝お

前は揚屋町の紋兵衛の所へ持つて来て在所の親類が田地を賣つて拵へて呉れた百兩の金子だど彼の所へお出しなつたのは此奴の金子を使つたのかい新兵誠助六どん實に何とも面目次第もないことで、彼の時に此の人が荷箱の中へ投込んで行かすば其れまでのことでもりますが、金子が手に入つた所から、お前さんは紋兵衛を斬ると云ふのは有理な次第であります、然うなる時はお前さんは下手人に捕られんければならず、然すれば又おどわも黙つて居ない、私も存命では居られない、二人三人の命に關はることも思ひ、金子が手許へ這入つたので済まぬことではあるけれども、賊の金子とは知りながら一時間に合せに使つたやうな次第でありまして助六、大方さうだらうと思つたのだ、何うもお前の手許から彼れ丈けの金子が出来さうなことはないと思つたが、マア宜い、事を仕出來し見れば其れまでのこと、マア父さん心配しなさんな、乃公に任して置きな、ヤイ傳次乃公の耳へ這入つたのは今が始めだが、實當方も其の金子がない時は納まりが着かない入用があつて父さんは

切通盡きて使つたやうな譯だが、マア父さんに拘はらず乃公に免じて今晚は之れで黙つて其の五十兩の金子を持つて歸れ、永くとは云はぬ十日待て、十日経つたら乃公が跡の百兩は耳を揃へて貴様に渡して遣らう傳次「ハイ……」暫く考へて居りましたが傳次何うもね、其れは親分、通常の身体と違つて役人の目を潜つて斯うして此の金子に未練が残つて逃げることも出來ず徘徊して居る身体ですが、マア外ならぬ處の親分様のお言葉ですから、ぢやマア十日待ちませう、だがねね親分鐵面皮しいことを云ふやうですが筆を十日の間此の二階に私を庇圍つて頂くと云ふ譯にはなりませんか助六野郎、巫山戯たことを云ふな、汝ア泥棒だらう、畢竟する身が是丈け不都合なことをしたから乃公も十日の延期と云ふのだ、乃公も花川戸の助六だ、泥棒の手前を庇圍つて何うする、爺さんに逢はないで知れぬものと思へば待てぬことばなからう傳次「ハイ其れは何うも仕方ございません、十日と云へば親分二十六日の晩です、助六然うよ傳次其の晩に來ましてね、ヒロツと親分出來ぬと云つてお呉んなさ

花川戸助六

つたら私は少し思はくがございますから助六「籠棒奴、相手は黒手組の助六だ、餘計な念を押すな、此度十日目の晩に渡して遣るから傳次「へい、ぢやアさうしませう」と五十兩の金子を改めて確かど懐中いたして傳次「爺さんお前も宜い親分さまを婿に持ちなされた、乃公ア大概なら待つのおぢやアないが今日の處は我慢して歸る、大きに親分御面倒致しました」と下へ下りて來ると傳次「姐御夜分出ましてお邪魔をいたしました」と其のまゝ傳次は歸つて了ひました新兵「ア、助六どの、何ともお前さんに氣の毒で……助六「ハテ其んなことを心配しなさんな、何れ十日経つて彼奴が來たら百兩の金子さへ渡しなたら、其れで何だ最う愈々雨降つて地堅まるの道理だ、安心しな」と口には云ふものゝ助六も大いに困つたものでございます此の人の當時の身分ですから十日の間に百兩の金子を拵へやうと思へば出來ぬこともありますまい、だが此奴を彼奴に遣つて何所かへ高飛をして了へば其れまでございます、若し彼奴が上の手で上げられでもする時には斯う云ふ譯で實は助六の方から金子を百兩調達して貰

花川戸助六

ひましたと云はるゝ時には自分の身にも關はるゝこと、何うしたものであらうと考へました、エイ紋兵衛を斬つてお仕置になつたと思へば其れまで、愈々彼奴が二十六日の晩に來たら何所か向島へでも伴れ出して寧ろハツタリ殺害して了ふ、其れが宜からう、露顯をした時にはお仕置にさへなれば其れで済むことと斯く決心をして待つて居りましたが、さて二十六日の晩になりませうと何う云ふものか取りに來ません、ハ、ア餘り彼奴も現金に直ぐに來るのは宜くないと思ひ其れで遠慮をしたかど翌晩待つても來ません、八日も來ない九日も來ない、遂に其の月は取りに來ず了ひ、さて二月の中旬になりまして其れ限り音沙汰もございませんから、さては最う彼んなに云つて居やアがつたが、愈々己の尻に火が付いたものと見えて一旦五十兩の金子で高飛をしたのであらう、一寸延れば尋の習ひ、マア來なければ宜いと安心をして居りましたが、此の方の口から露顯せずして飛んでもないことだから發覺なつて遂に新兵衛助六の兩名は捕縛をされんければならぬと云ふ、愈々渡邊大隅守のお白洲へ引出され

第七回

ると云ふ一段、并は次回に申上げませう。

茲に其の頃神田三河町に大工の與八と云ふものがございましたが、至つて此奴意情者でございまして仕事は一向しない、博奕許り打つて行くと云ふ、同じ神田の紺屋町の浪人鳥居新左衛門は表面は劍術の道場を構へて居りますもの、此奴も夜分になりまして、己は道場へ多くの無類漢を集めまして毎夜賭博をいたして其れで幾分か利益を取つて行かうと云ふ達でございまして、何時も此の鳥居の道場へ與八は遊びに参りまして悉皆取られて倒つて居やうと云ふ、マア俗に鐵火打とか云ふやうな質で、今日しも悉り取られて了つて福祥一枚となり、金玉火鉢を抱へ人の打つて居る博奕を見て己は楽しんで居やうと云ふ、處が暮れて間もなく年頃十七八の娘が鳥居の道場へ遣つて参りました、娘ア、モン一寸お尋ね申します、傳吉何だ、娘其郎のお宅に大工の與八は参つて居りませんか、傳吉ア、與八か、彼奴

は仕やうのない奴だ、福祥一枚で裸へて居やアがる、何ならお前是所から上つて行つて向ふの襖を開けると居るから伴つて歸りなさい、娘有難うございます、彼の娘は耻かしさうに道場へ遣つて参ります、十四五人車坐になつて頻に勝負の真最中、片側で與八は之れを見て居ります、娘オ、お父さん、お前マア何をして居るんだね、一寸一寸過宅へ歸つて来てお呉んなさい、與八「ナニ」籠棒、歸つて来たつて歸れるかい、見る此んなに福祥一枚になつて了つたのだ、娘「冗談ぢやアないよ、マアお母さんが大變喧しく小言を云つてるから妾や誠に辛いんだよ、何うぞ一週歸つて下さい、與八エ、宜いや、後から歸るとさう云つて置け、娘何うを後生だから直ぐに歸つてお呉んなさい」と涙ぐんで娘は歸つて了ひました、之れを先程から鳥居新左衛門は睨と見て居りましたが新左與八、彼女は何だ、與八「エイ、彼女が私の娘です、新左、大層手前には大きな娘があるな、幾才だ、與八エ、十七です、新左、好い嬢致だ、な、與八「マア皆がさう云つて呉れます、大工の與八は病が鷹を生んだと云つてね、彼んなに見えませうが

誠まことに初はつ心こころい温ぬる順なしい娘むすめなので、彼か女めが他人たにんでしたらね、私わたしも何なにう
 とか文ぶん句くを付つけるのですけれども、正ただ敵たてあなれ自分の娘むすめにあたりを
 付つけると云いふ譯わけにはなりませぬ新左しんざ馬鹿ばかにするな、何なにうだ與八よへちや、彼
 の娘むすめを乃公のうこうの妾めかけに遣まさんか與八よへちや、ッ先生せんせいの妾めかけに……へッくマア
 廢やぶしませう、貴郎きろう見たやうな其そのんな怖こわい顔かほをして居ゐらつしやるお方かた
 に娘むすめを充たくわつて御覽ごらんなさい目を眩くらして了しまひます新左しんざコリヤ人を馬鹿ばかに
 するな、實じつは乃公のうこうも此このの節ふしは妾めかけが一人ひとり置おきたいと思おもつて探さがして居ゐ
 のだが彼かのくらの娘むすめなら辛抱しんぱうは出来できぬことはない、貴様あなたが承知しやうちを
 して乃公のうこうの所ところへ遣ますなら手當てあてとして今いま是所こゝで金子かねこを二十兩にじゅうりやう遣まらう、
 さうして氣きに入いつたら娘むすめの着類ちやくるい萬端まんたんの所ところは乃公のうこうが色々いろいろ拵しらへて遣まるし
 乃公のうこうの宅たくへ遣ましてある間まは月々げつげつに手前てまへに五兩ごりやうづゝ遣まるが何なにうだ與八よへちや、
 へイ其そのれは何なにうも有難ありがたうございませぬね、けれどもね先生せんせい、貧乏ひんぱん
 入いてへものはつひ金子かねこを見ると其そのの氣きになりませぬが、何なにしるこれが
 私わたし一人ひとりの子こぢやアなし、宅たくには山やまの神かみも居ゐますから、ぢやア斯あうし
 ませう、私わたしも苦くるしい今いまの手許てしよですからね、其そのの手當てあての二十兩にじゅうりやうと云いふ

ろのを貴郎きろう貸かして下くださいませぬか、其そのれを宅たくへ持もつて歸かへつて娘むすめアに
 見みせムやア又また其そのの氣きになるだらうと思おもひますから新左しんざ、其そのれは、
 承知しやうちだ、だが貴様あなた其そのれを持もつて歸かへつて其そののまゝ使つか込んだら承知しやうちせん
 を與八よへちや其そのんなことが出来できますものか、直ただきに此このの三河町さんかまちに居ゐります
 から、マア兎うも角かくも厭いとだと思おもつたら金子かねこを戻かへしたら宜よろいぢやアござ
 いませぬか新左しんざ其そのれも然しかうだ、ぢやア二十兩にじゅうりやう渡わたして遣まらう、成なるべ
 くなら話を早はやく極ごくめて呉くれれ、其その處ところで小判せうぱんで二十枚にじゅうまい紙しに包つつんで與八よへちやに
 渡わたしました、頼たのむて與八よへちやは之これれを持もつて宅たくへ歸かへつて參まゐりますと、戸外と
 から遣入やる姿すがたを見た女房にようぼうは女房にようぼう本當ほんとうに與八よへちやさん餘あまり人を馬鹿ばかにかし
 でないよ、お前まへ宅たくには斯あう遣まつて米こめを食くふ虫むしが居ゐることは豈いかや知ら
 ぬぢやアあるまい、出でたら其そのの通とほり裸はだかになつて歸かへつて來きる、お得意ごう
 先まへからは仕事しごとが支さへたと云いつて喧けんしう云いつて來きるし、何なにうする積つり
 だぬ與八よへちやマアガヤくガヤく喧けんしう吐はすな、藥くすりで來きねてもね男おとこは
 百貫ひやくくわんの價あ直ただがあるんだ女房にようぼう巫山しやん戯あそぶな、手前てまへのやうな奴やつは三文さんもんの價あ
 直ただもありやアしないんだ與八よへちやヤイ生意氣しやうぎなことを吐はしやアがる、聞き

りながら與八さんは金のなや國へ行つて見たいのだ。へッく之れ
 を見やアがれ」と目の前に投付けました。女房は手に取り上げて
 女房「オヤア何うしたんだね此様なに夥しいお金子を……與八へッ
 く何うだ、今乃公が其れ丈け儲けて来たよと云つたら大層價直があ
 るが、さうぢやアない、實は今鳥居の許へお辰が迎ひに来たらう、
 すると向ふの新左衛門てへのが斯うく斯う云ふ譯だ、得心なら此
 の外に月々に五兩づゝ手當を仕やうと云ふのだ、ア金子を持つて
 歸つて、嫌アにも篤と相談をしませうと云つて持つて歸つたのだが
 何うしたものだらう女房ソレ御覽なさい、幾ら威張つたつてお前さ
 んでは役に立たない、此んな時には妾が畢竟する此の子を拵へて置
 いたからこそです與八馬鹿吐せ、乃公と云ふ意氣な種を蒔いたから
 其れでお辰が出来たのだ女房お巫山戯でないよ、妾が斯う云ふ立派
 な田地を持つて居るからだよ與八人を馬鹿にしやアがるな」何のこ
 とはない百姓の種争ひのやうなことを云つて居ります女房「アお辰
 實の所は宅の手許も苦しいのだから、お前厭でもあらうが辛抱をし

て行つてお呉れでないかお辰ハイお母ア、妾も先程行つて向ふの先
 生の顔を見ましたがね、大變に怖い顔をして居らつしやるのです
 與八「ア其處だて、乃公もお前が隠はれるだらうと思つて斷つて見
 たのだが、何うぞ親の爲めだから行つて呉れお辰お父さん、妾や何
 も宅の爲めですから厭ではありますけれども辛抱はしますがね、其
 の代りに何うぞ今日後博奕は廢めてお呉れよ與八其んなに言つて呉
 れるな、乃公だつて如何にも明日から堅氣になつて一生懸命に稼
 べから女房其れぢやア與八さん、お前明日の朝になつたら此の金子で
 娘の彼の先月置いた着物と長襦袢と妾の彼の常着の半纏と帯と娘の
 帯と妾の着物と……與八「ヤイ」人を馬鹿にしやアがるな、妾のも
 のと娘のものど、娘のものど妾のものど、其れ許り云つてやアがる
 乃公だつて厚袍と三尺帯と受けなくつちやアならねや女房「いねお
 前さんのものは何うでも宜い、お前さんは仕事着物丈けあつたら宜
 いぢやアないか與八「オア」云ふな」其の夜は寢て了ひましたが、
 願て翌日になりますと右の金子を持つて與八は質出しに遣つて

花川戸助六

ました、處が此の野郎質置の名人と云ふので他に二分しか貸さない
 奴を必らず番頭をせよつて一兩の金子を借りて来やうと云ふ質で
 質屋へ来ると四方八方の世間話とか或は此の節は何所其所には斯
 う云ふ演劇があるとか質屋の番頭の頻に氣に入るやうな話を聞かせ
 て其の呼吸で一寸餘分に借りて来やうと云ふのですから、例も跡で
 番頭は吃しまして與八には叶はないと思つて居ります、今日は大變
 に六ヶ敷い顔をして遣つて参りました與八番頭番頭イヤ與八さん
 最にお前さんの無理には困りますよ、アノ流れの口が大分廻つて居
 ますが……與八「ヤイ生意氣なことを吐すな、流れが廻れば出したら
 宜いちやアないか、サア此の通に付いてある、先月置いた娘の着物
 と長襦袢と帯と、其れで纏アの着物と乃公の厚袍と三尺帯と一寸其
 れで三口になつて居るだらう、之れを皆是所へ出して呉んねば番頭
 へイ何うも強氣ですね、今日は與八さん質出ですかね與八「洒落たこ
 とを吐すな、例も質置許りして居て堪るか」廻を取つて番頭は調
 べました、番頭二兩三分、其れから彼れが一兩、其れから一兩二分

花川戸助六

三口で五兩一分ですな」とバチ／＼算盤を置いて居りましたが番頭
 丁度與八さん、六兩一分二朱と二百文許りになります、與八「其奴ア
 承知だ」頓て懐中から小判を其處へ擱出し與八「其れ見る、一枚二枚
 三枚四枚……七枚あるだらう、其れで釣錢を遣せ番頭「オヤア大變
 あるのだね」番頭は其れを取つて一々改めました、其れが頻に首を捻つ
 て考へて居ります番頭「モレ與八さん此の金子は何所から出たのです
 かね與八「ナニ妙なことを云やアがるな、金子が何所から出るつて當
 前サ、佐渡から出て天下の極印が付けば日本國中通用するんだ番頭
 其れは云はないでも分つて居ります、何うも此の金子は些と不正の
 金子でございましてね與八「巫山戯たことを吐すな、其れが可かなけ
 れば是れで取れ、是れが可かなけりやア是れ、其れでも可かなけり
 やア是れだ」と金子を持付けぬ奴が持つたのですから遂に二十枚と
 も格子の中へ投込みました、一々手に取上げまして見ると自分の宅
 の極印、山形に喜の字が悉く打つてございます番頭「二十枚纏めて受
 取りました、與八さん此の金子は昨年十一月二十一日の夜に私

方へ盗賊が道入つて、百五十兩盗まれたので、尤も其の節公儀へ届けて置きましたたが其れは此の小判なので、與八馬鹿なことを吐すな其んなことがあつて堪るかい番頭イヤ此の通り皆私の方の山形に喜の字の極印と云ふものがついでございませぬ、私に此の金子を持つてお前さんを相手取つて願ひますから與八何だど、飛んでもねえことを吐しやアがる、乃公知らねや、其んなことは番頭では何所からお取りなされた、與八何所から取つたつて其れは神田の紺屋町の鳥居先生から受取つて来たのだ、可なければ其の金子を返して呉れ、番頭イヤ返す譯にはなりません、是れは私の方の金子でございませぬ、與八イヤ代物は何うするんだ、番頭其れも貴郎にお渡し申すことは出来ませぬ、與八イヤ汝ア人の金子を皆取りやアがつたのだな、番頭イヤ取つたのぢやアありません、お前さんが怪しい不正な金子を持つてお出でなされたのだから、お前さんを相手取つて願ひます、だからお前さんが受取つた先へ談判なされたつて其れを相手取つて願ひなされたら宜いのです、之れを聞いて與八は眞蒼になつて逃げて歸つて

了ひました、早々鳥居の許へ参つて此のことを申入れますと、鳥居新左衛門は新左何も其んなに心配をするな、乃公は彼の金子は確かに受取つた先がある、其處で芳原揚屋町紋兵衛の方へ此のことを談判すすと紋兵衛も考へましたのは、何うも新兵衛が田舎のものが田地を賣つて拵へて呉れたのだと云つて居たが、さては新兵衛の野郎が盗みやアがつたに違ひない、其處で先方へは一言の引合もせずお奉行所へ願書を出すと云ふことになりました、丁度皆其相當に引合をして四軒から願書を上りましたることでございませぬ、其の月には南町奉行渡邊大隈守のお掛りでございませぬ、神田三河町家持吉野屋喜兵衛よりは「恐れながら願書を以つて願上げ奉り候ふ、一つ昨年霜月二十一日の夜私宅へ盗賊忍入り、金百五十兩盗み取られ候ふ、尤も其の節御届け仕り置さ候ふ處、昨日私方へ質出しに参り候ふ神田三河町大工渡世與八と申すもの右極印打つたる小判を持参仕り候ふゆゑ、出所相尋ね候ふ處、確かなる由を申候ふ間何卒右與八御調べの程願上げ奉り候」と云ふ願面でございませぬ、尙が神田三河町の伊

上げよ 與八へい 大隅其方ことは願面の趣きには娘の辰なるものを鳥居新左衛門の許へ奉公に遣はし二十兩の金子を受取つたと申すが何れはお奉行様の前でございませうか、是れは何う云ふ次第である 與八へい其の…… 其の…… 何でございませう 大隅何と申す 與八いねアアです、大隅アアとは何だ 與八ナニ其の博奕ではないのでございませう、つひ遊びに参るのでございませう、處が私の娘を鳥居さんが見なさつて妾に遣せと斯う仰しやるので、其處で承知なら手當として二十兩遣らうと云ふので、私はアア其の金子を持つて歸り家内に然う云つて相談をして見やうと云つて預つて歸へたのでございませう、其れから話をしますと云ふと娘もアア親の爲めなら行かうと云ひませう、其處で吉野屋へ質出しに行つたのです、すると彼の番頭の野郎奴不正の金子だも云つて皆取つて了ひました、お負けに代物は出して呉れない此んな詰まらねいことではないのでございませう、だから鳥居さんの方へ行つて然う云ひませう、ナニ其れは出所が確かに分つて居るから

と斯う云ひなされる、其處でアア家主さんにもその通り書いて貰つたやうなことでございませう 大隅、ウ、ウ其の儀に違ひないか 與八其れは最う違ひませせん 大隅コリヤ神田紺屋町鳥居新左衛門代五郎藏面を上げよ 五郎へい 大隅其方代人にて凡ての答へが出来るか 五郎へい餘事は存じませぬが此の金子の一條に就きましてはお答へ仕ります 大隅、其方の願書には芳原揚屋町紋兵衛より百兩を受取り其の中二十兩を與八に取らしたのであるか 五郎へい左様でございませう、何分我が師新左衛門は未だ獨身で居りますから妾を一人尋ねて居りましたか、其處で支度料として與八に二十兩を取らしたのでございませう、大隅然らば紋兵衛より受取つたる百兩の中二十兩を使うたとして見れば殘金八十兩は如何致した 五郎へい其れは昨年の暮れに支拂萬端に使ひまして丁度二十兩残つてございませうと申したのでございませう、揚屋町松鶴屋紋兵衛とやら面を上げよ、其方は神田紺屋町鳥居新左

衛門に百兩の金子を渡したと申すが左様か紋兵御意にございます、大隅然らば其の金子と云へるものは其の頃石町一丁目に住居を致せしお田樂酒世新兵衛より受取つたに申すが、併し其の新兵衛と申すものは當時花川戸助六の許に同居致し居ることであるが、其方其の助六の許へ参つて新兵衛に引合うたであらうな紋兵へい何うも受取る仔細あつて受取つたのですが、彼れはほんのお田樂酒なを商ひにして其の日暮しのものでございませぬ、何うも是れは怪しいと心得て居りましたが、却つて新兵衛方へ引合ひましたら己の悪事の露頭を恐れ風を喰つて逃げましてはお上様へ御厄介を掛けると思ひまして、少しも向ふへは引合は致しませんのでございませぬ、大隅黙れ、其れは上を差越したと云ふものである、萬一彼れが風を喰つて當所を逐電するとも其れは上の勢を以つて召捕るではないか、皆其れ相當出所を調べるのには其方丈けが先方へ引合はぬと云ふのは甚だ都合である、併し今日の所は下げて遣はす、明日は其方丈け出頭致せ、他のものは追つて呼出す、此の金子は奉行預り置く

と云ふので皆々其の日はお下げに相成りました、さて其の夜の中に花川戸助六の許へ捕方をお向けになりまして新兵衛、助六の兩人をお召捕りになつたのでございませぬ、兩人はハツと驚きました、さては牛若小僧の傳次が捕縛になつたのであらうと思ひました、今最上覺悟を極め、其の夜は上屋に留置になりまして翌日になつて腰纏のまゝお白洲へ引出されました、見ると別段傳次は居りませぬが芳原の紋兵衛が出て居りますから、不思議に心得ながら兩名は其れへ坐りましたが大隅ユリヤ淺草花川戸助六面を上げよ助六へは其れ當時其の方の宅に新兵衛と云へるものを同居させ居る由であるが何う云ふ次第で其方の許へ之れを同居させてあることである、助六左様でございませぬ、此の新兵衛と申すものゝ娘を、縁あつて昨年の暮に至つて私の家内と致しましたので、取りも直さず私の爲めには勇に當るものでございませぬ、其れで自分方へ引取りまして世話を致して居つたのでございませぬ、大隅、ウ左様か、新兵衛、汝を召捕つたのは餘の儀でないが、其方は昨年霜月二十二日に至つて是れ

なる松鶴屋紋兵衛へ百兩と云ふ金子を渡したと申すが左様か新兵左様でございませぬ、私の手から百兩と云ふ金子を渡しましてございませぬ、大隅其の金子は何れより其方の手許へ還入つたのである、新兵其れは些と仔細がありまして其の前夜に還入りましたのでございませぬ、……大隅黙れッ仔細あつて還入ると云ふことがあるか、察する所其方は昨年暮十一月二十二日の夜に神田三河町吉野屋喜兵衛方に賊に這入つて百五十兩の金子を奪取つたのであらう、何うぢや有体にて申上げよ新兵イヤ最う斯うなりましたら是非に及びませぬ、決して私に左様なことをいたしました覺悟はございませぬ、全く其の盗取りましたと云ふものは外にございませぬ、詰り私は二十一日の晩に最う丑刻頃でもございませぬか、鍛冶橋詰で商ひを致して居りますと、一人の怪しい男が私の荷箱の側へ來まして濁酒を飲み又お田樂を食べて居りましたが、其の前を圖らずもお通り掛りになつたお役人さまの手縛られやうと致しました、其時私は氣が注ぎませぬでございませぬが、私の荷箱の中へ竊と投込んで行つて了つたのでございませぬ、

さいませぬ、跡で宅へ歸つてから金子のあることが氣が注ぎまして、濟みませぬことでありましたが、其のうち百兩を使ひましたので、大隅ナニ荷箱の中へ投込んだ金子だ、……其の賊は貴様とは同類か新兵中々何う致しまして同類なぞと云ふことは決してございませぬ、尤も吉野屋さんの宅へ還入つて金子を取つた賊は奥州遠田郡浦谷無宿の牛若小僧の傳次と申すものでございませぬ、大隅然らば貴様は同類に違ひなからう、馴染がなくてお田樂や濁酒を食ふぐらゐのことで、乃公はさう云ふ賊だと云つて貴様に名前を云ふことはあるまいがな、新兵其れは其の時存じませぬでございませぬが、當人が今年の正月の十七日の晩に私の居る所を知つて花川戸へ、其の節荷箱へ金子を入れて置いた其金を返せと云つて取りに参りました、其の節牛若小僧の傳次と云ふことを申しましたのでございませぬ、大隅ナニ金子を取りに來た新兵ハ、大隅其れを何うして渡した新兵其れは突然に参られたのでございませぬから、跡の五十兩丈けを渡しまして百兩の金子は當分待つて貰ひたいと申しました、中々當人は聞入れませぬ、

せん、其れを婿助六が中へ這入つて話をし呉れましたのでござい
ます大隅、ウ、ウ……ナ、助六が中へ這入つて話をした、コリヤ助六
汝は當時花川戸に住みて男達とか町奴とか申して居るが、上にも
様なものをお許しになるのは、若し怪しな賊なぞがあつたら御奉公
の爲めに召捕つて上の手に渡すのであるが、何故左様なことを致し
た助六、誠に其の儀は恐入りました、是れが表立ちまする時には何
も身新兵衛が賊のものど知りつゝ使つたと云ふことになりましては
彼れが罪の願れるの道理でございませうから、婿助六の間柄、其れゆゑ斯
くは取計ひましたので大隅、ウ、ウ、して幾日延を致した助六左様
でございませう、十日待てと申しまして其の五十兩を持たして歸しま
した大隅、して十日経つて來たか助六、其限り参りませせん、今も
て何の音沙汰もございませんから、大方彼れも何所かへ高飛をした
ものであらうと思はれます大隅、何うも如何に窮の悪事であるからと
云つて其れを包んで居ると云ふことは甚だ宜くない、コリヤ新兵衛
其方はよし盗まぬにもせ士賊の金子とあれば不正の金子ではないか

其れを又何ゆる松屋紋兵衛に渡したか新兵衛、是れに居ります松
屋紋兵衛と云ふ奴は念の入つた悪黨でございまして、今を去るこ
と十四年前私の娘を身賣いたしませう時に判を頼んだものでございま
す、其の時に三浦屋へ娘を勤奉公に遣はしまして金子を持つて歸る
途中、賊難に罹りまして金子を全額取られて了ひ、仕方がないので其
の翌日此の判人の許へ参りまして娘の年期を切廻して貰ひたいと云
ひましたら其れも財ひません、爺さん乃公が五兩の金子を貸して遣
るからと云ふので、其の五兩の金子を借りましたのが私の粗相なの
で一昨年に娘の年期は満きまして取戻しに参りますとお前に十五兩
の貸金がある、元利揃へて四十二兩三分二朱になる、其れを返した
ら娘を戻して遣る、然もなければ證文に書いてある通り娘は乃公
が貰つたと云つて何うしても返しません、凡そ一年半ばかりは其の
まゝになつて居りましたが、處が圓らす助六親方の許へ商ひにまゐ
りまして話をしましたら、如何にも可憐さうなものだ、私が話をし
て遣らうと、其れでマア談判うて呉れましたが、何うしても四十二

兩三分二朱より負からぬと申します、其處が助六親方も金子ゆゑ後へ引いたと云はれるのは残念だ、如何にも出さうと云ふことになりまして、處が最う爺が期限が切れても取りに來ないから私の娘分として鳥居さんの方へ約束があるから一遍向ふへまゐつて談判うて呉れと斯う申しました、處が助六の方を出し抜いて置いて己が其の鳥居の方へ参りまして百兩の金子を取つて娘のおとわを向ふへ渡すと云ふことにいたしました、其れが爲めに助六のと鳥居さんとが命の取り遣りをする程の騒動になりかけましたのを、漸う仲裁する人があるまいして詰りおとわを私の方へ返し、又鳥居の方へは紋兵衛の取つた百兩の金子を返すと斯う云ふことに話が落着まして、其處で助六さんが再び紋兵衛の宅へ談判に参りますと金子は百兩取つたが使つて了つてない、其れが氣に入らねば殺すなど何うなりと勝手にしると強情な無法なことを申します、既に其の時に斬らうと云ふのを家主さんが中へ遣入つて一日の日延になりましたが、逆も此奴は強情な奴で出したさうなことはなし、ア、百兩の金子があつたら事が

納まるであらうと思ふ其の矢先に荷箱の中へ投込んだ金子でございませす、盗賊の金子と承知しながら使ひましたのは私が如何にも都合でございませす、さう言ふ次第で元は五兩の金子でございませす、其れに十五兩と云ふ謀書談判をいたして四十二兩三分二朱と云ふやうな法外なことを申し、未だ其の上には私の娘を勝手氣儘に百兩の金子で鳥居さんの方へ賣渡して其の金子を取込まうと云ふ無法な奴でございませす、依つて右様の次第になりましたので、何うぞ御推察の程を願ひ上げ奉ります、と口無調法の爺でありますが、何分紋兵衛の爲めには酷い目に遭つて居りますから此のことは詳しく申上げます、助六は腹の中で大きに悦びました、能く云つて呉れたことでも、と思つて居ります、此の次第をお聞きになりましたか奉行大隅、コリヤ松鶴屋、只今の新兵衛の申立てに依つて見れば其方は中々不埒な奴だ、謀書談判をして居るな紋兵衛、イヤ恐れながら申上げます、全く其れは偽りでございませす、素より十五兩と云ふ金子を貸しましたので、其れが四十二兩三分二朱と假登りに登つたのでございませす

から、鶴の目鷹の目となつて牛若小僧の傳次の所在を探して居りま
すうち、遂に此のものゝ配下を淺草須賀橋にて召捕りになりまし
たる許りに、花川戸助六は無實の罪を蒙つて愈々非常の拷問責苦に
遭はうと云ふ助六の災難より、揚卷のおどわは夫の爲めどあつて淺
草觀音へ祈願を籠め其の人殺しの當人の所在の分るやうと斷食をい
たして祈願に及ぶと云ふ一段、追々申上げますが、一寸御免を蒙
りまする。

第八回

茲に八丁堀の與力山本角左衛門と云へるものは現在昨年の霜月牛若
小僧の傳次を召捕りながら、此のものの綱拔をいたして後は別段これ
と云ふ犯罪の廉もなきことゝ心得て居りました處、此度の一條に就
いて是非彼を召捕らんければならぬと云ふので、頻りに四方に手配を
致して吟味に及ぶと云へる更に其の所在が分りません、處が或時山
本は何かか調への筋がありまして、淺草の方から三四名先手を伴れ

て出掛けて参りました、今藏前へ差掛らんと須賀橋の牛へ渡つて参
りますと、藏前の方から泥棒々々と云ふので、大勢のものが
追駆けて参ります、處が一人の新米の柄模と見せまして眞蒼になつ
て逃げて参りましたが、此奴大勢のものに追詰りられ、己れも泥棒
々々と呼はつて居ります、現在目の前に逃げて来るものを捨て置く
譯になりませんから、其處で下知を致しまして橋上に於て彼の曲者
を取捉へました、すると背後から向願卷片肌脱ぎ、天秤棒を振被つ
て、追駆けて参つた彌次馬連でございます、〇イヤア旦那、
其奴は大變悪い奴で、其の野郎が泥棒なのでございます、角左、
して貴様は何だ、〇ヘイ私は此の邊のものでございまして……角左
何を取られたか貴様は、〇いね私は何も取られはしません、此奴
が人の紙入を取りやアがつたのです、角左、此の野郎、手前何も取られ
ないのに何だつて其んな風体をして追駆けるのだ、云ひながらボカ
リ横面を掛られました、大いに肝を潰して居る所へ追々背後から追
駆けて参りました、〇オイヤ可けない、到頭旦那に取捉つて了つた

のだ」背後の方でガヤ／＼言つて居ります、頼て山本は此のものを引立てさせまして漸う此の町内の自身番へ引張つて参りました、早速當人を調べると云ふので角左＝リヤ面を上げる、貴様は名は何と云ふ、桐摸へい私は忠次と申します、角左へ、ア年齢は何才だ、忠次＝二十五でございます、角左無宿か、忠次左様でございます、角左中々貴様は大膽い奴だ、定めて是れまで處々にて悪事を働いた奴であらう、人殺しは幾らある、放火も致したか、忠次「いへ中々其んな大きな泥棒ぢやアございませぬ、漸う食へぬが悲しさに桐摸の仲間入を致したのでございませぬ、何うぞ後生でございませぬからお見免しを願ひたうございませぬ」云つてる所へ表から一人の爺が駆込んで参りました、爺＝一旦、那樣何うかお願ひでございませぬ、私が其奴に紙入を取られましたのでございませぬ、何うぞお取戻しを願ひたうございませぬ、角左ハ、ア貴様は何所か、爺＝牛込の改代町に住居を致します、米屋の太郎兵衛と申します、只、爺前まで一寸米の引合があつて参りましたのでござ

さいませぬ、其のものに紙入を取られたのでございませぬ、角左中には金子が何程あるのだ、太郎＝金子は僅か二朱許しか、這入つてありませんが、中に印形だの書類など大切なものがございます、角左ソレ改めて見る」と指圖に従ひ手先は懐中を調べますと、爵金木綿の誠に古い財布が一つ、紙入は脊中の方へ廻して居りました、取出して見ると誠は何うもハヤ古い紙入でございませぬ、金子は僅か二朱しか、這入つて居ないから、山本角左衛門も驚きました、角左是れ許りのことで二百八から追駈けやアがつて……此の紙入であらう、太郎へい左様でございませぬ、角左「ぢやア持つて歸れ」爺は悦んで早々自身番を飛出して、了ひました、彼の財布の中を改めて見ますと中には文銭許りで二三文這入つて居ります、其の時は大抵小銭は、鑓銭が七分、金銭は三分しかないものでございませぬ、其れに此奴の持つて居るのは皆文銭許りでございませぬ、角左「ハ、汝は此の錢は何うしたのだ、忠次へい、誠に何うも人さんのものを取りますれば直ぐと取捉まつたり追駈けられたりします、と云つて取らねば食ふことが出来ませぬ、仕

方のない所から此間淺草の観音様の捨馬堂を見ますと此の文銭で五重の塔が拵へてございました、錢を一文宛並べて其れへ銀を打つてございます、其の上から金網が張つてありましたのを夜締と参りまして其れを下し、マア銀板で一文づゝ取りましたのには餘程骨が折れましたが、其れを小使錢に使つて居りますやうなことで角左、恐しい客な泥棒だ、ハ、ア手前だ、能く寺の門の釘隠を取つたり、橋の上の金物を取りやアがるのは忠次、ヘイ其れはマア二三通違つたことがあるのでございます、角左、仕やうのない客な泥棒だ、此んな奴は直ぐに助けて遣つても宜いとは思召した角左、何うも貴様は客な奴だ、手前のやうな客な奴でも矢張り頭とするものはあるのか、忠次、ヘイ其れはございます、私は此んな詰らない人間ですが、私の親分と云ふのは中々仕事は巧うとございまして角左、ハ、ウ、手前の親分と云ふのは何だ、忠次、其れは兩國界隈を稼いで居りますうちにも、牛若小僧の傳次と云ひまして何うも仕事は巧いものでございます、山本角左衛門は之れをお閉さになりますと、探つて傳次を探索中では

さいますから、宜いものが捉まつたとお悦びになりましたが角左、ハ、ア手前は傳次の乾兒か、親分の傳次は何所に居る、忠次、ヘイ其の親分は當時大分遠くへ行つて居りますので、角左、然うだらう、何でも此の傳次を至急に取調べんければならぬ儀があつて奉行所では探し居るのだが、何うも所在が知れない、何所へか高飛をしたのだらうと思つたが、傳次の所在を云へ、然すれば手前は無論助けて遣る忠次、ア、然うですか、何うも親分は何です、餘程遠方へ行つて居ります、角左、ハ、ウ、餘程遠方と云つて何所へ高飛をして居るのだ、忠次、エー其の西へ行きました、角左、西へ行つた西は何所だ、忠次、大變遠方でございます、角左、大變遠方では分らぬではないか、駿府へでも行つたのか、忠次、いぬ最些と西でございます、角左、では名古屋へでも高飛しやアがつたのか、忠次、最う少し西で、角左、ぢやア京都か、忠次、未だ西でございませう、角左、何所へ行つたのだ、大阪か、忠次、何でも大阪から西だと云ふことを聞いて居ります、角左、四國か、忠次、四國の尙だ、西でございませう、角左、何所と云ふのだ、廣島へでも行つてるのか、忠次、いぬ尙だ、其の西で

さいます角左ちやア筑前の方か忠次いふは角左長崎か忠次最些と西
 でございませす角左扣る役人を馬鹿にして居る其んなに西がある
 か忠次あるさうでございませす西は何でも十萬徳土とか申しまして
 何うせ親方のことですかから極樂へは行けさうなことはございません
 大抵地獄だらうと思つて居ります角左馬鹿にするな此の野郎死ん
 だのか忠次ナニ貴郎殺されたのれでございませす角左其んならさう云へ
 早く何時のことだ忠次其れが其の丁度正月の十九日の晩でしたか
 ね仕事をするこども出来ませす詰らないもんですから夜分宿に
 泊る錢もないのでございませす仕方がないので丁度其の晩は兩國の
 廣小路に殿笠張の小屋の中へ這入つて私は寝て居りましたするど
 最う頓て亥刻でもあらうと云ふ刻限でしたか類に其の前を鼻歌を
 臨つて通るものがございませす親分ちやアありませんかと云つて内
 らから出ますとヤイ忠次手前何だつて此んな所に居やアがる實
 は親分寝る所がないものですから此の空小屋の中へ這入つて居りま
 すと申しましたら客な奴だ手前一人寝泊りする所がねねてへ奴

があるか乃公アこれから深川へ泊まりに行くのだ一緒に伴れて
 行つて還らうかと云ふので其れでア親分の供をしまして還つて
 参りましたするど薄穢い身装をして居やアがるから背後から来い
 と云ひますから親分より二十間程離れて背後から附けて行きます
 と親分は鼻唄詠ひながら頓て兩國橋を渡りまして本所のお船藏の
 所へ掛つて参りますとキヤツと云ふ親分は聲を揚げました月明
 に軒下へ這入つて透して見ますと何だか怪しげな奴が親分を頭
 殺して了つたのです其れなり親分の死骸を川の所へ持つて行つて
 投げ込んで了ひました私れも其れを見て居りましたが大變だと思
 ひまして聲を立つたら私も殺られると思ひましたから肥と斯う軒下
 に身を隠して居りました其れなり殺した曲者は逃げて行つて了ひま
 した何のこどだいや其んなのなら親分は懐中に金子も持つて居
 たであらう預つて置いたら宜かつたと思ひましたか仕方がない元
 の空茶屋の中へ這入つて寝たやうなことでございませす角左山本角左
 れに違ひないか忠次其れは最う其れに違ひございません

衛門殿も考へました、何うも此の傳次が知れないと思つて居らつし
 やつたが知れない筈で、何しる人手に掛つたとして見れば是れは事
 に依つたら助六が殺したのかも知れないと云ふ、お疑ひが懸るのは
 無理もございませぬ、其處で角左忠次、其の殺したものは少し當方
 に考當るごことがある、手前は其のものゝ顔を見たら是れだと云ふこ
 とは分るだらう忠次「エ、其れはヤ、逃げて行きませしたので確り
 とは分りませんけれども、何でも身体の大さな奴でございませした、
 角左「ちやア手前を引立てる、其れで若し其のものを見て是れに違ひ
 ないと云ふことが分つたら汝は許して遣るから、違ひない所を云へ
 忠次「へい宜うございませす」其處で此のものを引立てまして愈々渡邊
 大岡守様に引渡すと言ふことに相成りました、事の次第を申入す
 と渡邊殿も是れは助六であらうと云ふお疑ひが懸りました、一旦町
 預けになつたる助六をお召捕りと云ふことになりましてお白洲へ引
 立てましたから、何事であらうと助六は罷出でましたが大岡「コリヤ
 助六、其方を召捕つたのは餘の儀でない、彼の當年正月の十九日の

夜本所お無難許に於て牛若小僧の傳次を殺害いたしましたのは其方であ
 らうと之れを聞いてハッとお助六は驚きました、尤も左様な處は必
 さいませんが、新兵衛の一件に就いて十日の日延を致しまして、必
 らず其の當日に來たら何所かへ伴出して殺害けて了はうと思つて居
 りました、さては牛若小僧の傳次は正月の十九日に人手に掛つて
 相果てたかと氣が注ぎまして驚きましたるものゝ、自分も覺はな
 いのでございませすから助六「恐れながら申上げます、決して私は左様
 なことを致した覚えはございませぬ大岡「黙れ、汝は身の罪を隠さ
 うと云ふ處から思はくを致したに違ひなからう、コリヤ忠次汝の親
 分を殺したと云ふのは此のものではないか何うぢや」處が此の野郎
 至つて臆病な奴で素より親分は誰が殺したと云ふ顔も分りさうなこ
 とはございませぬ、けれども此のものだと云つたら貴郎は助けて遣
 ると云はれて居りますから、助六を見ますと忠次「へい、左様でござ
 いませす、此のものです、此の人が殺したのです」驚いたのは助六
 でございます、助六「ヤ、手前何だつて其んな詰らねことを云や

アがる、乃公は其んなことをした覚えはない、思次「イヤ巧く云つて
 るせ、お前が殺したのに違へねんだエー此のものに相違ございませ
 せん、何うぞ私はお助けを願ひます大隅助六上にもお見込が付いて
 居るのだ、身怯なことを云ふな助六「へい何うも私は非常に迷惑で
 ございます、既に二十一才の若年の御にも據なき事情あつて戸澤長屋
 に住んで居ります時分に同長屋の切られ藤次と云ふものを殺しまし
 た時にも私から名乗つて出ましてお縄を頂戴いたしました、助六は
 人を殺して置いて殺さないで云ふやうな身怯なことは申しません、
 丁度今考へて見ますると十九日の晩は私は風を引いて居りました、甲
 背から決して外出は致しませんでした、是れは外に罪人があるに相
 違ございませぬから、篤と御吟味を願ひたうございませぬ、何分側に
 忠次と云ふ奴が居りました此の人だと云ひますし、役人も大抵助六に
 であらうと云ふ見込が付いてございませぬから上ではお許しがござい
 ませぬ、其處で愈々強情を張るに於ては痛め吟味にでも及んで白状
 させると云ふので、實に災難なのは助六でございませぬ、傳馬町の御

半内へ繫れがまして日々此のものをば痛め吟味と云ふことに相成り
 まして手を變へ品を變へ様々の責苦に及びますが、假令何様にされ
 やうとも其の身が海者に掛らうと知らぬことは飽くまでも知らない
 とあつて何うしても白状致しません、處が此のことを承はりました
 る揚巻のおどわでございませぬ、夫が日々の責苦に遭つて居ると云ふ
 ことを聞きまして、如何なればこそ是れまでに度々間違ひと云ふこ
 とになるであらう、素よりお父さんの心得違ひより起つたこと、何
 うぞ致して夫の冤罪を助けたいと云ふ考へから、其の身は淺草觀音
 に祈願を籠め斷食を致して籠堂へ來り毎夜のことのやうにお籠りを
 致しまして一寸心不亂に祈りますることになりましたが、只今では午
 後六時限り門は閉まりますが、其の時分は本堂の片側に籠堂がござ
 いました男は男、女は女と何れも夜分などは其れへ參つて籠つてお
 通夜を致し一心に願ひを致しましたもので、揚巻のおどわは其の身
 は水を浴び一生懸命となつてお籠りを致しまして何うぞ夫の無實の
 災難を助けたいと云ふ精神でございませぬ、處が丁度七日目の晩で、

花川戸助六

毎夜のこのやうに祈つて居りましたが、何分絶食と云ふので、
 煙の美しい女も目は落凹み煩骨は顯はれて青白くなつて只々一心に祈
 つて居りましたが、最う彼れ是れ夜の亥刻前と云ふ頃、火の用心
 と記したる提灯を携へ此の淺草の寺内に住んでお堂の守を致して居
 ります義念と云ふ坊主でございませすが義念火の用心……と呼はり
 ながらお堂の周圍を廻つて居ります、何れも籠堂の中には頻に普門
 品を唱へて居ります聲が幽かに聞えてあります、義念ア、何うも皆さ
 ん方の信心には感心だ」と願つて此方へ歸らうと云ふと、丁度賽銭函
 の脇の方のお堂の椽の下に當つて頻に大きな祈の聲が聞えます、誰
 が此んな所へ道入つて寝て居やアがるのだらう、覗いて見ますと一
 人の食乞が頭から薙を被つて寝て居ります、義念「コリヤ、乞食起き
 んか、此の野郎貴様達は此んな所へ道入つて寝るんぢやアない、起
 きろ」此の聲に乞食は物り頭を上げました、義念馬鹿を云へ手前達は橋
 の上へ行つて寝ろ乞食イヤア誰かと思つたらお前は義念さんだな、

花川戸助六

其んなに「コリヤ」云ふものぢやアねぢや、提灯の燈で能く見ると此
 のものは淺草の北馬道に立派な八百屋がございまして、其處の悴の
 因果坊主の岩次郎と云へる奴でございませ、性來が馬鹿な人物で、
 幾ら兩親が意見をしても宅を飛出して乞食になると云ふ質なので
 さいませ、何度伴れて歸つて着物を着せて遣りまして飛出して了
 つて裸になりませすから、最う兩親も後には見限つて了ひまして或る
 寺へ頼んで坊主にしましたが其れとても續かない、乃公ア乞食が宜
 いのだよと云つて何うしても乞食になりませすから、今では兩親も寄
 付けません結句之れを氣樂に思ひまして因果坊主の岩次郎と云つて
 此の邊の者は大概皆知つて居ります、義念貴様は岩か岩次郎と云よ、
 乃公は淺草に生まれた人間だ、是所で寝て居たつて宜いぢやアない
 か、義念馬鹿を云へ皆さんが斯う遣つて籠堂でお籠りをして居な
 のに、其んな所で肝を發くと邪魔になる、寝るなら橋の上へ行つて
 寝ろ、岩次郎が義念さん、さう云ふ譯にはならない、大變此頃は用心
 が悪いからね、義念何を詰らないことを云やアがる、手前乞食ぢやア

ないか、其れに何を取られる岩次お前はさう云ふがね、大切な命
 を取りやアがるのだ、試斬りが此頃大變流行つて居るんだ、だから
 橋の上で寝れば何うも險存だ、其れで此の縁の下で寝て居るんだ、
 是所なら殺される氣支はないから、義念何だ試斬りだ、汝は其んなこ
 とに出會つたのか岩次出會つたとも、其れがね丁度正月の十九日の
 晩だつた、新川に酒屋が澤山あるだらう、彼所に乃公の得意が澤山
 あつて、其の日乃公はお貫ひに行つたら、宜い所へ来た、手前に遣
 らうと思つて残して置いたと云つてね、酒屋の番頭さんが下垂酒を
 此の面桶に一杯お呉んなさつたのだ、甘かつたね、其れを皆飲ん
 で了つた、處が酔らつて来て最う内へ歸ることが出来な、義念馬鹿
 を云へ、貴様は内はないぢやアないか岩次宅がねいつて吾妻橋の下
 が乃公の本宅にしてあるんだ、處が其處まで来るのが面倒臭いから
 エ、イ等と下屋敷で寝やうと思つてね……義念詰らないことを云へ
 此の野郎、乞食に下屋敷があるかい岩次お前は其んなことを云ふ
 から可けない乃公の下屋敷は夏季になるとね本所のお船藏と藏と藏と

どの間が下屋敷になつて居るのだ春先は向島の梅若塚の森の所が乃
 公の下屋敷、其れは何うも夏何か彼の藏と藏との間で寝て居たら何
 んなに涼しいか知れない、寒い時分は仕方がない、がア是所で寝
 やうと思つてね、何しろお前下に蒲團を三枚上から五枚も被つて寝
 たのだらう、義念「イ馬鹿を云へ、手前蒲團があるか岩次失禮なこと
 を言ひなさるな、今だつて此の通り四枚も着て居るぢやアねか、
 義念其れは手前蒲團だらう、岩次馬鹿を云へ、正宗だの劍菱だの男山な
 んてへ皆宜い蒲團だらう、義念ハ、ハ、色々なことを云やアがるな、
 其れで何うしたのだ岩次何うしたつて蒲團を被つてアツとして居る
 と、乃公の枕許を鼻眼を踏つて通りやアがった奴がある、するど片
 側の軒下からバツと出やアがったと思ふどキアツと吐した、驚いて
 乃公ア蒲團の間から首を出して見ると恐ろしい怖さうな奴が二人來や
 アがつて到頭殺してしまやアがつたのだ處が懐中へ手を突込みやア
 がつて金子を取り、其れで足を捉へて乃公の枕許を容赦なく引張つ
 て行きやアがつて川の中へドロドロと投込んで了やアがつた、最う

其れからと云ふものは乃公は怖くつてね、
 二人とも、マアこれで宜いと吐して手を洗つて其んなりて立去つて
 了つたがね、其れが今に乃公の目の先にチヤ付いて居る、最う其れ
 から怖くつて仕方がないから今夜は此の椽の下へ這入つて寝て居る
 のだ、義念「イヤ其れはお前花川戸の親分が殺したと云ふので大變な此
 頃は願ぎになつて日々拷問に遭つて居ると云ふことだ、岩次「エ、誰
 が……」義念「サア本所のお船藏の殺人しと云ふのは花川戸の助六親分
 だ」とよ、岩次「何を云やアがる、乃公助六の親分さまの宅で始終色々な
 ものを貰つて居るから夜分だつて、親分か親分でないか顔を見れば
 分つて居る、其の時の野郎は恐ろしい怖い顔をして居やアがつた武家
 二人だつた、義念「ぢやア助六親分ぢやアないのか、岩次「知れたことを云
 へ、何の助六の親分が其んなことをするものか、深夜に及んで大き
 な聲で話をして居りますと、不圖おどわの取に之れが這入りまして
 さてはと思つた處から頓て籠堂から降りて参りまして、養錢函の椽を
 捉へ二人の話をして居ります側へ遣つて來ました、緞子の美しい女

が瘦せました所へ白い衣類を着て居りまして、髪は打さばいて居つ
 て一寸葉で束ね、コユツと其れへ顔を出しましたので、兩人は見る
 と、義念はキヤツと云つて仰向きに転倒つて氣絶をして、了ひました
 岩次郎の野郎は殿を引きながら奥山の方へトシトシ逃げて行つ
 て了ひました、おどわは背後を追駆ける勢ひもなく、漸う義念を色
 々と介抱を致しました、頓て氣の付きましたる義念は「義念「イヤお前
 さんはとわ、ハイ妾は助六の家内でございまして、義念「申殿ぢやアござ
 いませんせ、マアお化けが出たのか知らぬと思つたのです、貴女マ
 ア其んな所からコユツと首を出したものですから、お前さんは人を
 馬鹿にして居らつしやるとわ、本所お舟藏の殺人しは外に殺したも
 のがあるも仰しやつたが、何うぞ其れを聞かして頂きたいので、義念「其
 れは何も私が云つたのぢやアないので、貴女も御承知の北馬道の八
 百屋の悴の因果坊主の岩次郎でございませとわ、其れぢやア何ですか
 彼のものゝがさう云つたので、義念「ハイ何所かへ逃げて行つて了ひまし
 たとわ、ア、有難い、是れと云ふのも觀世音の御利益」とおどわは大

いに悦びまして、夜が明けますと漸う一本の杖に縋つて山の宿の金
 神長五郎の許へ遣つて参りましたが、乾兒の張は表を頻に掃除を致
 して居りました。乾兒、花川戸の姐御が来ました。今寢床の中で煙草を喫ん
 お早うございませぬとわ、何うぞ親分に一寸お目に掛りたうございま
 して乾兒親分、花川戸の姐御が来ました。今寢床の中で煙草を喫ん
 で居りました長五郎、漸う起出でまして寢所へ出て参りましたが、
 長五、オ、おどわ、何うやら聞けば手前は此の頃は觀音さんのお籠堂
 で斷食をして居るさうだが、餘り無理な願ひをするな、お前が是所
 で病らつて了つたら仕やうがないぢやアないかとわ、ハイ有難うござ
 います、何うも正月の十九日の晩には親分は宅に居らつしやつたの
 で滅多に其んなことはない無實の罪に違ひないと思ひまして、一心
 に觀音様を念じて居りました。漸うのことには御利益が見えました
 のでございませぬ長五、ハ、ア何う云ふ御利益かとわ、實は是れ、斯機
 く、昨夜のことを詳しく話しましてとわ、何うぞ岩次郎の所在を
 探して下さいませ、彼のものが人殺しを現在見たと云つて居りました

た長五其奴ア宜いことを聞き出したと早速乾兒の輩を呼集めまし
 て長五手前達やア是れから手分けをしてな、因果坊主の岩次郎を探
 して来て呉れ乾兒何うも親分困りますせ、彼奴は此の間も芳原の土
 手を出會ますと、イヤアお前方は金神さんの乾兒か、芳原へ行くな
 ら乃公も一緒に行かうてへなことを云やアがッて、朋輩見たやうに
 云つて居やアがるんで長五、マ、何でも宜いから探して来い
 其處で四方に手分を致しまして四五人連で芳原の方へ出掛ける奴も
 あれば、翹町の方へ行くものもあり、下谷の方へ出掛ける奴もあり
 ます、丁度一組が下谷の廣徳寺の前の所へ来ますと、今此の廣徳寺
 の門前の所に逆を敷いて其れへヒヨリと坐り「何うぞやお手前は御
 面倒さまでございませぬが、因果坊主の岩次郎でございませぬ、御一錢
 頂かして下さいませ」とヒヨイ、頭を下げて居ります。○ア、居
 る、ヤ、岩、宅の親分がさう云つて居らつしやる來い岩次、イヤ
 アハ、金神長五郎さんのお若い衆、乃公は今是所へ店を出した許
 りだ、親分にさう云つてお呉れ、後から行きますと ○巫山殿やア

がるな此畜生、親分の前へ来たらね飯を食はして呉れて、錢が欲しければ錢も呉れて遣る、乃公と一緒に行け岩次行けないと云つて居るに、今所へ店を出した許りたらう、其れ向ふから来た、彼の隠居さんは例も錢を呉れるのだ、オイ店の先を除いてお呉んなせいで、何うぞやお手許は御面倒さまで……

○未だ吐して居やアがる此畜生、オイ仕やうがねいな、何うしやう

△本當に困る奴だ、引掛げ寄つて集つて岩次郎を引掛ぎました、野郎肝を潰しまして岩次何うぞモ命許りはお助けなすつて……

と云ふ奴をドシドシ引掛いで金神の宅へ件れて歸つて來ました

○サア岩、最う斯うなつたら仕方なね、親分が新身の刀をお求めなすつたのだ、其の刀で試斬をなさるのだから覺悟をしる

岩次元談ちやアない、乃公は命が惜しいから助けてお呉れ

とワイ泣き出しました、乾兒の中には色々な戯弄をする奴がありました、猫のお枕にコラ、飯を盛りまして上から箸を一膳突差し、其の前へ水を一杯汲まして荒神棚の隣の葉を浮して

△サア之れを食へ、此の飯が此の世で食ひ納め

だ、是れは最後の水だ岩次乃公ア此んなものを食ふことは厭だ、法界さんちやアなし

△飯は食つても食はないでも殺されるのだ、根が馬鹿ですからソロ、食始めました

△ハ、ア到頭食やアがつたサア食つて了つたら庭前へ廻れ、其處で裏へ引掛つて参りますと、ワイ泣き出しました、金神の長五郎は之れを見まして長五、ヤ野郎、可憐さうに脅かして遣るな、何うした岩次何うぞ命ばかりは助けてお呉んなさい、お前さんは乃公を殺すと云つて居るが長五馬鹿を云へ、手前が強情を張るから其んなことを云つて脅かされるのだ

手前に少し用事があつて呼びに遣つたのだ、と云ふのは外さどちやアねいな、手前正月の十九日の晩に本所のお船藏前に度て居たこと云ふが、其の時人殺しがあつたのを見たか岩次、いや知らない一寸も知らないよ長五、其れでも手前昨夜觀音の境内の堂守に話をして居たぢやアないか岩次、ア、最う昨夜限り度めだ、最う些とも言はないことにした、彼の時の話をするとね親分、幽霊が出やアがつて、殺されたのは男だのに女の幽霊が出ると云ふのは不思議です長五かど

わ、一寸是所へ來い、汝を幽獄とは宜い見立てた、イヤ前夜出たのは此の女だらう、岩次「イヤ、さうだ、長五、是れは手前も知つて居るだらう、花川戸の親分さまのお内儀さんだ、岩次「ア、助六親分さんの宅のお内儀さんですか、冗談ぢやアございませんせ、前夜は恨めしい何てへ云つて……とわ馬鹿をお言ひでないよ、妾は何も其んなことを言つたことはない、お前に聞かうと思つたにお前が逃げて了つたのだ、長五「ヤ、岩、能く聞け、手前は親分には色々なものを貰つたり何かして居るだらう、親分はお船藏で人を殺したと云つてお奉行様のお白洲で酷い責苦に遭つて居るんだ、手前親分を助けやうと思ふなら其の時の人殺しは斯う云ふ顔のもので助六さんぢやアないと思ふこと、何うだ手前お奉行所へ行つて證據人になつて云つて呉れたら親分は助かる、然うすれば手前に酒でも甘へものでも何でも親分が呉れるから、何うだ此のことを云つて呉れるか、岩次「然うですか、宜うございませぬ、私はお奉行さんにさう云ひませう、けれどもお奉行さんは叱りやアしませんか、長五「其りやア大丈夫だ、乃公お奉

行さんとは親屬同様だから決して其んなことはね、遠慮なしにさう云へ、岩次「宜うございませぬ、一人はね斯う鬼死の化物のやうな顔をして居る目の怖い奴で、一人は脊の高い顔の長い奴でございませぬ、能う知つて居ます、其處で之れを證人として出るが宜からう、併し却つて身裝を推へたり何かするど可けない、矢張り此のまゝ併せて行くが宜からうと、おどわは是れから家主を頼んで願書を認め、貰ひ、因果坊主の岩次郎を證人といたして奉行渡邊大隅守に願つて出やうと云ふ一段、一寸一息入れまして伺ひます。

第九回

さてもおどわは早速その日願書を認めまして、町役附添ひの上岩次郎を證人としておどわは渡邊大隅守の白洲へ願つて出でました、右願書は淺草花川戸家主長右衛門店助六女房とわ、恐れながら願書を以つて願ひ上げ奉り候ふ、一當正月十九日夜、本所お船藏に於て人殺の一條につき、夫助六御疑ひを蒙り此度入牢罷在り候ふ次第、悉

く人達と相心得候ふに付き、段々金銭致し候ふ處、非人岩次郎と云ふもの、其の夜確かに右人殺を見届け候山申候ふ間、右岩次郎を證人として召伴れ候ふ間、何卒御吟味の程偏へに願ひ上げ奉り候ふ、と認め差出し申した、するどお、刻限に相成り申す此の者共を白洲へお呼込みに相成りましたが、大隅助六女房とわとは其方かどわハ、イ左様でございます、大隅金殿致し候ふと致してあるが、汝は何う吟味を致したとわ、ハ、正月の十九日の當日は、夫助六事は病氣でございまして、夜分とても甲冑の程から宅に打臥して居りましたので、是れは全く人達ひと心得、淺草觀世音の境内のお籠堂に籠りまして、毎夜断食を致して居りました、然るに昨夜堂守の義念と申すものと、是れなる岩次郎と話を致して居りましたのは、現在其の夜殺したと云ふものは確かに見たと申して居りました、依つて岩次郎を伴れて罷出でましたのでございます、何うぞ此のものをお調べ下し置れまするやう、大隅コリヤ岩次郎面を上げよ、岩次郎はウ、致して居ります、大隅顔を上げるのだ、岩次、ハ、何を御用でございますか、大隅、汝

は岩次郎と云ふ名前か、岩次、ハ、イ左様でございます、大隅、年齢は何才だ、岩次、エ、其れは忘れました、大隅、ウ、ウ、其方は北馬道の親の宅に在つて八百屋波世を致して居らぬと云ふが、何故又乞食になつて居るのぢや、岩次、ハ、私は八百屋が厭ひでございます、宅に居りますと最う色々な用をさせられまして、朝は早うから起され買物に行かねばなりません、乞食をして居りましたら其んなことをしないで宜うございます、寢たい時には寢ます、又腹が空つたらお貰ひに歩きますので、餘程乞食の方が宜うございます、爺は例も伴れて歸つて着物を着せたり何かしますが何うも其んなことは厭なのです、仕舞には私に坊主になれと云つて寺へ遣りました、すると又寺で用をさせますから飛出して丁つて斯う進つて乞食になつて居りますので、大隅、寺で坊主になつたと云ふか、して何と名前を命けて貰つた、岩次、エ、妙庵さんと名を命けて貰ひました、大隅、ウ、ウ、併し正月の十九日の晩にお船蔵の人殺を汝は見たと云ふが左様か、岩次、ハ、彼の日は新川の酒屋の番頭さんに酒を貰ひましてね、大隅、酔ひましたので、でお船

蔵の蔵と蔵との間の所で寝て居ましたら、其の前を鼻歌謡つて行く人があります、すると軒下から武家が現れ出でまするなり、キアツと云ひました、其の鼻歌を謡つて居た奴は其の場で殺れました、私は怖々ながら月夜でございませうから見て居りましたら二人して殺し懐中の金子を取りまして、私の枕許を引摺つて行きまして川へ投込んで了ひ、其の兩人は手を洗つてマア是れで宜いと云つて其の場を立去つて了ひました、其の時見ましたのは一人は鬼瓦のやうな怖い顔をして居る目の大きい男で、今一人は背の高い色の白い顔の長い人でございまして花川戸の親分とは大分に違ひますので、其れを前夜話して居たら金神の親分さんの所から呼びに来ましてお奉行さんの前へ出て然う云へど斯う云ひます、で云つたら叱られはせぬかと云つたら、お奉行さんとは親類だから構はないと斯様に云ひましたから、其れで私は何も彼も申上げます、助六の親分さんなら夜分でも知つて居ります、殺した奴は武家二人でございまして大隅、ウ確と其れに相違ないか岩次へい其の通りでございませう大隅、然ら

ば今でも其の武家の顔を見たら汝は存じて居るか岩次へい其れは能く知つて居ります、大隅、どわ、汝は夫へ真節の点は譽め遣はずぞ、鬼も角も其の盗賊を召捕つて了ふまでは助六は放免することは相成らぬが、成丈け上でも勤つて取らするから安心を致せ、一同は引取れ、岩次郎は是れへ殘して置くから一同の者起ちませと云ふので、其處で皆のものは其の坐を起ちましてお白洲より引取りました、岩次郎は起つて歸らうと致しますと大隅、コリヤ汝は歸ることはならぬ、真忝になりませう岩次郎、ウイ、泣出しませう岩次、金神の親分が親類だからと云ひましたから其の晩の次第を申したので、何うぞお助けなすつて下さいませう大隅、コリヤ、心得違をするな、ヤツと其れに扣へて居れ、頼て山本角左衛門をお呼出しになりました、何うか此の岩次郎を証人として市中を探し呉るゝやうのこととでございませう、山本も厄介な役を仰付けられませう、何うも致方がございませう、早速手先のものに申付けまして、漸う岩次郎を伴れて八丁堀の自分の屋敷へお歸りになりましたが、ア明日から之れを証人として

伴れて歩くにした處が、斯様な乞食の姿では甚だ困ります、一遍當
 人の身体をスツカリ洗つて遣つて頭の月代もして遣つて相當の着類
 を着せて伴れて歩かうと云ふので、兩人の手先に「んく湯を沸し
 まして、裏へ伴れて参りますと鹽へ其の湯を取りまして、〇「サア
 岩、スツカリ裸になつて身体を洗へ……イヤ何うも穢い身体をし
 て居やアがるな、手前でも身体を洗つたことはあるか岩次「エ、あり
 ます、〇何時洗つた岩次「然うですね、一昨年の夏に兩國で一遍川に
 這入りました、その時洗ひました、〇「仕やうのない奴だな、禪の代
 りに何をかいて居やアがるんだ岩次「へい、是れは淺草の觀音様の手水
 鉢の上にあつた献納手拭で、〇「驚いたな、此奴ア、其れを取
 つて了つて悉り洗へ……イヤ、春中は何だ非常な垢だ、其處で鍋
 擦を持つて参りまして頓て擦げ始めました岩次「痛い、酷いぢや
 アございませんか」云つてゐるのを「んく」洗つて遣ります、眞黒な
 汗が出ますから二杯も三杯も湯を更へまして身体を洗ひ了り、其處
 で頭の月代などをして遣り、〇「サアお上から下さつた此の禪をしめ

て此の禪を引掛けて之れを着る、帯も是所にある岩次「イヤ宜い
 着物ですな、全で若旦那見たやうだ、〇馬鹿を云やアがれ」ア何
 うやら斯うやら身体の仕舞だけは着きまして、物置に其の晩は寝か
 しました、翌日になりまして此のものをば伴れて歩くことになり
 ました、何分厄介な人物でございまして、跛を引いて歩きますか
 ら一向道が抄りません、人群集の中をば彼所此所と歩きながら角左
 何うだ、能く八方へ目を注げて居る……彼の向ふから来る武家は何
 うだ岩次「へい、何所でございます、角左向ふから此方へ来るたらう
 二人伴れで岩次「へい、角左彼のものは違ふの岩次「彼んなのぢや
 アございません、ね、旦那、角左何だ岩次「彼の料理屋の戸外に海老の
 頭でございませぬ、彼れ喰つたら甘うございませぬ、角左「此の野郎、
 餘計なことを吐すな、臆へ目を注げずと往來のものを見て歩け」其
 の日は正午過ぎまで伴れて歩きました、角左「貴様は是所に待つて居れ」と庭に
 寸致した料亭へ這入りまして、角左「貴様は是所に待つて居れ」と庭に
 腰を掛けさせ待たせて置いて山本は手先を伴れて二階へお上りにな

りました、一寸御酒を誂へ後で御飯と云ふことになりましたが角左下
 下に一人待つて居るものに何れでも宜い、有合のもので飯を一人前遣
 つて呉れるやう」頼て一寸相當の膳を拵へまして途程に飯を入れて
 持つて参りました女「サアあなた、お上りなさいまし 岩次「へい 途方
 もない是れはマア御馳走ですな、糍物……イヤア何うも結構だ、あ
 の彼女二階へ行つて旦那に然う云つてお呉んなさいませんか 女「ハ
 イ何と申しますので 岩次「彼の此んなに御馳走がありますから酒を
 一杯何うを願ひますと云つて下さい」女は二階へ上つて参りまして
 女「彼の旦那申上げます、下の御家来さんが何うぞ御酒を一杯出し
 て呉れると仰しやいますすが手先何うも仕やうがございません旦那
 大層贅澤なことを云やアがつて 角左「仕方がない一本飲まして遣つて
 呉れ」頼て一銚子燗つて来ますと 岩次「何うも結構」頼に何うも
 旦那に然う云つてお呉んなさい、此んな結構なことはございません
 お有難うさんでございませぬ、お有難うさんでございませぬ」下女は肝
 を潰しましたな、二階で之れを聞いて居りました山本角左衛門は脇

の下から冷たい汗を流しなまつて 角左「何うも困るぢやアないか 厄介
 な奴だ」と呟きました、其のうちに二階は御酒も済みまして食事
 を致し、勘定を済ませて下へ下りて参りますと、岩次「片側で
 横になつてグウ／＼」頼を發いて居ります手先「コリヤ起きぬか 岩
 此の聲に目を開いた岩次「旦那、岩次「イヤア旦那、只今は大きに御馳走様
 私「酒を飲んだら寝るのが性分でマア今日は是所で寝ます 角左「何を
 云ふ、又探して歩くんだ 岩次「探して歩くつたつて其んなことを探し
 たつて知れさうなことはございませぬ 角左「馬鹿を云ふな、参れ」
 と無理に引張つて出ますと 岩次「ねね旦那、途方もない彼の香は甘う
 ございませしたせ 角左「此の野郎、食ふこと許り云つてやがる、ソレ向
 ふから来る武家は違ふか 岩次「いゝね其んなのぢやアございませぬ、
 ねね旦那、角左「何だ 岩次「彼の向ふから杖をついて来るお爺さんの人ね
 彼の人「は 途方もない信心な人で毎朝お寺参をしますが私の顔を見た
 ら何時でも錢を呉れます、一寸旦那待つてお呉んなさいまし、何う
 どやか手許は……手先「コリヤ」
 本當の旦那困るではございませぬ